

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語の関係節内の叙法選択の基準と意味について：「特定性」と「主張」の概念と、関係節内の叙法選択を左右する諸要因

著者	三宅 陽子
学位名	博士(文学)
学位記番号	甲第40号
学位授与年月日	2013-03-06
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001330/



スペイン語の関係節内の叙法選択の基準と意味について
— 「特定性」と「主張」の概念と、関係節内の叙法選択を左右する諸要因 —

神戸市外国語大学 文化交流専攻
学籍番号 G08103 三宅陽子

目次

第1章 はじめに.....	1
1. 1. 本稿の概要.....	1
1. 2. スペイン語関係節の叙法選択と先行研究.....	2
1. 2. 1. 関係節内の叙法選択に関する先行研究.....	3
1. 3. 他の従属節における「主張」の概念.....	5
1. 4. 本論文での目的.....	7
第2章 不透明な文脈を導く主動詞と関係節の叙法選択について.....	9
2. 1. スペイン王立アカデミーの電子コーパス Corpus de Referencia del Español Actual を用いたコーパス調査.....	10
2. 1. 2. 電子コーパス CREA 調査より得られた用例.....	11
2. 1. 3. 電子コーパス CREA 調査から見られた傾向.....	20
2. 2. 電子コーパス CREA の用例を用いたインフォーマント調査.....	21
2. 2. 1. インフォーマント調査で見られた傾向.....	34
2. 3. 第2章のまとめ.....	39
第3章 先行詞に後続する関係節が現れる文の文脈と各叙法の表す意味分類について....	40
3. 1. 関係節の叙法についての確認.....	40
3. 2. 電子コーパスによる例と分析.....	40
3. 2. 1. 電子コーパスの用例の検証.....	43
3. 3. 第3章のまとめ.....	44
第4章 最上級および <i>primero</i> 、 <i>último</i> 、 <i>único</i> のような最上級と同様、先行詞の 内容を唯一的に限定する語と、後続する関係節内の叙法選択について.....	46
4. 1. 関係節を従える先行詞に最上級が現れる用法に関する先行研究と仮説.....	47
4. 1. 1. 最上級の語を持つ先行詞に続く関係節における叙法選択に 関する先行研究.....	48
4. 1. 2. 最上級の語を持つ先行詞に続く関係節における叙法選択と、否定 極性辞(<i>nunca</i> 、 <i>jamás</i> など)の関連性についての先行研.....	49
4. 1. 3. 最上級および最上級に準ずる語と関係節内の叙法選択に関する仮説....	51
4. 2. 最上級を用いた関係節内の叙法選択と否定極性辞の関係についての再考察....	52
4. 2. 1. 最上級の語を持つ先行詞に後続する関係節内の叙法選択に関する インフォーマント調査.....	53

4. 2. 2. 最上級を有する先行詞に後続する関係節内の叙法選択に関する インフォーマント調査の検証.....	57
4. 3. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語 (primero、último、único)と、関係節内の叙法選択についての再考察.....	58
4. 3. 1. Mark Davies コーパスとスペイン王立アカデミーの電子コーパス Corpus de Referencia del Español Actual を用いた調査	59
4. 3. 1. 1. Mark Davies コーパスを用いた調査	59
4. 3. 1. 2. Mark Davies コーパスから得られた用例の検証.....	62
4. 3. 1. 3. スペイン王立アカデミーの電子コーパス Corpus de Referencia del Español Actual を用いた調査.....	63
4. 3. 1. 4. 電子コーパス CREA から得られた用例の検証	65
4. 3. 2. 最上級を持つ先行詞に關係節が続く構文にかかわる Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008)たちの挙げる「比較範囲 (campo de comparación)」の概念と、最上級に準ずる語が現れる 場合について.....	67
4. 3. 2. 1. 最上級と同様に先行詞を唯一的に限定する語を有する先行詞に 後続する関係節内の叙法選択と「比較範囲」について.....	69
4. 3. 2. 2. 最上級と同様に先行詞を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、 後に關係節をしたがえる叙法選択に関するインフォーマント 調査.....	71
4. 3. 2. 3. 最上級同様に先行詞を唯一的に限定する語が先行詞に付き、 比較範囲を限定する語が現れる関係節内の叙法選択に関する インフォーマント調査.....	73
4. 3. 2. 4. 「比較範囲」と関係節内における叙法選択との関係のまとめ.....	76
4. 3. 3. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、 後続する関係節内の否定極性辞が叙法選択に与える影響について	77
4. 3. 3. 1. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞 に付き、後続する関係節内の叙法選択と、否定極性辞の關係に 関するインフォーマント調査 1	77
4. 3. 3. 2. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に 付き、後続する関係節内の叙法選択と、否定極性辞の關係に関 するインフォーマント調査 2	80
4. 3. 4. Mark Davies コーパスと電子コーパス CREA 検索からみられた 留意すべき点.....	83
4. 4. 第4章のまとめ.....	84

第5章 関係節における叙法決定と疑惑を表す副詞	
quizá(s)、probablemente、posiblemente について	86
5. 1. 電子コーパス調査とその用例について	86
5. 2. 疑惑の副詞 quizá のある関係節とインフォーマント調査	90
5. 3. インフォーマント調査の考察	94
5. 4. 第5章のまとめ	94
第6章 結論	96
6. 1. 本論文における関係節内の叙法選択を決定する基準について	96
6. 2. 第2章のまとめ	97
6. 3. 第3章のまとめ	97
6. 4. 第4章のまとめ	98
6. 5. 第5章のまとめ	101
6. 6. 本論文の結論	101
謝辞	104
参考文献	105

第1章 はじめに

1. 1. 本稿の概要

スペイン語の名詞節や副詞節内の叙法選択は比較的明確な統語的要因や意味的要因によって行われるが、関係節内の叙法選択はそれと比べると規則が見つけにくい。関係節の叙法選択は様々な要因に影響を受け決定され、また多様な意味合いを表すためであると考えられる。そこで本論文では、スペイン語の関係節における叙法選択はどのような基準によってなされ、どのような要因に関わるかについて論じていく。そのために関係節内の叙法選択と、「特定性」(especificidad)の概念、さらに「主張」(aserción)の概念の関係性について考察する。また関係節に用いられる各叙法はどのような意味を表すかについても本論文の中で考察する。

本稿は6つの章から成る。第1章では、スペイン語の関係節、および関係節の叙法選択に関する先行研究を検討する。また関係節内の叙法を決定するものとして広く唱えられてきた「特定性」という概念について、および主に関係節以外の従属節である名詞節や副詞節で用いられる接続法と「主張」の概念の関係について論述する。

第2章では、関係節内の叙法選択には主に「特定性」という概念が関わっていると考えられるが、「特定性」によって叙法が決定される背景には大きく「主張」という概念が関係していることを示す。さらに、一般に非現実を表すとされている接続法が選択された関係節を従える先行詞の内容が現実である場合について、この「主張」という概念を用いて考察する。これらの概念と関係節内の叙法選択との関係について検証するために、第2章では電子コーパス調査とそこから得られた用例を用いてインフォーマント調査を行う。

第3章では、関係節内で接続法が用いられる用法としての下位分類を行う。関係節を従える先行詞の表す意味と、その先行詞が現れる文の文脈について考察し、また関係節に用いられる各叙法の用法について論じる。関係節に直説法および接続法が現れる用例を電子コーパスから集め、それぞれの文脈や関係節が表す意味について考察する。

第4章では、先行詞に最上級の語句が現れる場合と、先行詞に *primero*、*último*、*único* など最上級と同様、被修飾語を単一の対象に限定する語が現れる場合、その後続く関係節内の叙法選択にどのような影響を与えるかについて考察する。また *no* が付かない *nunca* や *jamás* などの否定極性辞と関係節内の叙法選択について、「比較範囲」の概念を限定する語が現れる場合の影響についても考察する。なお、これらの検証は電子コーパスとインフォーマント調査を通して行う。

第5章では、*quizá(s)*などの疑惑を表す副詞が先行詞に続く関係節の中で現れる場合、関係節内の叙法選択基準にどのような影響があるかについて考察する。この考察も電子コーパスとインフォーマント調査を通じで行う。

第6章では、第1章から第5章で考察した関係節内の叙法選択と、「特定性」や「主張」の概念との関係をまとめ、また関係節においてそれぞれの叙法を用いて表そうとするもの

は何であるかについての結論を出す。

1. 2. スペイン語関係節の叙法選択と先行研究

スペイン語では、主節および従属節において、動詞に直説法、接続法、命令法のいずれかが用いられる。従属節の一つである関係節における直説法もしくは接続法が用いられ、この叙法選択の基準として、これまで主に「特定性」という概念が用いられて叙法が決定すると言われてきた。この「特定性」という概念は、スペイン語教育の面でも関係節内の叙法選択の説明として広く用いられている。

関係節の叙法選択においては、「特定性」という概念以外にも、しばしば「存在性」(existencialidad)、「指示性」(referencialidad)、また「主張」(aserción)¹などの概念が問題とされる。本稿では各々を基準として用いることの妥当性についても検討する。

この関係節内の叙法選択に見られる「特定性」という概念は、関係節を従える先行詞が、話者にとって特定か不特定かによって区別されるというものである。話者にとって先行詞が特定か不特定であるかを識別するにあたって、関係節を従える先行詞が事物や人間であれば、実在するかどうか、また先行詞が出来事であれば、確実に起こることであるかどうかという「存在性」が関与することがある。加えて先行詞が実在する事物や人間、または確実に起きる出来事であるなら、話者にとって先行詞の指示対象が明らかであるため、特定のものにとらえることができ、先行詞の「指示性」という概念が関係節内の叙法に関与することも言えるだろう。

従って、用例(1)のように、関係節が続く先行詞に *algo*, *alguien*, *alguno*, *alguna*, *algunos*, *algunas* のような不定語が現れると、先行詞が話者にとって不特定である傾向が強いため関係節内に接続法が選択されることが多い。また用例(2)のように、常にこれらの不定語が先行詞に現れば後の関係節では接続法が用いられるという統語的な要因となるわけではなく、話者にとって特定の「何か」について言及している場合は関係節内に直説法が用いられる。

(1) ¿Hay algo que *quieras* saber?

(君は何か知りたい事でもあるのか。)

(2) Hay algo que *quiero* saber.

(私には知りたいことがある。)

また否定が関連する場合にも、特定性が弱まるため接続法が選択される傾向が見られる。

¹ スペイン語の叙法選択と「主張」の概念の研究についての研究は、Terrell & Hooper (1974) を参照。「特定性」、「存在性」、「指示性」、および「主張」の概念を用いた関係節内の叙法選択に関する研究は Pérez Saldanya (1999) を参照。

否定には否定語(*nada, nadie, ninguno, ninguna*)や、否定的な意味が含まれる動詞(*prohibir, negar, hacer falta* など)や、否定の意味が含まれる前置詞(*sin, salvo* など)なども、関係節内の叙法選択に影響を与えると考えられる。用例(3)や用例(4)のように、これらの否定の要素が関係節を従える先行詞に影響を与える場合、先行詞そのものが存在しない、または先行詞の指示対象がないため、接続法が用いられると考えられる²。

(3) *No hay nadie que no muera.*

(死なない人はいない。)

(4) *Arregló el ordenador sin ningún manual que le sirviese de orientación.*

(彼は役に立つ説明書なしにそのパソコンを修理した。)(Pérez Saldanya 1999: 3263)

1. 2. 1. 関係節内の叙法選択に関する先行研究

関係節の叙法選択に関する先行研究には、次のようなものがある。

・Porto Dapena (1990)

Porto Dapena (1990)では、関係節の叙法選択に関して「特定性」の概念を用いている。この叙法選択基準は、話者からみて先行詞が特定であるか否か、または存在するか否かで決まると述べている。例えば、用例(3)の場合では、関係節内は直説法も接続法も選択可能である。

(5) *Se busca una secretaria que { sabe / sepa } inglés.* (Porto Dapena 1991:167)

(英語を話せる秘書を募集している。)

用例(5)では直説法 *sabe* が選択されるのは、先行詞である「秘書」は実在する場合であり、話者にとって特定の人物であることを示している。一方で、接続法 *sepa* が選択されるのは、先行詞である「秘書」が存在するかどうか不明で、指示対象が明らかではない場合であり、この「秘書」は話者にとって特定の人物ではないということを示すと述べている。

・Gonzalo (1990)

Gonzalo (1990)では、関係節を含む名詞句内の意味内容と関係節内の叙法選択に関して、「特定性」の概念が関係していることについて言及し、直説法は先行詞が特定である場合に用いられ、接続法は先行詞が不特定である場合に用いられるとしている。

² Pérez Saldanya (1999)によると、これら否定を表す語が関係節と関連付けられる場合、先行詞および先行詞に続く関係節はまったく存在しないことが明らかとなり、接続法のみ選択可能であるという。

さらに関係節を従える先行詞を「特徴づけの関係節」(*relativas de caracterización*)と「識別の関係節」(*relativas de identificación*)に分類して論じている。

関係節を含む名詞句は、総称、特定、種類に分類されると述べている。総称とは、*todo* や *nadie* などを指し、これらが先行詞に関係しているなら、関係節を含む名詞句の中から叙法が決定されるとしている。また特定とは、数量詞である最上級が関係節を従える先行詞に現れる場合などを指し、この場合は複合名詞句としてその語群の中から叙法が決定されるとしている。それ以外では種類とし、関係節を従える先行詞が個別のものであるか否か、種別について言及されているかなどのように、各文の文脈によって決定される場合があると述べている。

・ Pérez Saldanya (1999)

Pérez Saldanya (1999)³は、関係節内の叙法に関する説明に「特定性」、「存在性」、「指示性」といった概念も用いながら、叙法選択の大きな基準として「主張」の概念を用いている。つまり関係節内の叙法選択は、話者の「主張」の有無によって決まるとし、直説法は先行詞の指示対象について断定的な主張をする叙法、接続法は先行詞の指示対象については断定的な主張を含まない叙法であるとしている。

さらに、直説法は先行詞の指示対象が存在するため、断定するために用いられる。または先行詞が総称的なことについて言及される場合や、先行詞が特定ではなくても習慣的な事柄を表わしている場合には、話者は直接用を用いて関係節の内容を主張すると説明している。一方、接続法は先行詞の指示対象が存在するかどうか不明であるため、断定をしないために用いられるとしている。その理由は、先行詞が特定の指示性を持たない、または話者が先行詞の指示性について疑問を抱く、または先行詞が特定のものであっても、話者にとって関係節の内容が会話の基盤とはならないためだと述べている。

・ Haverkate (2002)

Haverkate (2002)は、関係節内に直説法が選択される用法として現実(*realis*)を挙げ、接続法が選択される用法としては、背景化としての(*realis*)、可能性(*potentialis*)、非現実(*irrealis*)、予想(*irrealis anticipation*)が挙げられるとしている。

また先行詞の不特定性のみによるわけではなく、関係節の種類についても扱っていると述べている。不特定の先行詞を指す場合には関係節内の叙法は接続法が選択されるのであるが、その不特定の先行詞によって表わされる実態(*entities*)の情報としての価値は低いことが予想され、またその実態を識別しても、動詞を変えても重要な役割を果たすわけではないため、この先行詞が持つ実態としての重要性は下がるとしている。さらにこの情報としての価値の低さは、関心の欠如(*lack of interest*)や無関心(*indifference*)に起因するとも述べている。

³ これは Bosque *et al.* 編 (1999)の第 50 章である。

Diagram 8

indicative → realis

subjunctive → realis (backgrounding)

potentialis

irrealis

irrealis (anticipation)

(Haverkate 2002: 193)

・ Ahern (2008)

Ahern (2008)では、関係節内において、話者が先行詞について特定の個人や個別の事物および出来事に言及するというを表す場合に直説法が用いられるとしている。一方で、関係節が続く先行詞が具体的な個人や個別の事物および出来事について言及されているわけではなく、関係節によって表される内容が起こりうるという可能性について言及されているだけなら、関係節内は接続法が選択されると述べている。

また関係節の内容が起こりうる可能性について言及されている場合とは、潜在的で具体的ではない、または不特定な実態について述べていると考えられる先行詞のことであり、後に続く関係節内では接続法が選ばれと説明している。

そして、この叙法選択がされる要因に、動詞の時制、否定、数量詞、比較構文などを挙げており、さらに関係節内で接続法を使用する場合は、目的を表す文(*oraciones finales*)において用いられる接続法の意味と似ているところがあるとも述べている。

・ Real Academia Española *et al.* (2009)

Real Academia Española (2009)では、いくつか反例は存在するが、スペイン語の接続法が表す大きな概念として「非主張性」(*naturaleza no asertiva*)を表す叙法とみる説が有力であるとしている。

また、関係節の叙法選択は原則として叙法導入辞(*inductor modal*)によって導入されるとし、その叙法導入辞は関係節を含む名詞句の語群内に見られる否定語(*nadie* など)や数量詞(*más* など)のような「内部導入辞」(*inductor interno*)と、「不透明文脈」や主動詞の「時制」、否定などのような関係節を含む名詞句の語群外に見られる「外部導入辞」(*inductor externo*)の2つに分けることができるとしている。

さらに関係節内の叙法は先行詞の「定・不定」よりも、「特定・不特定」と関係するとし、「総称性」(*genericidad*)と「習慣的状况」(*situación habitual*)に関係すると述べている。

1. 3. 他の従属節における「主張」の概念

他の従属節である名詞節と副詞節では、主に「事実ではない」という想定のもを表すときに接続法が用いられるといわれている。しかし、それらの節の中でも感情を表す名詞節と *aunque* に導かれる副詞節内で接続法が使われるのは「主張」の有無による例も存在す

るという。つまり、従属節内の動詞が接続法で表されることによって、従属節の内容は話者にとっては事実であるということ的前提としながらも、その従属節の情報としての価値はあまり高くなく、むしろ主節の内容を主な情報として伝えるようとする働きがあるとされている。また接続法を用いて従属節の内容に情報としての価値を置かない場合、その内容は聞き手にとって既知情報である場合に用いられることが多い⁴。

(6) *Me alegro de que **hayas llegado** a tiempo.*

(君が時間通りに着けてよかった。)

(7) *Aunque **sea español**, no me gusta la tortilla.*

(私はスペイン人だが、トルティージャが好きではない。)

例えば、上記の用例(6)は名詞節の中に接続法が用いられている。この名詞節の内容は「君が時間通りに着いた」であり、相手が時間通りに着いたことは事実であり、さらに目の前の相手が到着してそこにいることから、この内容は話者にも聞き手にも周知の事実である。しかし事実であるにも関わらず接続法が用いられている理由は、主節の *me alegro* 「私は嬉しい」の部分を伝えようとし、名詞節である「君が時間通りに着いたこと」は副次的な情報として表わされるためである。また周知の事実を表している従属節の中で接続法を用いることによって、話者の主張は控えられ、その情報価値はあまり高くないことが示されることとなる。さらに主節の内容の情報価値が上がり、主節が話者の伝えたい情報として主張される。

用例(7)の副詞節においても接続法が用いられており、その内容は「私はスペイン人だが」という譲歩の意味を表わしている。話者がスペイン人であることは、その場にいる聞き手にとっても明らかであり、スペイン人であることは周知の事実であるにも関わらずここに接続法を用いている。接続法が事実を示す従属節に用いられている理由は、主節の *no me gusta la tortilla* 「私はトルティージャが好きではない」の部分を話者は主張したいからである。つまりスペイン人ならトルティージャが好きであろうことは予想される。この文では、スペイン人であるにもかかわらず、想像されるうる内容とは異なり、「実はトルティージャは好きではないのだ」という部分の情報としての価値を高めているということである。そして接続法が用いられている節が意味する「スペイン人である」ことは、話者はもちろん聞き手も話者がスペイン人であることは当然わかっているため、「スペイン人である」という内容の情報価値は下がり、副次的情報として伝えられるということが言える。

上述のような名詞節と副詞節の用例に見られる接続法と非主張の概念を、すべての関係節に適用することは困難である。しかし関係節内の叙法選択は「特定性」の概念のみによって決定される訳ではなく、「主張」の概念も関係していることを本論文で考察する。

⁴ 福嶋 (2004) (2007)を参照。

1. 4. 本論文での目的

関係節内の叙法選択の基本的な基準は「特定性」という概念によるものと考えられ、この概念は多くの関係節の例に共通して見られる。「特定性」とは、先行詞が話者にとって特定の対象かどうか、また何を指すかわかっているか否かという概念であり、先行詞が特定であれば直説法を、不特定であれば接続法を用いるということを表している。

しかし先行詞が話者の特定の対象とみなす事柄であるにもかかわらず、後続する関係節に接続法が用いられている場合や、特定であるとは言い切れない先行詞に対して関係節内に直説法が用いられている場合があるため、この「特定性」という概念がすべての関係節において影響しているとは言えない。

従って、本論文では関係節内の叙法選択に影響を与えるこの「特定性」という概念を決定付けているものは、話者の「主張」という概念であるという立場に立つ。関係節における「主張」の概念とは、先行詞として機能する語が存在するか否かに対して話者が確信を持てるかどうかによって叙法が決定されるというものである。話者が先行詞を実際に知っている、または見たことがある場合や、話者は直接その先行詞とかわりはないが、先行詞の指す対象は実在する、または実現するみならず場合には、この話者の先行詞の指す対象の存在性に対する確信が高くなる。そのため多くの関係節の場合で、先行詞の指示対象が話者にとって特定であれば直説法を用いるということとつながると考えられる。またここで直説法を用いる理由として、話者は関係節の内容に疑念がないため、はっきりと主張しようとする意図が含まれるためであるということが考えられる。

一方で、話者にとって先行詞が指す対象が実在するかどうか不明である、または先行詞を説明する関係節の内容が実際に起こるかどうか不確かである場合には、話者の先行詞の指示対象の存在性に対する確信は弱まる。そして話者は関係節で表す内容を言い切るほどの確信がないため、はっきりと主張することを避けようとし、接続法を用いると考えられる。それゆえに多くの関係節が現れる文において、先行詞が話者にとって不特定であれば接続法を用いる傾向が強い。しかし常に不特定の先行詞であるがゆえに、後続する関係節内で接続法が用いられるというわけではない。つまり先行詞の指す対象が実在する場合や特定である場合でも、後続する関係節内において接続法を用いることがある。例えば、実際に起きたことを先行詞にとり、特定の事実を表すにもかかわらず、その後の関係節内では接続法を用いるジャーナリズム用法や、先行詞に最上級を表す語があり、特定のものを指しているにもかかわらず、後続の関係節において接続法を用いる場合などが挙げられる。

先行詞が不特定である場合の関係節内で接続法が選択される理由は、話者は関係節で表す内容を言い切るほどの確信がないため、断定的に主張することを避けようとするためであると考えられる。また先行詞の指す対象が不特定である場合以外に、前述したような先行詞が特定であって、後に続く関係節内に接続法を用いるジャーナリズム用法は、指示対象が不特定であるために話者は関係節の内容を言い切ることができない接続法の用法とは異なっていることは明らかである。この用法は、関係節の内容に重要性を持たせようとした

いために話者の主張を控えようとする接続法を用いて表す用法であると考えられる。

他にも最上級が先行詞に現れる場合の関係節で接続法を使用する例が挙げられるが、この構文において接続法を用いる理由は、最上級および最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語を持つ先行詞について、話者は「これまで見たことがなかった」という否定的なニュアンスを出しつつ誇張して表現したいためであると考えられる。なぜ接続法がそのような意味を表すかという、先行詞として機能する語が与える印象が非常に強いため、話者にとって一番であるということを示したいが、話者の経験や判断からだけではそう言い切れない、そして他にも先行詞を上回るものがあるかもしれないという意味を与えるために、主張を控える接続法を用いているからであると考えられる。

従って、関係節内で用いられる接続法には、まず先行詞の指す対象が存在するかどうか話者が確信を持っていない場合にはっきりとした主張を避けるための叙法としての用法が確認できる。そして、先行詞の指す対象が存在していることは明らかであるにもかかわらず、関係節で表す内容に重要性を持たせないことを目的とした主張を避ける接続法の用法と、事実であるが、否定的なニュアンスを与えるために用いる接続法の用法もあるとする。これらの接続法が使用される理由に共通していることは、接続法は話者の主張を控える叙法であるという点である。

本論文では、まず第2章で関係節における叙法選択とこれまで広く唱えられてきた「特定性」という概念の妥当性について考察する。そして関係節の多くの場合に有効な「特定性」の概念の前に、「主張」という概念が関係していることを確認し、その上で「特定性」の概念だけでは解決できない関係節のジャーナリズム用法における接続法について、「主張」の概念から検証していく。次に、第3章では関係節の叙法選択は話者の「主張」によるものであるとし、話者の主張を表す叙法である直説法が用いられた場合と、話者が主張を避ける叙法である接続法が用いられた場合、それぞれどのような意味が示されるのかについて考察し、用例を集めて各叙法が表す意味の下位分類を行う。第4章では、最上級および *primero*、*último*、*único* など最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、話者にとって特定の先行詞であるにもかかわらず、後に導かれる関係節内の接続法と「主張」の概念の関係について考察する。加えて、*no* が付かない *nunca* や *jamás* のような否定極性辞との関係についても論じる。第5章では、関係節内の叙法選択は話者が関係節の内容を主張するか控えるかによって決定されるとし、さらにそこに *quizá(s)* や *probablemente* などの疑惑の意味を表す語句が加わった場合、話者の「主張」の有無にどのような影響を与えるかについて考察していく。第6章では、関係節内の叙法選択は「特定性」の概念で決定されることが可能な例は多いが、この「特定性」によるのみ決定されるのではなく、その概念が多くの場合に有効である理由に、関係節内の叙法は話者の「主張」によって選択されるからだということを確認し、本論文の結論の章とする。

第2章 不透明性な文脈を導くことがある動詞を主動詞に従える文の補語に關係節に従える先行詞を取る場合の叙法選択について

スペイン語關係節内の叙法選択においては、これまで多くの研究者によって唱えられてきた「特定性」(*especificidad*)という概念が多数の關係節の叙法に影響を与えていると考えられる。しかし、この關係節内の叙法に「特定性」の概念が關係することは確かだが、先行詞の指す対象が話者にとって特定であるか不特定であるかによってのみ叙法が決定されるのではなく、話者の「主張」(*aserción*)の有無というものが叙法選択に大きくかかわっているとする。本章では、この「特定性」と「主張」という両方の概念が關係節内における叙法選択に影響していると言えるが、「主張」の概念は「特定性」だけでは説明が困難な叙法選択にの用例についても有効であることについて論じる。

この「特定性」とは、第1章で述べたように、關係節を用いて修飾する先行詞が話者にとって特定の対象であり、何を指すかわかっているか否かという概念である。「特定性」の概念は主に關係節内の叙法選択に用いられる。この概念によって關係節の叙法が選ばれられるとされる理由として、先行詞が話者にとって特定であり、關係節を用いて表す内容に対して話者の確信が高いため、話者の主張を表す直説法を用いることが挙げられる。一方で、關係節を用いて修飾する先行詞が話者にとって不特定で、何を指すか不明である場合、話者は關係節を用いて表す先行詞の内容について話者の確信が低い場合には、話者の主張を控える接続法を用いるということも挙げられる。

また、話者にとって先行詞が特定であるか不特定であるかによって關係節内の叙法選択が決定されるという基準は、話者が關係節を用いて表す内容に対して、どれほど確信があるかに因るものと考えられる。

「特定性」の概念は多くのスペイン語關係節の場合に有効であるが、不定語に従える名詞句に直説法に従える關係節が続く例や、特定の事柄や事実、また人物や物事を示す先行詞に接続法に従える關係節が続く場合も少なくない。後時や否定が關係する文脈では、先行詞が不特定である可能性も高く、接続法が選択される傾向が強いとされる。しかし、「特定性」によって關係節内の叙法選択がなされるのであれば、その關係節の前後に不透明な意味合いを与える要因があったとしても、話者にとって特定であれば直説法を、不特定であれば接続法を選択すると予想できる。

文の主動詞が *buscar* (探す)、*querer* (欲しがる)、*necesitar* (必要とする)のような「不透明性」を含むもので、その補語として關係節に従える先行詞が続く場合、特定の先行詞なら直説法が、一方、不特定の先行詞なら接続法が選択されると考えられる。

(8) *Busco a una secretaria que sabe inglés.*

(私は英語がわかる秘書を探している。(特定の秘書))

(9) Busco una secretaria que *sepa* inglés.

(私は英語がわかる秘書を探している。(不特定の秘書))

例えば用例(8)と用例(9)の文のように、主動詞が不透明な文脈を含む *buscar* という動詞であり、その補語が関係節を従える先行詞であることがわかる。用例(8)では、この先行詞の指す対象が話者にとって特定の秘書であるため、後に続く関係節内に直説法をとり、用例(9)では、先行詞の指す対象が不特定の秘書であるなら接続法をとると言える。

また先行詞が事実を表す内容や実際にの出来事でありながら、後に続く関係節内において接続法を使用する例も多くはないが存在する。こういった例の一部は一般にジャーナリズム用法と呼ばれるものであり、この場合には多くの関係節内で使用される「特定性」という基準で説明することは困難であると言える。

例えば Pérez Saldanya (1999)によると、接続法過去の-ra 形は事実の事柄を指すことができ、ラテン語の直説法過去完了として現在でも用いることがあり、時事スペイン語文で用いられるとしている⁵。

本章では、まず関係節内の叙法選択と「特定性」の概念の妥当性について検証していく。この検証に当たって、実際の関係節の用例を集め、それらの用例が意味するところを考察し、また関係節内の各叙法は特定か不特定かによってのみ決定されるのかについて考察する。関係節の用例を得るために、スペイン王立アカデミーの電子コーパス *Corpus de Referencia del Español Actual* (以下 CREA)を用いる。この調査では、第一に、「特定性」の概念が関係節内の叙法選択に関係するか否かについて調査することを目的とし、「不透明性」を含む動詞 *buscar*、*querer*、*necesitar* を主動詞にとり、その主動詞の補語に関係節を従える先行詞をとる用例を探す。そしてそれらの用例を分析し、「特定性」が関係節内の叙法選択の基準であるかどうかについて考察していく。

電子コーパス CREA を用いた調査で叙法選択についての分析を行った後、さらに実際に得られたデータを基に、5名のスペイン語話者に対して関係節内の叙法選択に関するインフォーマント調査を行う。この調査では、叙法選択に加えてそれぞれの叙法を用いた場合の意味やニュアンス、また違いについて尋ね、関係節における各叙法は何を表すかについて改めて考察していく。さらに、現実起きた事柄や実在する事物や人間を先行詞にとり、その後の関係節では接続法を用いるジャーナリズム用法についても考察するため、本インフォーマント調査では「特定性」のみではなく「主張」という概念が関係節内の叙法選択の基準として妥当であることに関しても検証する。

2. 1. スペイン王立アカデミーの電子コーパス *Corpus de Referencia del Español Actual*

⁵ Pérez Saldanya (1999: 3282)を参照。また Rivero (1990: 274)によると、新聞などで用いられる時事スペイン語の接続法過去-ra 形は、詳細に明確化できない性質を持っている歴史的な事実や過去の事実について言及する場合に使用することが適切であるとしている。

を用いたコーパス調査

本節では、スペイン王立アカデミーによる電子コーパス *Corpus de Referencia del Español Actual (CREA)* を用い、関係節を持つ用例を集めて叙法の傾向を読み取り、「特定性」と「主張」の概念がどのように関係するかについて調べる。「特定性」が関連しているなら、話者にとって先行詞が特定か不特定かによって直説法と接続法が用いられるだろうと考えられる。また、関係節が現れる文に不透明な要素が見られる場合でも、話者にとって先行詞の指す対象が特定であれば直説法、不特定であれば接続法が選択されているかどうかについて調査するため、主動詞は *buscar*、*querer*、*necesitar* に限定し、「特定性」の概念の妥当性と、「主張」の概念の関係について検証していく。これらの動詞を主動詞に選んだ理由は、補語に事実の事柄や実在するものや人物、つまり特定の事物や人物と、事実ではない事柄や実在しない不特定の事物や人物を従えることができるからである。

調査の方法は、これら *buscar*、*querer*、*necesitar* という動詞を、直説法現在の1人称単数形 (*busco*、*quiero*、*necesito*)、直説法線過去の1人称単数形と3人称単数形 (*buscaba*、*quería*、*necesitaba*)、直説法点過去の1人称単数形 (*busqué*、*quise*、*necesité*) で調べ、後に関係節をしたがえる先行詞が主動詞の補語となっている用例を探した。直説法線過去の *buscaba* は1人称単数形と3人称単数形のどちらも同じ形をとるため、1人称も3人称も調査の対象にした。また人間を目的語にとる場合に用いられる前置詞 *a* がこれらの主動詞の後に続く用例も検索に含めた。

2. 1. 2. 電子コーパス CREA 調査より得られた用例

以下の用例が前節で行った調査で得られた結果である⁶。主動詞が直説法現在の1人称 *busco*、直説法線過去の1人称と3人称 *buscaba*、直説法点過去の1人称 *busqué* で、後に補語として関係節をしたがえる先行詞をもつ用例を紹介する。

文の主動詞に *busco* をとる関係節を従える先行詞の用例

- (10) *Sigo siendo un adversario de la política exterior norteamericana por muchas razones, pero la más obvia porque nací en España allá por el año 47 y no encuentro por más que busco una sola razón por la que pueda sostener que lucharon por nuestra libertad, sino más bien todo lo contrario*

(私は様々な理由からアメリカの外交政策の反対者であり続けている。しかし最も明らかな理由は、私は1947年にスペインで生まれたからである。そして私たちの自由のために彼らが闘ったことを主張できる理由を私がいくら探しても1つも見つけることはできない、むしろその反対だからである。) (La Vanguardia, España, 1994)

⁶ 検索環境を書籍、新聞、雑誌、口語で、検索地域をスペイン、ラテンアメリカ各国で検索した。最終閲覧は2007年11月24日である

- (11) BUSCO PALABRAS que *intenten* describir el dolor que me aflige mi corazón, pero es tan grande que no lograré hacerlo.
 (私は私の心を悲しませている痛みを描写できるような言葉を探しているが、その痛みが大きすぎるので、見つけ出すことはできないだろう。) (El Mundo, España, 1996)
- (12) Además creo que ya no estoy tan autista como antes. Ahora busco colaboradores que me *entretengan*, pero sin que me hagan desaparecer.
 (それに、私はもう以前のような自閉症ではないと思う。今は、私の存在を尊重しつつ私を楽しませてくれるような協力者を探している。) (La Época, Chile, 1997)
- (13) ¡HOLA, AMIGOS DEL CLUB ICARITO! Me llamo Pamela, tengo 16 años y busco ciber@migos que les *guste* Placebo, Tronic, Lacrimosa, Evanescence y Lucybell. No me importa la edad.
 (イカリート・クラブのみなさん、こんにちは。私はパメラという名前で、16歳です。プラシーボやトロニックやラクリモサやエバネッセンスやルーシーベルが好きなインターネットの友達を探しています。年齢は問いません。) (Club Icarito. Suplemento de La Tercera, Chile, 2004)

用例(10)と用例(11)では、話者は先行詞の指す対象が存在するか否かについて知っているわけではなく、この先行詞の対象を特定することは不可能であり、関係節の内容を主張することはできず、関係節内で接続法を選択している。

また用例(12)と用例(13)では、話者がどのような人物を必要としているかを表している。つまり話者は先行詞の人物を実際に知っているわけではなく、これから実際に会うかどうかさえわからない状況であるため、関係節内において接続法を用いている。

文の主動詞に *buscar* の直説法線過去形 *buscaba* をとる関係節を従える先行詞の用例

- (14) Borst, el cardiólogo al que Helmut Kohl pidió consejo cuando buscaba especialistas alemanes que *podieran* ayudar a Yeltsin, salió al paso de rumores sobre un eventual trasplante y manifestó que Yeltsin es demasiado "mayor" para ello.
 (ボーストはヘルムット・コールが助言を頼んだ心臓病専門医であるが、彼はイェルツィンを助けられるようなドイツ人の専門家たちを探していたとき、移植手術が行われるかもしれないという噂に反論し、イェルツィンはそれにはもう年をとりすぎていることを明らかにした。) (El País, España, 1996)
- (15) La policía de Arizona buscaba ayer a dos de los cinco cazarrecompensas que el

domingo asaltaron una vivienda de Phoenix, aterrorizaron a una familia y abatieron a tiros a una pareja.

(昨日アリゾナ警察は、フェニックスの住宅を襲い、一家を恐喝し、夫婦を射殺した5人の賞金稼ぎ人の内2人を捜索していた。) (El País, España, 1997)

(16) Berlanga buscaba un título apócrifo que empezara con ele, y por fin dio con el de Leguineche, que ostentó durante el rodaje.

(ベルランガは L で始まる偽作のタイトルを探していた。そしてついに撮影の間見せびらかしていたレギネチェというタイトルに行きついた。) (El País, España, 1989)

(17) Con su colección de Discos oscuros, Eno buscaba una música experimental que no renunciara a la posibilidad de llamar a los sentidos y que se pudiera escuchar a varios niveles.

(彼の闇のディスクコレクションを使って、エノはセンスを呼び起こす可能性を捨てず、いくつかのレベルで聴けるような実験的な音楽を探していた。)

(El País, España, 1981)

用例(14)、(16)、(17)において、関係節をしたがえる先行詞は話者の必要としているもの、または願望を表している。関係節をしたがえる補語はこの文脈にとって最も必要なものを指しているため、まだ実在するかわからないため接続法が使用されている。

一方、用例(15)では、アリゾナ警察が前日に5人の賞金稼ぎ人の内2人を捜索していたという事実を表している。そしてこの補語に人物がとられるときに用いられる前置詞 a が見られることから先行詞の表す対象は実在のものであることが想定でき、関係節が表す内容は直説法で示されていると考えられる。

文の主動詞に busqué をとる関係節を従える先行詞の用例

(18) Para hacerlo busqué un actor que se le pareciera: rubio, atlético, de mirada dulce y muy inteligente.

(それをするために私は金髪でたくましくて、甘い目をした知性のある、彼に似た俳優を探した。) (Hoy, Chile, 1984)

(19) Después de sonarme, decidí probar con Capitanes intrépidos y, sabiendo lo que me esperaba, busqué el momento en que Manuel (Spencer Tracy) muere heroicamente en la mar.

(私は鼻をかんだ後、勇敢な船長のようにふるまおうと決めた。どうなるかはわかっていたが、マヌエル(スペンサー・トレイシー)が海で英雄らしく死ぬ瞬間を探し求めた。)

(ABC, España, 1989)

- (20) Para hablar con ella busqué en la biblioteca algunas cosas que tengo. Consulté el folleto de las Fuerzas Armadas sobre la guerra contra la subversión y me dio vergüenza.

(私は彼女と話すために書庫に置いているいくつかの物を探した。国家の転覆に対抗する戦争についての『武力』というパンフレットで調べたが、私は恥ずかしくなった。)

(Verbitsky, Horacio, *El vuelo*, Argentina, 1995)

- (21) Una vez que comprendí y comprobé que la poesía podía ser bailada como una música, busqué un poeta que tuviera un lenguaje rítmico y encontré a Guillén.

(一旦私はその詩はダンス曲の歌詞にむいているということを理解し、確認してから、リズムのある言葉づかいができるような詩人を探し、そしてギジェンと出会った。)

(Fux, María, *Danza, experiencia de vida*, Argentina, 1992)

- (22) Pero el hecho de tener que viajar hasta Tabasco, sin garantías ni referencias sobre la persona con la que pretendía entrevistarme, me había irritado. Y busqué afanosamente alguna excusa que me apareara de tan descabellado viaje.

(しかし保証も、面接する人物についての情報もないまま、タバスコ州まで旅をしないといけないことに私は怒っていた。そして私はそのとんでもない旅から逃れるための言い訳を苦勞して探した。)

(Juan José Benítez, *Caballo de Troya 1*, España, 1984)

- (23) La cogí de sus manos y busqué yo misma la fecha que me interesaba.

(私は彼女の両手を取り、そして私自身で関心のあった日付を探した。)

(Alicia Giménez Bartlett *Serpientes en el paraíso. El nuevo caso de Petra Delicado*, España, 2002)

- (24) No volví a casa inmediatamente. Me fui al puerto -también tenemos puerto en el Estado de Utah, recién hecho- y busqué a los tipos que yo suelo frecuentar en mis días de tristeza:

(私は直ぐには家に帰らなかった。ユタ州にも最近完成した港があるのだが、私は港に行き、悲しかった日々によく会った3人を探した。)

(Agustín Gómez-Arcos, *Interview de Mrs. Muerta Smith por sus fantasmas*, Teatro, España, 1991)

- (25) Los tres me miraban esperando un comentario, yo busqué una frase que no me

comprometiera y como no la encontré dije:

(その3人は私にコメントを期待しながら見ていた。そして私は私に害が及ばないような言葉を探したが、見つからなかったなので、こう言った。)

(Ibargüengoitia, Jorge, *Dos crímenes*, México, 1979)

用例(18)、(21)、(22)、(25)の関係節は先行詞に対する条件や可能性を表しているが、話者はその条件に合う先行詞を実際に手に入れることができるかどうか不明であるため、ここでは接続法が使用されている。

また用例(19)と、(23)、(24)では、主動詞が過去時制であることと、先行詞の語に定冠詞がとられていることから、これらの関係節が表す内容は実際に過去に起きた事柄であるため、直説法が使用されているということが言える。用例(20)では、先行詞に不定語 *algunas* をしたがえているが、ここでは話者自身が実際に持っているものを指しているため、先行詞は特定であり直説法を用いている。

次に、主動詞が直説法現在の1人称 *quiero*、直説法線過去の1人称と3人称 *quería*、直説法点過去の1人称 *quise* で、後に補語として関係節をしたがえる先行詞が現れる用例を紹介する。

文の主動詞に *quiero* をとる関係節を従える先行詞の用例

(26) P. M. Limitación no, pero en cuanto tengo una obra terminada sé que le va a faltar o sobrar algo y entonces quiero a expertos que me la miren.

(P.M.制限ではないが、私が作品を完成させたとき、そこには何か足りないものか、余分なものがあるはずだから、それを見てくれる専門家が必要になるだろう。)

(*La Ratonera. Revista asturiana de Teatro*, España, 2002)

(27) Sólo quiero a un hombre que me abrace y me consuele.

(ただ私は私を抱きしめて私を慰めてくれる男性が欲しい。)

(Jaime Bayly, *La mujer de mi hermano*, Perú, 2002)

(28) Quiero ser como los demás mujiks que tienen fe y penas en la vida, y llevar a cuestras las mismas cargas; quiero a una mujer que me espere en las noches, cuando vuelvo de mis incursiones.

(私は人生において信仰と苦勞を持っている他の帝政ロシア時代の農民たちのようになりたい。そして同じ重荷を背負っていきたい。つまり私が略奪から戻ると、毎晩私を待ってくれる女性が欲しい。)

(Enrique Serrano, *De parte de Dios*, Colombia, 2000)

(29) "Yo quiero un chico que se case" ¡Sí! "y que y que se case ya".

(「私は結婚してくれる男性が欲しい。」そう「すぐに結婚してくれる男性が。」)

(ORAL, Domicilio particular, conversación familiar durante una comida, Madrid, España, 年代不詳)

- (30) Se montó en el carro y cuando apretó el acelerador y se alejó de allí, dio un suspiro de alivio. Encendió la radio y Danny Rivera salió cantando "Yo quiero un pueblo que ría y que cante".

(彼は車に乗り、アクセルを踏んでそこから離れたとき、安堵の溜息をついた。そしてラジオをつけ、ダニー・リベラの「私は笑って歌う村に住みたい。」という歌詞の曲が流れてきた。) (Rosario Ferré, *La batalla de las vírgenes*, Puerto Rico, 1993)

用例(26)から(30)では、主動詞が *querer* という願望の動詞であることから、補語となっている名詞に続く関係節内では、話者にとって不特定で未確認のものである傾向が強いため接続法が使用されている。また、用例(26)から(29)では、すべて関係節内に接続法が用いられており、不特定の先行詞を指しているが、直接補語に人物をとる場合に用いられる前置詞 *a* が用いられている用例と用いられていない用例がある。これらの用例から、接続法が使用されていても、前置詞 *a* がない場合より、ある場合の方が特定性はやや高いと考えられる。

- (31) Imaginarme quiero el repelucos que sentiría Antonio Ruiz por la espina dorsal con tanta sangre de su propia sangre vestida de luces en el ruedo.

(私はアントニオ・ルイスが闘牛場で闘牛士の正装をして自らの血で背中を血まみれにしたときに感じたであろう戦慄が欲しい。) (ABC, España, 1989)

- (32) Digo: mira, quiero el informe que Rubio no me da.

(私は「ねえ、私はルビオが私に教えてくれない情報が欲しい」と言う。)

(ORAL, Esta noche cruzamos el Mississippi, España, 年代不詳)

- (33) Ahora quiero el beso que me debes.

(今私は君がすべき口づけが欲しい。)

(Nut Arel Monegal, *Para un jardín en otoño*, Uruguay, 1985)

- (34) Quiero la gloria que desprecia la burla de los hombres, que ama lo bueno por ser bueno.

(私は男性のからかういを軽蔑し、また善を善であるがゆえに求めている栄光が欲しい。)

(Isabel Hernández de Norman, *La novela criolla en las Antillas*, Puerto Rico, 1977)

用例(31)では、関係節内に直説法過去未来が用いられており、推量の意味が含まれている。また(32)から(34)の用例の中で見られる関係節の文で、主動詞が願望の動詞 *querer* にもかかわらず直説法が用いられている理由は、その先行詞は実在するもの、実際に起きたことを表しているため、話者は具体的に先行詞を特定することができるためである。話者が欲しているものは、関係節が表しているものであればどれでもいいというわけではなく、特定で一つしかないものであるからである。

文の主動詞に *quería* をとる関係節を従える先行詞の用例

(35) El Ecuador quería un presidente que gobierne, que busque consensos, que conduzca al país al desarrollo, que no atropelle, que combata la corrupción,
(エクアドルは国を統治し、国民の総意を探しだし、国を発展に導き、国を貶めることなく、腐敗に抵抗するような大統領が欲しかったのだ。) (Diario Hoy, Ecuador, 1997)

(36) A González el día se le complicó amargamente, no solo por el tránsito sino por que a la final no compró nada... quería un par de pantalones que encontró en oferta...
(その日はゴンサレスにとって辛く複雑なものになった。それは交通のことだけでなく、結局彼は何も買わなかったからである。彼はセールで見つけたズボンが欲しかったのだ。) (El Comercio, Ecuador, 2001)

用例(35)では、主動詞が直説法線過去の *quería* であることから、話者は関係節で説明しているような大統領を最終的には主語であるエクアドルは見つけることができなかつたと捉えることができる。そのため関係節内では事実ではないものを表す接続法が使用されている。

また用例(36)では、主動詞の補語となっている先行詞は話者が以前に実際にセールで見つけたズボンであるため、話者は関係節の内容を事実として主張でき、直説法を用いていることがわかる。

(37) La documentación para ti era prioritaria, para falsificar. Bueno, más que nada yo quería el dinero que hubiese en el bolso, pero como me enseñaron a hacer a hacer lo de la falsificación, pues ya aproveché.
(君は偽造の目的があるから、何よりもほしいものは書類だろう。私が何よりほしいのはその鞆にあったお金だが、偽造のことを耳にしたのでこのチャンスを生かそうと思ったのだ。) (ORAL, Madrid Directo, Telemadrid, España, 年代不詳)

この用例(37)の先行詞には定冠詞が見られ、また過去の事柄であるが、関係節で用いら

れている叙法は主張を表さない接続法である。これは、話者にとって先行詞であるお金についてはわかっているが、それが実際に鞆にあったかどうかは不確かであり、そこにあったとはっきりと主張できないため接続法が用いられていると考えられる。したがって、この用例でもし話者が鞆にそのお金があったと確信しているなら、この接続法の代わりに直説法を用いて表すことができる。

(38) Supongo que eso la hacía estar más relajada, yo no quería la información que ella debía proteger sino esa otra a la que no se concedía relevancia.

(そのことによって彼女はより安心できたと思われる。私がほしかったのは、彼女が厳守すべき情報ではなく、重要ではないその別の情報の方だった。)

(Belén Gopegui, *Lo real*, España, 2001)

用例(38)では、話者は具体的で特定の情報や人物について言及しているため直説法が選択されている。

文の主動詞に **quise** をとる関係節を従える先行詞の用例

主動詞が **querer** の点過去で1人称単数の **quise** である用例の中で、関係副詞のものはいくつか見られたが、関係代名詞のものは見つからなかった。

次に、主動詞が直説法現在の1人称 **necesito**、直説法線過去の1人称と3人称 **necesitaba**、直説法点過去の1人称 **necesité** で、後に補語として関係節をしたがえる先行詞をもつ用例を紹介する。

文の主動詞に **necesito** をとる関係節を従える先行詞の用例

(39) ¿Qué tipo de ayuda necesita usted? Yo necesito pues un bueno necesito un trabajo pues que me dé tiempo para la niña,

(どのような援助が必要ですか。そうですね、私は娘のための時間をとれるような仕事が必要です。)

(ORAL, *Esta noche cruzamos el Mississippi*, España, 年代不詳)

(40) Necesita una mujer que lo cuide, y yo necesito un hombre que me atienda. Estoy cansada de esta vida. ¡Ya no puedo más!

(彼は彼の面倒を見てくれるような女性が必要で、私は私を世話してくれる男性が必要である。私はこの生活に疲れている。もう我慢できない。)

(Parrado, Gloria, *Bembeta y Santa Rita*, Cuba, 1984)

(41) Pero necesito un amigo que me ayude. Y ese amigo serás tú.

(しかし私は私を助けてくれる友人が必要です。そしてその友人とは君のことです。)

(Daniel Gallegos, *El pasado es un extraño país*, Costa Rica, 1993)

用例(39)から(41)では、話者は主動詞の補語である先行詞が存在するかどうか不明であるため、関係節内では接続法を用いている。

文の主動詞に *necesitaba* をとる関係節を従える先行詞の用例

(42) A Giolitti, que había declarado en una entrevista que se necesitaba un presidente que no fuera un "anciano", Pertini le respondió que tenía poca memoria, porque su abuelo fue presidente del Gobierno a los noventa años.

(ある面接で、若い大統領が求められていると発言したジオリッティに、ペルティニーはあなたは記憶力が悪いですねと言った。なぜならジオリッティの祖父は 90 歳で大統領を務めたからである。)
(*El País*, España, 1978)

(43) Su director, Toni Cantó, asegura que "Valencia necesitaba un festival teatral que mostrara trabajos de calidad y de cierta vanguardia.

(その監督であるトニ・カントは、バレンシアは質が良くて前衛的な作品を披露するような演劇祭が必要であったと言った。)
(*El Cultural*, España, 2003)

(44) Amigos lo buscaron, porque se necesitaba un médico que tuviera ciertas características: que hablara alemán para que pudiese conversar con los médicos de allá y que ojalá se interesara en mi caso.

(向こうの医者と会話ができるようにドイツ語が話せて、できれば私の症状に興味を抱いてくれるというような、いくつかの特徴を持った医者が必要としていたため、友人らは彼を探した。)
(*Caras*, Chile, 1997)

用例(42)では、話者は年をとっていない人が大統領になることを望んでいて、実際にそのような人物が大統領になるかどうかは不明であるため、接続法が用いられている。また用例(43)と(44)においても、話者は実在の事柄や人物について言及している訳ではなく、ただ条件として表しているため、接続法が用いられている。

(45) Ahora mismo, yo necesitaba una información que sólo alguien como Prats podía darme.

(ブラッツのような人だけが私にくれる情報を私は必要としていた。)

(Eduard José, *Buster Keaton está aquí*, España, 1991)

用例(45)では、話者は関係節を用いて先行詞である「ある情報」について言及しているが、

これは関係節内の主語である「誰か」がその情報を確実に話者に与えてくれると知っているため、主張の叙法である直説法が用いられていると考えられる。

(46) Y, por el contrario, sus rivales del CNA se habrían instalado en el poder central. Por eso necesitaba el compromiso que ahora le ofrece garantías para la monarquía zulú y el reconocimiento de un mayor poder para el Parlamento y Ejecutivo zulúes que el que la Constitución provisional contempla para las otras provincias.

(その一方で、NAC のライバルたちは中央権力に潜んでいるかもしれなかった。そのため、彼はズールー族の王政を保証している取り決めを手に入れ、州憲法が他の州に与える権力よりも大きい権力を国会とズールー族の幹部に与えることを承認してもらう必要があった。)

(*La Vanguardia*, España, 1994)

用例(46)では、話者にとって具体的ですでに知っている「取り決め」が主動詞である *necesitaba* の補語となっているため、その発話内容をはっきりと主張するために関係節内において直説法が用いられている。

本電子コーパス調査から得られた関係節を伴う用例に見られるすべての直説法と接続法の用例を、頻度で表したものが次の表である。

表 1

	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	不定語
buscar	直説法 0 例 接続法 4 例	直説法 0 例 接続法 6 例	直説法 4 例 接続法 0 例	直説法 1 例 接続法 1 例
querer	直説法 0 例 接続法 1 例	直説法 1 例 接続法 5 例	直説法 7 例 接続法 1 例	直説法 0 例 接続法 0 例
necesitar	直説法 0 例 接続法 0 例	直説法 1 例 接続法 6 例	直説法 1 例 接続法 1 例	直説法 0 例 接続法 0 例
合計	直説法 0 例 接続法 5 例	直説法 2 例 接続法 17 例	直説法 12 例 接続法 2 例	直説法 1 例 接続法 1 例

2. 1. 3. 電子コーパス CREA 調査から見られた傾向

buscar、*querer*、*necesitar* などの動詞は、特定の事物、人間、出来事を探したり必要とする場合と、実際に存在するか否か、または実現するか否かはその時点では不明である事物や人間や出来事を探したり必要とする場合に用いられ、これらの補語として特定の名詞や不特定の名詞をとることができる。「探す」行為や「必要とする」行為は、実際に見つけ出したり、手に入れることができるかどうか不明であるため、「不透明性」が生まれやすいと考えられる。

前節ではこれらの動詞を文の主動詞にし、その補語に関係節をしたがえる先行詞をとる用例を集めて検証した。関係節をとるこれらの用例から見られたことは、一般に関係節内の叙法選択で用いられてきた「特定性」という概念に一致しているということである。

話者が先行詞は存在しているか知っている場合やどれのことであるか判明している場合は、事実として述べるため特定であることを表す直説法が用いられている。一方で、話者は先行詞が実在するのか、または実際に起きることなのか不明である場合や、総称のものや人物の特徴を説明しているだけの場合は、話者にとってその対象がどれであるのか明白ではなく、事実であると主張できないため接続法が用いられている。

主動詞が不透明性を含んでいることから、補語となる先行詞に続く関係節内では接続法が多く選択されていることがわかる。特に先行詞となる名詞が無冠詞である場合や、不定冠詞、または不定語が現れる場合は、後の関係節内において接続法の使用が目立っている。しかしその中で直説法の用例も見られるため、必ずしも不透明性が見られる主動詞の後に関係節が現れる場合、接続法だけが選ばれるわけではないということがわかる。本調査から、多くの関係節の用例で「特定性」という概念が叙法決定に有効な概念であることが確認できる。

またこの「特定性」という概念で叙法選択がなされる要因として、直説法は話者が事実であると確信しているため、その関係節の内容を主張する叙法であるとも考えることができる。またその一方で、話者が関係節で表す内容が事実であるとは言い切れない、または事実ではなく架空のこととして述べている場合、先行詞の指す対象の存在について確信がないため、接続法は主張を避ける叙法であると考えられる。

2. 2. 電子コーパスの用例を用いたインフォーマント調査

本節では、前節で得られた電子コーパスの用例⁷を用いて5名のスペイン語話者⁸にインフォーマント調査を行う。調査の方法は、実際に用いられている叙法ともう一方の叙法の両方を記した文をインフォーマントに提示し、どちらか一方、もしくは選択可能であるとみなされる場合は双方を選択させ、その理由や意味についてのコメントも求めた。叙法選択において地域差が見られることが予想されるが、適切に選択されている叙法である場合、それぞれの回答やコメントは関係節の分析において有効であるとする。またコメントがなかった回答は、空白で表す。各インフォーマントが選んだ叙法とコメントを例文の下に挙げていく。

⁷ 本インフォーマント調査に使用した用紙は前節の電子コーパス調査で得られた用例を基に作成した。本調査用紙の用例は、前節で紹介したものと、紹介していないものも含まれているが、すべて電子コーパス CREA から得られた用例から成る。

⁸ インフォーマント1はスペイン・セゴビア出身、インフォーマント2はスペイン・マドリード出身、インフォーマント3はスペイン・アルバセテ出身、インフォーマント4はアルゼンチン・ブエノスアイレス出身、インフォーマント5はチリ・サンティアゴ出身であり、インフォーマント1は研究者、インフォーマント2から5は大学院生である。

前節の電子コーパス CREA から得られた用例の中から見えた傾向として、主動詞の補語となる関係節を従える先行詞が無冠詞、不定冠詞、不定語を持つ場合は、話者はその先行詞が事実であるかどうか不明であるため不特定を表す接続法が選択されることと、一方で先行詞が定冠詞を有する場合には、先行詞は特定のものであるため話者は事実であると主張し、直説法を用いることである。

実際にスペイン語話者に叙法選択をさせ、その傾向が見られるかどうか、また他の用法が見られるかどうか検証していく。そして後に本調査で得られた回答から、関係節内の叙法選択の基準や叙法の意味について考察していく。

- (47) **Sigo siendo un adversario de la política exterior norteamericana por muchas razones, pero la más obvia porque nací en España allá por el año 47 y no encuentro por más que busco una sola razón por la que { *puede / pueda* } sostener que lucharon por nuestra libertad, sino más bien todo lo contrario.**

インフォーマント 1 : *pueda* コメント : 接続法のみ使用可能である。

インフォーマント 2 : *pueda* コメント : 条件を表している。

インフォーマント 3 : *pueda* コメント : 可能性を表している。

インフォーマント 4 : *pueda* コメント :

インフォーマント 5 : *pueda* コメント : この文で直説法は非文法的である。

- (48) **BUSCO PALABRAS que { *intentan / intenten* } describir el dolor que me aflige mi corazón, pero es tan grande que no lograré hacerlo.**

インフォーマント 1 : *intenten* コメント : どちらの場合も、接続法のみ選択可能である。

インフォーマント 2 : *intentan* コメント : 直説法 *intentan* は確実であるとみなしていることを表している。

インフォーマント 3 : *intentan, intenten* コメント : どちらの叙法も選択可能であり、接説法 *intentan* はより強い感情を表し、接続法 *intenten* はあまり重要ではないことを表す。

インフォーマント 4 : *intenten* コメント : 接続法 *intenten* は願望の意味を含んでいる。

インフォーマント 5 : *intenten* コメント : 直説法 *intentan* は非文法的である。

- (49) **Además creo que ya no estoy tan autista como antes. Ahora busco colaboradores que me { *entretienen / entretengan* }, pero sin que me hagan desaparecer. También debo proteger mi personita"**

インフォーマント1 : *entretengan* コメント : ここでは接続法のみ選択可能である。
インフォーマント2 : *entretengan* コメント : 条件を表している。
インフォーマント3 : *entretengan* コメント : この接続法は願望を表しており、それが起こる可能性は大きいことを表している。
インフォーマント4 : *entretengan* コメント : 願望を表している。
インフォーマント5 : *entretengan* コメント : 接続法を用いると総称的な事柄を表す。

- (50) ¡HOLA, AMIGOS DEL CLUB ICARITO! Me llamo Pamela, tengo 16 años y busco ciber@migos que les { *gusta / guste* } Placebo, Tronic, Lacrimosa, Evanescence y Lucybell. No me importa la edad.

インフォーマント1 : *guste* コメント : ここでは接続法のみ選択可能である。
インフォーマント2 : *guste* コメント : 条件を表している。
インフォーマント3 : *guste* コメント : 話者はまだ友人たちと知りあっていないが、これから知り合いになることを望んでいる。
インフォーマント4 : *guste* コメント : それらのグループを好きな人たちと知りたいたいという願望を表している。
インフォーマント5 : *guste* コメント : 直説法 *gusta* は使えない。

- (51) Borst, el cardiólogo al que Helmut Kohl pidió consejo cuando buscaba especialistas alemanes que { *podían / pudieran* } ayudar a Yeltsin, salió al paso de rumores sobre un eventual trasplante y manifestó que Yeltsin es demasiado "mayor" para ello.

インフォーマント1 : *pudieran* コメント : 接続法のみ選択可能である。
インフォーマント2 : *pudieran* コメント : 条件を表している。
インフォーマント3 : *podían* と *pudieran* コメント : 主語が実際にドイツ人の専門家と知り合いである場合は直説法 *podían* が選択可能であると考えられる。もし知り合いになる可能性を表しているなら接続法 *pudieran* を選択する。
インフォーマント4 : *pudieran* コメント : 願望を表している。
インフォーマント5 : *pudieran* コメント : 接続法を用いることで、具体的な専門家たちについて言及せず、総称的な専門家たちのことを表している。

- (52) La policía de Arizona buscaba ayer a dos de los cinco cazarrecompensas que el domingo { *asaltaron / asaltaran* } una vivienda de Phoenix, { *aterrorizaron / aterrorizaran* } a una familia y { *abatieron / abatieran* } a tiros a una pareja.

インフォーマント1 : *asaltaron, asaltaran, aterrorizaron, aterrorizaran, abatieron, abatieran* コメント : ここでは直説法も接続法も選択可能である。事実を知らせているため、ここでは直説法を使用する方がより一般的ではあるが、接続法の使用も不可能ではない。接続法を用いると古めかしく、文語体で表されている印象を持つ。

インフォーマント2 : *asaltaron, aterrorizaron, abatieron* コメント : 事実を表しているため直説法を用いる。

インフォーマント3 : *saltaron, asaltaran, aterrorizaron, aterrorizaran, abatieron, abatieran* コメント : どちらの叙法も使用可能である。直説法を用いると、話者はその事実により重要性を感じている。また一方で接続法を用いると、この事件が起きたことは広く一般に知られていて、話者はその詳細までは述べず、またその事件に関して話者から心的距離を置いていることがわかる。さらに話者個人のこととは関係がないような印象を受ける。この接続法は普段の会話ではなく、マスコミ、特にニュースや新聞で用いられる。

インフォーマント4 : *asaltaron, aterrorizaron, abatieron* コメント : 実際に起きた事柄について言及しているため直説法を用いる。

インフォーマント5 : *asaltaron, aterrorizaron, abatieron* コメント : ここでは先行詞の人物たちが行ったことは紛れもない事実であるため、直説法を用いる。

(53) Berlanga buscaba un título apócrifo que { *empezaba / empezara* } con ele, y por fin dio con el de Leguineche, que ostentó durante el rodaje.

インフォーマント1 : *empezara* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *empezara* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *empezara* コメント : 条件を表している。

インフォーマント4 : *empezara* コメント : 条件を表している。

インフォーマント5 : *empezara* コメント :

(54) Con su colección de Discos oscuros, Eno buscaba una música experimental que no { *renunciaba / renunciara* } a la posibilidad de llamar a los sentidos y que se { *podía / pudiera* } escuchar a varios niveles.

インフォーマント1 : *renunciara, pudiera* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *renunciara, pudiera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *renunciara, pudiera* コメント : 話者の願望ではあるが実在する可能性は大きいことを表している。

インフォーマント4 : *renunciara, pudiera* コメント : この文は話者の願望や条件を

表している。

インフォーマント5 : renunciara、pudiera コメント : 特定のことでなく、総称として表している。

- (55) Para hacerlo busqué un actor que se le { *parecía / pareciera* } : rubio, atlético, de mirada dulce y muy inteligente.

インフォーマント1 : parecía、pareciera コメント : この場合、どちらの叙法も選択可能である。接続法を用いると先行詞は特定されないことを表し、直説法を用いると先行詞が見つかったことが明らかとなる。

インフォーマント2 : pareciera コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : parecía、pareciera コメント : 直説法の場合、先行詞である俳優が金髪でたくましいかどうかはあまり重要ではなく、その俳優に出会うことがより重要であることを表している。接続法の場合、話者が探している俳優の条件を表しており、金髪でたくましく見えるということがより重要であることを表している。

インフォーマント4 : pareciera コメント : 条件を表している。

インフォーマント5 : parecía、pareciera コメント : この文で接続法を用いると、総称的なことを表し、一方でもし先行詞である俳優が実際に存在すると確信がある場合なら直説法も選択可能である。

- (56) Después de sonarme, decidí probar con Capitanes intrépidos y, sabiendo lo que me esperaba, busqué el momento en que Manuel (Spencer Tracy) { *muere / muera* } heroicamente en la mar,

インフォーマント1 : muere コメント : ここでは直説法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : muere コメント : 確かな事実を表している。

インフォーマント3 : muere コメント : 完結した事実であるため、可能性を表す接続法ではなく直説法を用いる。

インフォーマント4 : muere コメント : 過去に起きた事実を指しているため、直説法を用いる。

インフォーマント5 : muere コメント : 直説法を用いることで、話者は先行詞であるマヌエルが死ぬと知っていることを示している。

- (57) Para hablar con ella busqué en la biblioteca algunas cosas que { *tengo / tenga* }. Consulté el folleto de las Fuerzas Armadas sobre la guerra contra la subversión y me dio vergüenza.

- インフォーマント1 : **tengo** コメント : 直説法のみ選択可能である。
- インフォーマント2 : **tengo** コメント : 事実であるため直説法を用いる。
- インフォーマント3 : **tengo** コメント : 習慣的で変化のない内容を表し、話者は先行詞についてよく知っているため、接続法は選択不可能である。
- インフォーマント4 : **tengo** コメント : 事実について説明しているため、直説法を用いる。
- インフォーマント5 : **tengo** コメント : 話者は確かに先行詞の「それらのこと」を持っているため、直説法が選択される。

(58) En cambio, busqué la comprensión que, a través de su inteligencia, se { *abría / abriera* } con palabras lentamente vocalizadas y unidas al movimiento.

- インフォーマント1 : **abría, abriera** コメント : どちらの叙法も選択可能である。直説法は実際に起きた場合に用い、その一方で接続法は話者の願望を表すが、実際にどうなるかはまだ不明である場合に用いる。
- インフォーマント2 : **abría** コメント : 事実を表すため、直説法を用いる。
- インフォーマント3 : **abría** コメント : 確実に起こることを表しているため、直説法を用いる。
- インフォーマント4 : **abriera** コメント : 願望を表しているため、接続法を用いる。
- インフォーマント5 : **abría** コメント :

(59) Una vez que comprendí y comprobé que la poesía podía ser bailada como una música, busqué un poeta que { *tenía / tuviera* } un lenguaje rítmico y encontré a Guillén.

- インフォーマント1 : **tuviera** コメント : 接続法のみ選択可能である。
- インフォーマント2 : **tuviera** コメント : 条件を表している。
- インフォーマント3 : **tenía, tuviera** コメント : 直説法を用いた場合は先行詞の性質について説明し、一方で接続法を用いた場合は、先行詞である詩人を見つけ出せるという可能性について言及している。
- インフォーマント4 : **tuviera** コメント : 話者の願望を表している。
- インフォーマント5 : **tuviera** コメント : 直説法を用いたなら、話者は先行詞である詩人が存在していてどの人物であるかがわかっていることを表すが、この文ではその意味ではとれないため、接続法が望ましい。

(60) La verdad es que yo sabía de antemano que no existía compromiso alguno para

dicho viernes. Pero el hecho de tener que viajar hasta Tabasco, sin garantías ni referencias sobre la persona con la que pretendía entrevistarme, me había irritado. Y busqué afanosamente alguna excusa que me { *apeaba / apeara* } de tan descabellado viaje.

インフォーマント1 : *apeara* コメント : ここでは接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *apeara* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *apeaba, apeara* コメント : 直説法は、話者が「とんでもない旅」になる可能性を排除したい場合に用いられている。一方で、接続法はその「旅」をやめさせるための何らかの口実を表しているが、まだ実現できるかわからない場合に用いられる。

インフォーマント4 : *apeara* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *apeara* コメント :

(61) Entonces busqué una técnica que me { *permitía / permitiera* } desprenderme de aquel anhelo arcaico.

インフォーマント1 : *permitía, permitiera* コメント : この文では、話者がその技術者が実在するかどうか不明であると考えられるため接続法が望ましい。もしその技術者が実在の人物ですでにその人と知り合いであると言いたい場合は、直説法の使用も可能である。

インフォーマント2 : *permitiera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *permitía, permitiera* コメント : 直説法は話者が確実にその技術者と知り合いになることを表し、接続法はいずれ出会うであろうことを示唆している。

インフォーマント4 : *permitiera* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *permitiera* コメント : 必要とする技術者の性質を表している。

(62) La cogí de sus manos y busqué yo misma la fecha que me { *interesaba / interesara* }.

インフォーマント1 : *interesaba, interesara* コメント : どちらの叙法も選択可能であり、直説法を用いる場合は話者が興味のある「日付」を実際に探し、そして見つけた場合に用い、接続法は話者がまだその「日付」を見つけたかどうか不明な場合に用いられる。

インフォーマント2 : *interesaba, interesara* コメント : 確実なことを表しているなら直説法を、また条件を表しているなら接続法を用いる。

インフォーマント3 : *interesaba* コメント :

インフォーマント4 : *interesaba, interesara* コメント : どちらも選択可能だが、直説法は事実である場合に用い、願望を表している場合に接続法を用いる。

インフォーマント5 : *interesaba* コメント : 話者自身が「日付」について知っているため、直説法で表す。

(63) *Eran las cinco. Furiosamente busqué algo que me { distraía / distrajera }.*

インフォーマント1 : *distraera* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *distraera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *distraera* コメント : 可能性やまだ起きていないことを表している。

インフォーマント4 : *distraera* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *distraera* コメント : 話者はその何かがまだわかっていない。

(64) *Claro que puedes quedarte a dormir, aunque no lo entiendo -le miré un buen rato, busqué heridas, señales, picotazos, algo que se me { había escapado / hubiera escapado } antes.*

インフォーマント1 : *hubiera* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *hubiera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *hubiera* コメント : 以前に見たことがないという可能性を表しているため、接続法を用いる。

インフォーマント4 : *hubiera* コメント : 接続法を用いることで、過去に起きたことに関して疑惑を表している。

インフォーマント5 : *hubiera* コメント : 可能性と総称を表すため、ここでは接続法が望ましい。

(65) *Los tres me miraban esperando un comentario, yo busqué una frase que no me { comprometía / comprometiera } y como no la encontré dije:*

インフォーマント1 : *comprometía, comprometiera* コメント : この文には接続法がより適している。また話者がその「文章」を実際に探し、そして見つけた場合であれば、直説法の使用も可能である。

インフォーマント2 : *comprometiera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *comprometiera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント4 : *comprometiera* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *comprometiera* コメント : 不特定の「文章」を指している。

- (66) P. M. *Limitación no, pero en cuanto tengo una obra terminada sé que le va a faltar o sobrar algo y entonces quiero a expertos que me la { miran / miren }.*

インフォーマント1 : *miren* コメント : ここでは接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *miren* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *miren* コメント : 話者は先行詞の専門家が存在するか知らない。

インフォーマント4 : *miren* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *miren* コメント : 先行詞は特定ではない。

- (67) Yo *quiero a todas las canciones que { hemos hecho / hayamos hecho }.*

インフォーマント1 : *hemos hecho, hayamos hecho* コメント : 主動詞 *querer* の後に前置詞 *a* があることにやや違和感があるが、どちらの叙法も選択可能である。

インフォーマント2 : *hemos hecho* コメント : 事実を表している。

インフォーマント3 : *hemos hecho* コメント : 事実を表しているため、直説法が望ましい。もし主動詞 *querer* の後に前置詞 *a* がなければ接続法の選択も可能である。

インフォーマント4 : *hemos hecho* コメント : 現在までに実際に行ったことを表している。

インフォーマント5 : *hemos hecho* コメント : 主動詞 *querer* が「愛する」の意味なら、直説法のみ選択可能である。

- (68) Sólo *quiero a un hombre que me { abraza / abrace } y me { consuela / consuele }.*

インフォーマント1 : *abraze, consuele* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *abraze, consuele* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *abraze, consuele* コメント : 条件を表している。

インフォーマント4 : *abraze, consuele* コメント : どちらも願望を表している。

インフォーマント5 : *abraze, consuele* コメント : どちらも命令や条件を表している。

- (69) Yo sólo *quiero a alguien que no { hace / haga } nada. Que { pasa / pase } como un suspiro. No admiro a la gente que deja rastros.*

インフォーマント1 : *haga, pase* コメント : 接続法のみ選択可能である。

- インフォーマント2 : *haga, pase* コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : *haga, pase* コメント : この文は誰かを探しているが、まだその人物と知り合っておらず、また実在するかどうか不明であることを示している。
 インフォーマント4 : *haga, pase* コメント : 願望を表している。
 インフォーマント5 : *haga, pase* コメント :

(70) Ahora quiero un jugador con marca registrada, un jugador que { *conoce / conozca* } bien y te adelanto que va a ser un interno.

- インフォーマント1 : *conoce, conozca* コメント : どちらの叙法も選択可能である。
 インフォーマント2 : *conozca* コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : *conozca* コメント : 条件を表している文であり、これから起こることを指している。
 インフォーマント4 : *conozca* コメント : 願望を表している。
 インフォーマント5 : *conozca* コメント : 条件を表している

(71) "Yo quiero un chico que se { *casa / case* }" ¡Sí! "y que y que se case ya".

- インフォーマント1 : *case* コメント : 接続法のみ選択可能である。
 インフォーマント2 : *case* コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : *case* コメント : これから起こるであろうことについて述べているが、実際に起こるかどうかはまだ不明であることを表している。
 インフォーマント4 : *case* コメント : 願望を表している。
 インフォーマント5 : *case* コメント : 条件を表している。

(72) Se montó en el carro y cuando apretó el acelerador y se alejó de allí, dio un suspiro de alivio. Encendió la radio y Danny Rivera salió cantando "Yo quiero un pueblo que { *ríe / ría* } y que { *canta / cante* }".

- インフォーマント1 : *ríe, ría, canta, cante* コメント : どちらの叙法も選択可能である。直説法は、先行詞である「村」が実際に笑いを与え、歌うような村であり、そして話者はその村が欲しい場合に用いられる。一方で接続法は、話者が笑って歌えるような村であって欲しいが、まだ実現していないことを表している。
 インフォーマント2 : *ría, cante* コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : *ríe, ría, canta, cante* コメント : 直説法を用いると、笑って歌えるような村を実際に享受していることを表していると考えられる。接続法を用いる

と、話者は笑って歌えるという条件を表している。

インフォーマント4 : *ría, cante* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *ría, cante* コメント : 条件を表している。

- (73) Pero, nada de esos viejos que aparecían en las novelas, sino quería un jovencitos que la { *hacía / hiciera* } [*sic*] vibrar de placer.

インフォーマント1 : *hiciera* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *hiciera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *hiciera* コメント : この関係節はまだ起きていないことを表しているため、接続法を用いる。

インフォーマント4 : *hiciera* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *hiciera* コメント : 命令を表している。

- (74) A González el día se le complicó amargamente, no solo por el tránsito sino por que a la final no compró nada... quería un par de pantalones que { *encontró / encontrara* } en oferta...

インフォーマント1 : *encontró, encontrara* コメント : どちらの叙法も選択可能である。しかし「何も買わなかった」と述べていることから、彼は欲しかったズボンを見つけられなかったことが読み取れる。従って、この場合は接続法が望ましいと思われる。

インフォーマント2 : *encontró* コメント : 事実を表している。

インフォーマント3 : *encontrara* コメント : 接続法を用いることで、ズボンを探していたが見つけられなかったことを示している。

インフォーマント4 : *encontrara* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *encontró* コメント : 先行詞であるズボンは実在のものであるが、もうそこにはなかったことを表している。

- (75) Ella quería un una ciudad en la que todos { *cultivaban / cultivaran* }.

インフォーマント1 : *cultivaran* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *cultivaran* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *cultivaran* コメント : もし特定のことを示す文脈であるなら、直説法が望ましい。

インフォーマント4 : *cultivaran, cultivaban* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *cultivaran* コメント : 条件を表している。

(76) Quizá quería un amor fiel y dulce, una hermosa damita: o un amor total, brutal, desatado, pero asimismo el amor de los camaradas, el de la pelea, el amor que exhibe joyas, el amor que admira, el que { *necesita / necesite* } ser admirado.

インフォーマント1 : *necesita* コメント : 直説法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *necesita* コメント : 事実を表し、特定のものに言及している。

インフォーマント3 : *necesita* コメント : 一般的なことを意味している。

インフォーマント4 : *necesita*、*necesite* コメント : 先行詞の定冠詞が不定冠詞 *un* ならば、接続法が望ましい。

インフォーマント5 : *necesita* コメント : 話者は先行詞であるこの人物が存在することを知っている。

(77) ¿Qué tipo de ayuda necesita usted? Yo necesito pues un bueno necesito un trabajo pues que me { *da / dé* } tiempo para la niña,

インフォーマント1 : *dé* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *dé* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *dé* コメント : 仕事をえるための条件を表している。

インフォーマント4 : *dé* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *dé* コメント : 条件を表している。ここでは直説法の *un trabajo que me da* は使わない。

(78) Necesita una mujer que lo cuide, y yo necesito un hombre que me { *atiende / atiende* }. Estoy cansada de esta vida. ¡Ya no puedo más!

インフォーマント1 : *atiende* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *atiende* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *atiende* コメント : この文では、話者はそれまでに誰かにかまってもらった経験がないため、かまってくれる誰かが必要であることを示している。

インフォーマント4 : *atiende* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *atiende* コメント : かまってくれるような男性がいればよいということを表している。

(79) Si. Vale más. Pero necesito un amigo que me { *ayuda / ayude* }. Y ese amigo serás tú

- インフォーマント1 : ayude コメント : 接続法のみ選択可能である。
 インフォーマント2 : ayude コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : ayude コメント : その後、非常に重要となる条件を表している。
 インフォーマント4 : ayude コメント : 願望を表している。
 インフォーマント5 : ayude コメント : 条件を表している。

(80) Mientras Santa Fe trató de reaccionar con los tres cambios, Nacional necesitaba un hombre que { *pisaba / pisara* } la pelota, que la { *administraba / administrara* }, que no { *dejaba / dejara* } aislados a los delanteros, y Morantes fracasó en esa labor.

- インフォーマント1 : pisara、administrara、dejara コメント : いずれも接続法のみ選択可能である。
 インフォーマント2 : pisara、administrara、dejara コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : pisara、administrara、dejara コメント : 関係節は必要としている人物について表しているが、まだ見つかっていないことも意味している。
 インフォーマント4 : pisara、administrara、dejara コメント : 願望を表している。
 インフォーマント5 : pisara、administrara、dejara コメント :

(81) A Giolitti, que había declarado en una entrevista que se necesitaba un presidente que no { *era / fuera* } un "anciano", Pertini le respondió que tenía poca memoria, porque su abuelo fue presidente del Gobierno a los noventa años.

- インフォーマント1 : fuera コメント : 接続法のみ選択可能である。
 インフォーマント2 : fuera コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : fuera コメント : 条件を表している。
 インフォーマント4 : fuera コメント : 願望を表している。
 インフォーマント5 : fuera コメント : 総称的で不特定の大統領について述べている。

(82) Amate explicó que los guerristas han dicho que se necesitaba un nuevo impulso en el Gobierno que { *ilusionaba / ilusionara* } a los ciudadanos, con ministros más políticos que tomaran la iniciativa.

- インフォーマント1 : ilusionara コメント : 接続法のみ選択可能である。
 インフォーマント2 : ilusionara コメント : 条件を表している。
 インフォーマント3 : ilusionara コメント : まだ完了していないことについて述べて

おり、この接続法は条件を表している。

インフォーマント4 : *ilusionara* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *ilusionara* コメント : 条件を表している。

- (83) Su director, Toni Cantó, asegura que "Valencia necesitaba un festival teatral que { *mostraba / mostrara* } trabajos de calidad y de cierta vanguardia.

インフォーマント1 : *mostrara* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *mostrara* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *mostrara* コメント : 条件を表している。

インフォーマント4 : *mostrara* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *mostrara* コメント : 先行詞の祭りは不特定である。

- (84) Amigos lo buscaron, porque se necesitaba un médico que { *tenía / tuviera* } ciertas características: que hablara alemán para que pudiese conversar con los médicos de allá y que ojalá se interesara en mi caso.

インフォーマント1 : *tuviera* コメント : 接続法のみ選択可能である。

インフォーマント2 : *tuviera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント3 : *tuviera* コメント : 条件を表している。

インフォーマント4 : *tuviera* コメント : 願望を表している。

インフォーマント5 : *tuviera* コメント : 不特定の医者を指している。

2. 2. 1. インフォーマント調査で見られた傾向

前節で実施したインフォーマント調査で見られた傾向は、「特定性」の概念が主に関係節の叙法選択において重要な役割をもたらしているということである。主動詞が「不透明性」を帯びている動詞であるために、補語として用いられる先行詞に続く関係節には接続法が選択される用例が多い。しかし、各インフォーマントが選択した叙法とコメントで述べた内容を考慮すると、話者が関係節を用いて先行詞を説明している内容が不特定である場合や、後時的である場合、また必要なものの条件を表したり、願望を意味している接続法の使用が目立っている。一方で、実在のものや人物、また実際に起きたことを指している場合や、習慣的な事柄を指している場合には直説法を用いていることから、「特定性」という概念がこの種の関係節内の叙法選択に大きくかかわっていることがわかる。

本調査で見られた先行詞が事実である場合に用いる直説法と、条件や願望という意味合いを与える接続法は、「特定性」という基準でも説明可能であることがわかった。この基準で関係節内の叙法選択がなされる理由は、話者が関係節を用いて表す先行詞の指す対象が

存在すると確信している場合には主張を表すことができ、直説法を用いるということが考えられる。また関係節で表す先行詞の指す対象が存在するが否かについて確信がなく、明確な主張ができない場合には、接続法を用いると考えられる。

しかし、本調査で得られた結果の中で注視すべき点がある。それは、実際の電子コーパスから選ばれた用例では直説法で書かれていて、また事実に触れている文脈より直説法が選ばれることが予想される用例が、本インフォーマント調査では直説法はもちろん、接続法の使用も可能であるという回答があった。

(52) La policía de Arizona buscaba ayer a dos de los cinco cazarrecompensas que el domingo asaltaron una vivienda de Phoenix, aterrorizaron a una familia y abatieron a tiros a una pareja.

(昨日、アリゾナ警察は日曜日にフェニックスの住居を襲い、一家を恐喝し、夫婦を銃殺した5人の賞金稼ぎ人のうち2人を捜していた。) (El País, España, 1997)

電子コーパス CREA で見つかったこの例では *asaltaron*、*aterrorizaron*、*abatieron* という直説法で書かれているが、本インフォーマント調査の中で5名のインフォーマント中2名が、直説法と接続法 *asaltaran*、*aterrorizaran*、*abatieran* の選択も可能であると答えた。

この文の意味は5人の犯人が家を襲い、家族を恐喝し、夫婦を殺害したことは過去に起きた事実を示していて、現実起きた事実を表している内容であるため、直説法が選択されることが予想され、また実際の用例においても直説法が使用されている。接続法の選択も可能であると答えた2名のインフォーマントのコメントは次の通りである。

インフォーマント1：ここでは直説法も接続法も選択可能である。事実を知らせているため、ここでは直説法を使用の方がより一般的ではあるが、接続法の使用も不可能ではない。接続法を用いると古めかしく、文語体で表されている印象を持つ。

インフォーマント3：どちらの叙法も使用可能である。直説法を用いると、話者はその事実により重要性を感じている。また一方で接続法を用いると、この事件が起きたことは広く一般に知られていて、話者はその詳細までは述べず、またその事件に関して話者から心的距離を置いていることがわかる。さらに話者個人のこととは関係がないような印象を受ける。この接続法は普段の会話ではなく、マスコミ、特にニュースや新聞で用いられる。

インフォーマント1の「接続法を用いると古めかしく、文語体で表されている印象を持つ」というコメントや、インフォーマント3の「接続法を用いると、この事件が起きたことは広く一般に知られていて、話者はその詳細までは述べず、またその事件に関して話者から心的距離を置いていることがわかる。さらに話者個人のこととは関係がないような印

象を受ける。この接続法は普段の会話ではなく、マスコミ、特にニュースや新聞で用いられる」というコメントから、この関係節における接続法の使用はジャーナリズム用法と関係があると考えられる。

(85) A sus 23 años, la actriz Ana Belén ha decidido volver a la canción, que fuera su primera actividad en sus inicios cinematográficos.

(女優アナ・ベレンは映画界に入った当初、歌手だったが、23歳のとき、また歌手に戻る決心をした。)
(*Diario*, España, 1992)

(86) China está preparada para crear la Cuarta Internacional Comunista. en respuesta a los ataques de Moscú, y a las amenazas de excomunión, se anuncia que Mao Tse-tung quebrará la frágil unidad, se alejará de la Tercera Internacional, que fuera fundada en 1919 por Lenin, y que desde entonces está dominada por la Unión Soviética, y establecerá una nueva entidad mundial del comunismo.

(中国はソ連の攻撃に備えて第4インターナショナルを創設しようとしている。毛沢東は、ソ連に国交断絶の脅しをかけられたため、もろい連帯を断ちきり、レーニンによって1919年に作られて以来ソ連が支配してきた第3インターナショナルから離脱して、共産主義の新たな世界組織を作ろうとしている。)
(*Ercilla*, Chile, 1964)

(87) Yo voy —con mi maleta de cartón y mi capa— a recorrer brevemente los lugares que él recorriera.

(彼(ドン・キホーテ)が辿った道を、私も旅行かばんとコートを持って、ちょっと辿ってみようと思う。)
(Azorín, *La ruta de don Quijote*, España, 1947)

(88) Entre los presentes, se encontraba Janet McDonald, la mujer del policía de Nueva York, Sean McDonald, quien fuera asesinado en El Bronx en 1994 mientras investigaba comportamiento sospechoso de individuos en el interior de una tienda de ropa de dicho condado.

(出席者の中にはニューヨークの警官シーン・マクドナルドさんの未亡人ジャネット・マクドナルドさんもいた。シーンさんは1994年、ブロンクス地区の服飾店内で不審な人物たちを取り調べていたときに殺害されたのだった。)

(*El Diario*, Estados Unidos, 1995)

用例(85)から(88)がジャーナリズム用法を用いた文である。ジャーナリズム用法とは事実を指しているが、聞き手もすでに知っている内容であれば関係節内に接続法を用いること

ができるというものである⁹。また接続法過去-ra 形は、ラテン語の名残を持った直説法過去完了として用いられることが稀にあるため、文語的で古い用法としてとらえられることもある。文語的で古い用法ととらえられるが、この接続法-ra 形の使用はテレビのニュースやラジオのニュースでも用いられることがあるという。つまり、ニュースやラジオで聞くことがあるのは、ニュースキャスターが原稿を読み上げて発信するため、やはり書き言葉で使用されることが多いと考えられる。

接続法-ra 形として代用可能な直説法過去完了とは、ある過去の時点よりもさらに過去へ遡った時制について述べる働きがある。そのため、問題(52)に回答したインフォーマント3の「接続法を用いると、その事件に関して話者から心的距離を置いていることがわかる。さらに話者個人のこととは関係がないような印象を受ける」という意見からもわかるように、先行詞を発話時から、さらには話者自身から遠ざける働きがあると考えられる。

また現代スペイン語ではこの用法は新聞やニュースなどで用いられる傾向にあり、一般的な会話の中で習慣的にこれが用いられることは少ない。そのため本インフォーマント調査においても5名のインフォーマントの中で直説法だけでなく接続法も選択可能であると答えたのは2名のみに留まったと推測できる。

この接続法の用法は、関係節内における叙法選択基準として一般に用いられる「特定性」の概念では説明することは困難である。さらにこの接続法-ra 形をジャーナリズム用法として用いる場合には、関係節が修飾する先行詞は一般に広く知られている内容であるか、すでにそれまでに話題になった内容でなければならない。それゆえにこの接続法-ra 形は聞き手に先行詞となっている事件や出来事を思い出させる作用があると考えられる。そして話者はこの周知の事実を表している、先行詞に接続法-ra 形を用いた関係節を選択することで、「賞金稼ぎ人が一家を襲い、恐喝し、射殺した」という内容自体を主張するのではなく、主節である「昨日アリゾナ警察がその賞金稼ぎ人たちを捜索していた」という内容を主張していると考えられる。これは関係節ではあまり見られないが、名詞節や副詞節の接続法使用で見られる情報構造の概念が関係節にもかかわっている可能性があると言えるだろう。従って、ここでは「特定性」の概念で接続法が用いられているのではなく、話者の「主張」の概念が主な理由となって接続法が選択されていると言えるだろう¹⁰。

この接続法-ra 形に見られるジャーナリズム用法について、4名のスペイン語話者インフォーマントに新たに尋ねた¹¹。すでに聞き手が知っている内容が先行詞であるという設定で

⁹ 江藤 (1994)は、時事スペイン語(ジャーナリズム用法)における接続法過去形-ra 形の直説法的用法は、después de que、desde que、como そして関係節で見られるとしている。

¹⁰ Pérez Saldanya (1999: 3283)の指摘によると、この接続法過去-ra 形の使用はラテン語に由来する文語的文体の他に、現代スペイン語で見られる情報構造と関係があるとしている。また Lunn (1995)もこの用法について、関係節が修飾する先行詞について話者は聞き手もそれについて知っており、接続法過去-ra 形を用いることでそのすでに知られている情報は副次的になり、また新聞で用いられる文体としてあらかず働きがあると述べている。

¹¹ このインフォーマント調査は、ジャーナリズム用法についてのみ改めて調査したため、第2.

尋ねたが、質問する際、インフォーマントにジャーナリズム用法として接続法-ra 形が事実であり特定の先行詞に使用できることについては触れていない。次に挙げる用例(91)が調査に用いた例文である。また下線を引いている叙法は、各インフォーマントが選択した叙法であることを示す。

(89) El ministro comentó por primera vez el movimiento que { *ocurrió* / *ocurriera* } el 15 de marzo en Madrid.

(その大臣は3月15日にマドリードで起きた運動について、初めて言及した。)

インフォーマント1

(89) El ministro comentó por primera vez el movimiento que { *ocurrió* / *ocurriera* } el 15 de marzo en Madrid.

<コメント> どちらも選択可能である。直説法を用いた場合、話者はその運動が起きたことをはっきりと主張しており、一方で接続法を用いた場合はその主張をしていない。主張をしていない理由は文脈によるが、すでにその運動が起きたという情報が知られているなら、話者は先行詞である運動が起きたという情報は聞き手にとって既知の事実であるとみなしているからだと考えられる。

インフォーマント2

(89) El ministro comentó por primera vez el movimiento que { *ocurrió* / *ocurriera* } el 15 de marzo en Madrid.

<コメント> 先行詞がすでに知られている事柄なら、どちらの叙法も選択可能である。

インフォーマント3

(89) El ministro comentó por primera vez el movimiento que { *ocurrió* / *ocurriera* } el 15 de marzo en Madrid.

<コメント> 事実であるため、この文では直説法が選択される。

インフォーマント4

(89) El ministro comentó por primera vez el movimiento que { *ocurrió* / ?*ocurriera* } el 15 de marzo en Madrid.

<コメント> 直説法 *ocurrió* が正しいと思われるが、このような文で接続法を用いて話しているのを聞いたことがある。非常に違和感があるが、確かに接続法を使用しているのを

2. 節に参加した5名とは異なる。インフォーマント1はスペイン・マドリード出身、インフォーマント2はチリ・サンティアゴ出身、インフォーマント3はスペイン・マドリード出身、インフォーマント4はスペイン・タラゴナ出身であり、全員大学院生である。

聞いたことがある。

これらのインフォーマントの回答から、この文の関係節内では直説法が選択されることがより一般的であることがわかる。実際に起きたことについて述べており、話者は先行詞の指す対象に対して確信が持てるため、主張を表すという直説法本来の叙法として用いている。しかし一方で、接続法の使用も可能であるという回答や、自分では用いないがこのような関係節で接続法を用いているのを聞いたことがあるという回答が4名中3名から得られた。これは、もし先行詞および先行詞に後続する関係節の内容が聞き手もすでに知っている事柄なら、既知情報であるため、話者は接続法を用いてその既知情報に重要性を持たせようとしなない意図があると考えられる。関係節の内容は副次的情報として表され、また主節の内容を話者の伝えたい情報として主張する意図があり、主節と関係節の間の情報としての価値に差を持たせていると考えられるだろう。

2. 3. 第2章のまとめ

本章では、まず初めに関係節内において叙法選択と「特定性」および「主張」の概念の妥当性について確かめるために、電子コーパス CREA を用いてコーパス調査を行った。その結果、主動詞が「探している」または「必要としている」ものが、話者にとって特定の事柄であるなら直説法を、不特定の事柄であるなら接続法を選択している用例が多くみられた。

話者にとって先行詞の指す対象がどれであるか確信がある場合、はっきりとした主張を表すための直説法が用いられる一方で、話者は先行詞の指す対象が実在するかどうか確信がない場合、関係節が表す内容の主張を控えるため接続法を用いていると言えるだろう。

そしてインフォーマント調査からも、ほとんどの関係節の場合、この「特定性」という基準で叙法選択の説明がなされることが明らかになったが、そうでない用例も見つかった。周知の事実を説明する場合に用いるジャーナリズム用法で見られる接続法である。先行詞の内容は話者にも聞き手にも既知情報であるため、話者はそこに重要性を置かず、主張をしないために接続法を用いている。さらに話者は、主節の内容を伝えたい情報として主張するために、主節と関係節の間に情報価値としての差を持たせていると考えられる。

多くの関係節の叙法選択は、「特定性」の概念が有効であり、また特定の先行詞に接続法に従える関係節を使用することも可能であることが明らかになった。しかしどちらの場合にも、叙法選択を決定するものは「主張」の概念であると言えるだろう。

第3章 先行詞に後続する関係節を含む文の文脈と各叙法の表す意味分類について

関係節内の叙法は、常にその構造内で叙法選択が決定されるというわけではなく、関係節を取り巻く文脈も叙法選択に影響を与えると考えられる。第3章では関係節を従える先行詞を含む文の文脈と各叙法が表す意味について分析する。

本章では、一般的な関係節に用いられる各叙法について分析するため、話者にとって先行詞の指す対象が特定であれば主張を表す直説法が、また先行詞の指す対象が不特定であれば主張を控える接続法が選択される用例について考察していく¹²。

3. 1. 関係節の叙法についての確認

本論文では、先行詞に続く関係節内における叙法選択は、話者が先行詞の指す対象を実際に知っている場合や、先行詞を実際に見たことはなくても存在するものとして発話する場合には、先行詞の指す対象に対して確信が持てるため直説法を用いる。また一方で、話者にとって先行詞の指す対象が存在するか否か、または実現するか否かが不確かであるなら、先行詞に後続する関係節の内容は想定のものであり、はっきりとした主張を控えるための接続法を用いるとしている。

そこで本章では、先行詞に導かれる関係節内の叙法選択は、どのような文脈の中で決定されるかについて考察する。話者が先行詞の指す対象の存在性に確信が持てるかどうかについて、話者の視点からだけでなく、関係節および先行詞が現れる文の文脈にも視野を広げていく。この考察にあたって、電子コーパスから関係節を従える先行詞の用例を集め、その用例の文脈が表す意味と関係節内の叙法選択の関係について考察し、また直説法と特に接続法が選択される用例が表す意味を下位分類していく。

3. 2. 電子コーパスによる例と分析

本節では電子コーパス *El habla de la ciudad de Madrid: Materiales para su estudio*, Manuel Esqueva y Margarita Cantarero, 1982¹³を用いて、関係節を従える先行詞とそれを含む文脈が見られる用例を集めて調査する。関係節が現れる用例は多数見つかると考えられるため、本調査ではデータ数がある一定に限られているこの電子コーパスを使用する。

調査の方法は、不定冠詞または定冠詞を持つ名詞に直説法と接続法を有する関係節が後続する用例を選んだ。関係節およびその先行詞が現れる文脈と、先行詞に続く関係節内の接続法の表す意味について考えるため、本調査では主に接続法の例を紹介し、検証していく。なお、関係節を有する語群の用例数が多くなることを避けるため、冠詞の性に差異はみられないとみなし、男性単数形のみを選んだ。また本調査で得られた結果の中から、関

¹² 本章では第2章で扱った、ジャーナリズム用法に見られるような特殊な構造については扱わない。

¹³ このコーパスに収められているデータは、インタビュー内容をコーパス化したものであるため、口語表現である。

係代名詞の中で行われる叙法選択と関係副詞の中で行われる叙法選択を同じであるとみなし、関係副詞の用例も用いることにする。以下に紹介する本調査で得られた一部の用例は、コーパスの中の用例をそのまま引用している。

先行詞に続く関係節内に直説法が選択されている用例

- (90) Pero no; la avioneta hace un movimiento de derecha a izquierda bastante pronunciado, ¿no?, y entonces usted tira de una palanca que tiene su... a su izquierda, cae el cable que lo sujeta a usted a la avioneta, y entonces se pone usted a planear por su cuenta.

(いいえ。セスナ機は右に左によく揺れますね。その場合、そちらの左手にあるレバーを引いてください。セスナ機とあなたをつないでいるコードです。それであなた自身で操縦し始めることができます。)

- (91) Además, es la única manera de evitar un poco la rutina que te lleva a ser el... un... imperfecto burócrata, porque todavía, si fueras perfecto, pues mira... era un grado de perfección, ¿no?

(その上、それは、君が不完全な役人に陥ってしまう毎日の繰り返しを少し避けることが可能な唯一の方法である。なぜなら、もし君がまだ完全であるとするなら、それは完成度の問題だからである。)

先行詞に続く関係節内に接続法が選択されている用例

- (92) Porque ...V... se ha creado mucha fantasía con todo esto, y entonces, ahora un señor que ¡en serio! dijese: sí que existen en primer lugar.

(このことに関してたくさんの空想が作り上げられ、そして「確かに存在するんだよ」と本気で言うような男性までも作られてしまった。)

- (93) porque..., primero eso, entramos demasiado jóvenes, creo que necesitábamos dos cursos de Preuniversitario, pero no en el plan que está actualmente, sino un Preuniversitario... en el que se estudiara, ¡pst!, un plan general... de Letras, o en el que estudiaras un poco de Filosofía, Historia del Derecho, algo general,

(なぜならまず私たちは若くして大学に入ってしまったからだ。私たちには2種類の予備大学コースが必要だったんだと思う。実際にある大学のことではなく、文学や哲学や法律の歴史や一般的なものを少し勉強できるような予備大学コースみたいなものが必要だったと思う。)

- (94) Si no la saco, entonces buscaré un empleo; en principio, si puedo lograr (a)uno

que me guste, pues, una, una doble satisfacción; si no, (b)un empleo que me solucione, porque ya estoy en, en edad y en disposición de buscar soluciones, independientemente de (c)la vocación y el gusto con que me dirija a ella.

(もしその採用試験を受けないなら、何か仕事を探すだろう。私としては、(a)私が好きな仕事を得られたら、それは二重の喜びだ。もし無理なら、もう私もいい年で解決策を探す時期に来ているから、(c)私を導いてくれそうな天職や楽しみに関係なく(b)私の問題を解決できる職を探すだろう。)

(95) Sí de ahí sale tu... tu posterior actuación; lo que tú vas a hacer con un enfermo que tenga unos síntomas similares a éste, depende de lo que tú sepas que tenía realmente.

(そう、そこから君のその後の行動がわかる。君がこれに似た症状の病人とすることは、君が実際にわかっていることによるだろう。)

(96) Pero médicos, sí sí hay buenos. Médicos, no investigadores ¿no? Claro, en (a)el momento que un investigador se ponga a hacer (b)un experimento que haga falta un aparato de cuatro millones de pesetas,

(しかし確かにいい医者もいる。医者のもので、研究者のことではないのだから。もちろん、(b)四百万ペセタがかかる部品を必要とする実験を(a)ある研究者が実験をし始めるとき...)

(97) Entonces, claro, esta persona a lo mejor un amor de éstos de para toda la vida no lo podrá tener nunca; pero un amor efímero que no comprometa a nada, sí.

(では、当然この人物は一生の愛を決して得ることができないだろうが、何も約束してくれないようなつかの間の愛なら得ることができるだろう。)

(98) No, por supuesto que es un problema para una pareja que no tenga algo establecido, el tener un, un niño, ¿no? porque, o inmediatamente, bueno, la solución, si pudiese ser, sería.

(いや、もちろん子供を持つことは、安定のない夫婦にとって問題である。まあ、それがすぐに解決策になるならいいのだが。)

(99) Sí pero, pero aquí se me ha dicho que se precisaba un señor que tuviese x años, que fuese madrileño.

(はい、しかし○オでしかもマドリードの男性が必要だったとここで言われたんです。)

3. 2. 1. 電子コーパスの用例の検証

直説法が用いられている(90)の用例の文脈は、セスナ機の操縦方法についての説明である。話者も聞き手も先行詞として機能している語である「レバー」をその場で見ていることがわかる。また話者はその「レバー」を見ながら、聞き手にその使用方法を説明している。そのため、この用例では実在するものを先行詞にとり、その場で先行詞を目で確認しながら発話しているため、話者にとってそれは明らかに特定であり、確信を持って発話することができると考えられる。そのため先行詞の指す対象が存在していることに対する話者の確信は高くなり、関係節内において話者ははっきりと主張するための直説法を用いていると考えられる。

また同じく直説法を用いた用例(91)では、先行詞に定冠詞が付いているため先行詞は定性を帯びていることがわかる。そして先行詞後続する関係節の表す「不完全な役人に陥ってしまう毎日の繰り返し」という事柄は、話者と聞き手のどちらにとっても想定可能な事柄であると考えられる。つまり話者と聞き手が話題にしている「毎日のつまらない繰り返しのせいで、不完全な役人になってしまう」ということが理解されていると予想できる。この先行詞と関係節を含む名詞句の内容は事実であるとわかっており、話者の関係節の内容に対する確信が高いため、ここでは関係節内において話者の主張を表すための直説法が選ばれている。

一方、用例(92)から(99)のような関係節内に接続法が選択されている文の全体に見られる傾向は、話者にとって先行詞の指す対象が不特定なものや、後時性を伴っていることである。これらの用例の関係節内で接続法が用いられている背景には、先行詞が不特定であり実在するか否かが話者にとって不明であるため、その内容についてははっきりと主張することを避けていることが関係していると考えられる。

用例(92)では、「たくさんの空想が創り上げられた」という内容が関係節の前に来ており、先行詞である「男性」は実在の人物ではなく、話者は例えとしてその先行詞を挙げている。先行詞は存在しないことがわかっているため、主張することを避け、関係節内において接続法が用いられている。そして、接続法を用いているこの関係節を従える先行詞には、仮定の意味が含まれていると考えられる。

用例(93)の文脈では、実際に話者や聞き手が通っている大学のことでなく、話者が理想とする予備大学コースのようなものがあればよかったが、実際にはないということを示している。ここではそのような実在しない話者の理想の予備大学コースについて述べているため、はっきりと主張をすることができず、関係節内では接続法を用いている。また接続法を用いているこの関係節を従える先行詞には、話者の願望の意味が含まれていると考えられる。

用例(94)の文脈においても、話者はこれから仕事を探すつもりでいることが述べられ、関係節を従える先行詞に関しては、話者の希望する仕事について言及されている。話者の希望する仕事を実際に得ることができるか不明であるため、ここでは主張を避ける接続法

が用いられている。また接続法が用いられている関係節を従えるこの先行詞には、話者の願望の意味が含まれていると考えられる。

用例(95)の文脈では、後時のことについて述べている。その上、話者が述べたことを聞き手が実行するかどうかについての確信はないため、関係節内では主張を避けるために接続法を用いている。

用例(96)では、先行詞自体が時を表す表現の一部として用いられており、未来のことを指している。話者は後時の事柄について述べているため、実際の事柄ではなく、確信が低いと考えられる。従って、先行詞に続く関係節内では主張を避ける接続法が選択されている。

用例(97)においても、主動詞は未来形であり、後時の事柄について言及している。その上話者は、「この人物は一生の愛を得ることは無理かもしれないが、束の間の愛なら得られるだろう」という意味を関係節に含み、仮定していることがわかる。そのためこの先行詞を修飾する関係節では、この先行詞はまだ実際の事柄ではないため、話者ははっきりと主張をしない接続法が用いられていると考えられる。

用例(98)では、安定のない夫婦にとって子供を育てることは困難であるという趣旨の内容を表している。この安定のない夫婦とは特定の夫婦を指しているのではなく、一般的に安定がない夫婦たちのことを指しており、話者はどの夫婦がその関係節の表す内容に当てはまるのかは問題にしておらず、「このような夫婦の場合」という仮定を表している。そして話者は先行詞である夫婦の内容については、はっきりとした主張をすることを控えるため接続法を用いていると考えられる。

用例(99)において、必要としている先行詞の人物はどのような人物であるかについて話題にしている。そして必要としていた人物が実在するか否かは話者にとって不明であり、どの人物を指しているわけでもなく、関係節の内容が事実かどうか不明である。従って、話者は関係節の表す内容はただ必要としている先行詞の条件を述べているのみであり、主張しているわけではないため接続法を用いている。そしてこの文では話者の願望を表していると考えられる。

3. 3. 第3章のまとめ

先行詞に後続する関係節の用例の多くは、一般に「特定性」の概念で叙法選択がなされると言っていることは明らかであるが、先行詞の指す対象が存在するか否かに対する話者の確信の度合いによって、主張するための直説法を用いるか、主張を控えるための接続法を用いるかが決定される。そのため、話者は先行詞を実際に知っている場合や、先行詞を実際に見たことはなくても存在するものとして発話する場合には、関係節内で直説法が選択され、また一方で、話者は先行詞が実在するか、実現するかについて不明である場合には、関係節内で接続法が選択されると考えられる。

本節で扱った用例の内容を全体的に見ると、関係節内に直説法が選択されている用例で見られた文脈の傾向は、話者が実際に目に見えているものについて言及している、または

話者と聞き手が了解している内容について言及していることなどが挙げられる。どちらの場合も、関係節が示す内容に対して話者は、実際に目にしている、または関係節で表す内容は事実であると確信しているため、関係節でははっきりと主張する直説法が選択されている。

一方、本調査で得られた用例の中で関係節内において接続法が用いられている用例で見られた文脈の傾向は、現実のことではなく架空や想定の話をしていることである。また接続法の用例によく見られる意味は、「願望」、「仮定」、「後時」などが挙げられる。

話者の「願望」が含まれる理由には、話者が理想とする先行詞や必要としている先行詞について述べているため、関係節の内容が事実ではない、または事実であるか否かは不明であることが考えられる。従って、話者は関係節を用いるにあたって、その内容を断定するほどの確信がないため、はっきりとした主張を避ける接続法を用いる。

また接続法が用いられる用例の中に「仮定」の意味が含まれる場合は、实在の物事や人間、または実際に起きる出来事を先行詞として述べるのではなく、話者が仮定した物事や人間、出来事について述べている。そのような事実か否か不確かな先行詞にかかる関係節の内容について話者は確信がないため、主張を控える接続法を用いていると考えられる。

そして接続法が用いられている用例の中で、「後時」の意味が含まれている場合なら、発話時にはまだ事実そのようになるかどうかは不明であり、話者の確信は低いと考えられる。そのため関係節内の内容について話者ははっきりと主張することができず、接続法を選択する傾向にあると考えられる。

これらの用法に共通していることは、先行詞にかかる関係節の内容を断定しようと話者が確信を持って表そうとする場合には、はっきりと主張をする叙法である直説法を用い、その一方で関係節の表す内容を断定するほどの話者の確信が高くない場合には、はっきりとした主張を控える叙法である接続法を用いるということである。

第4章 最上級および *primero*、*último*、*único* のような最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語と、後続する関係節内の叙法選択について

前章までの考察から、スペイン語の関係節内の叙法選択には、先行詞の指す対象が存在するかどうかに対する話者の確信の度合いが関係し、確信が十分である場合には主張の直説法を、また十分な確信が持てない場合には主張を避ける接続法を選択するとした。

本章では、最上級および *primero*、*último*、*único*、*mejor*、*peor* など最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に付き、その後に関係節が続く場合の叙法選択について考察する。

Pérez Saldanya (1999)、Ahern (2008)、Real Academia Española (2009)、Ridruejo (2012)などは、この *primero*、*último*、*único*、*mejor*、*peor* などの形容詞を「最上級に準ずる語」と定めている。Pérez Saldanya (1999)によると、これらを「最上級に準ずる語」としている理由は、関係節によって築かれた体系の中で、先行詞の持つ性質が同じ性質を持つその他とは極端に異なっているという点で同等に扱うとしている。

最上級および *primero*、*último*、*único*、*mejor*、*peor* などの語が先行詞に関係節が続く場合では、話者は特定の物事や人物、または出来事を指して言及することが多いため、直説法がとられることが圧倒的に高いが、ごく稀に接続法が選ばれることもある。フランス語やイタリア語でのこの種の構文において、接続法が選ばれる頻度はスペイン語よりはるかに高い¹⁴。またスペイン語のこの構文で接続法が使用される理由に、Bello (1970)、Moliner (2007)などのフランス語からの影響があるという説まである。

あるフランス語の解説書¹⁵では、フランス語で関係代名詞の先行詞が最上級を含むなら、ほとんどの場合において接続法が選択されることについて、主観的・感情的な判断によって最上級が決定されることが多いという理由によるものであるとしている。例えば、*Monique est la plus belle fille que je connaisse.* (モニックは僕の知っているなかで一番美しい娘さんだ。)という文で接続法が用いられている理由は、美の基準は絶対的なものではないので主観的・感情的判断が前提となり、さらに話者は世界中のすべての女性を知ることなどできず、事実とはなりえないため、接続法を用いると解説している。

¹⁴ Carlsson (1969: 24) によれば、最上級または最上級に準ずる語に関係節が続く叙法について、フランス語において接続法が用いられる割合は 44%、イタリア語では 63%だという。また、最上級のみに限れば、その後の関係節内において接続法が選択される割合は、フランス語で 89%、イタリア語で 69%であるという。一方、スペイン語の *solo*、*único* に相当するフランス語の *seul*、*unique* に関係節が続く場合の接続法は 68%、イタリア語の *solo*、*único* に関係節が続く場合の接続法は 46%だという。またスペイン語の *primero*、*último* に相当するフランス語の *premier*、*dernier* に関係節が続く場合の接続法は 17%、イタリア語の *primo*、*ultimo* に続く関係節において接続法が用いられる割合は 14%であるという。

Haverkate (2002: 192)によれば、スペイン語において、最上級、またはそれに準ずる語の後に関係節を導く場合、直説法が用いられる割合は 96.7%であるという。

¹⁵ 久松 (2012: 407)を参照。

(100) Eres la chica más simpática que { *he conocido / haya conocido* }.

(君は私が知り合った中で一番親切な女性だ。)

スペイン語では、用例(100)のようにこの種の関係節では直説法と接続法の両方が選択可能であるが、実際に接続法が用いられる頻度は直説法よりも明らかに低い。また最上級を有する先行詞は特定のもの指して言及する場合が多く、関係節が続くなら直説法が選択されることは予想がつく。しかしながら、わずかではあるがこの関係節内で直説法ではなくあえて接続法が用いられることがある。そこで本章では、まず特定性が強い最上級を有する先行詞に接続法の関係節がとられる理由について論じていく。また *primero*、*último*、*único* などの語は相対的な形容詞とは異なり、限定性が強く、絶対的な形容詞であることがわかる。実際に起きたこと、存在する人物や事物、また歴史上実在した客観的事実に対しても、なぜ非現実¹⁶や話者の非主張を表す接続法を用いるのかという疑問がある。

(101) Era el primer libro que se { *había / hubiera* } publicado sobre el tema.

(それはそのテーマについて出版された初めての本であった。)

(Pérez Saldanya 1999: 3278)

例えば、用例(101)では、先行詞にあたる本が出版されるまでは、そのテーマを扱った本は出版されてこなかったため、初めての本であるということを表わす。この関係節の中で直説法も接続法も可能である理由は、*primero* が先行詞に付随しているためであると考えられる。しかし、先行詞の本は特定であり、実在することは明らかであり、さらに初めて出版されたことは事実であるのに、なぜ最上級と同様に、この場合でも接続法も可能とされるのかについてはこれまであまり議論されてこなかった。

そこで、これまで文法書や研究論文で「最上級に準ずる」とされてきた *primero* や *último* などの限定性の強いこれらの形容詞を従える場合も、果たして相対的な形容詞で表わされる最上級が現れる場合と同様に、後続する関係節内の叙法選択基準が見られるかどうかについて考えていく。

4. 1. 関係節を従える先行詞に最上級が現れる用法に関する先行研究と仮説

この現象に関して、文法書では次のような説明がされている。「特定にもかかわらず接続法が用いられるのは、誇張した文語的な文体である。」(山田 他 1995)¹⁷、「文語的であり現代スペイン語では書き言葉でも話し言葉でも使用されることは稀である。」(Butt &

¹⁶ 例えば Haverkate(2002: 193)によると、直説法は *realis*(現実)を表す叙法であり、そして接続法の役割の1つは *irrealis*(非現実)を表す叙法であるとしている。

¹⁷ 山田 他 (1995: 262)を参照。

Benjamin 2011)¹⁸。「否定文、疑問文、比較文などの関係節も、仮言的な場合は接続法を用いる。」(会田、長南 1997)¹⁹、「先行詞が最上級の場合、通常は従属節に直説法が使われるが、内容が仮定的な場合や話し手や聞き手にとって未知や不知であるときには、接続法が使われる。」(西川 2010)²⁰

これらの観察より、関係節を従える最上級を持つ先行詞において接続法が用いられる場合、誇張した文語的な文体で、実際に使用されることはわずかであり、また使用される文脈が仮定的で不確かであることがわかる。またこれらの構文では存在していることが明らかであるため、通常は直説法で表すことが多いが、あえて接続法が用いられる理由として、そこには話者の主観が込められていると捉えることができるかもしれない。関係節を従える最上級を持つ先行詞に関する先行研究には次のようなものがある。

4. 1. 1. 最上級の語を持つ先行詞に続く関係節における叙法選択に関する先行研究 ・三好 (1992)

フランス語の影響がないと考えられる古典作品の『キホテ』をコーパスとし、最上級における動詞が接続法になる要因について分析している。接続法が選択される原因を、「a. 話者の主観的意味合いの表示」、「b. 内容の仮定的性格の表示」、「c. 行為の遂行の将来時制」、「d. 主動詞の法の牽引」、「e. 動詞 *poder* のこと」、「f. 否定対極語による牽引」、「g. 主動詞の時制や意味による牽引」という点に分けている。いずれも接続法を選択する決定的な要因とはいえ、また客観的な判断は難しいとしながらも、「a. 話者の主観的意味合いの表示」は、ほぼすべての用例にあてはまるだろうという結論に至っている。

また、三好 (1992)は、スペイン語の接続法の用法には「否定的な気持ち」を表す用法があり、この「否定的な気持ち」は「未知型」と「意外型」の2種類に分けられると述べている。「未知型」はいずれか特定できない場合に見られる否定的な気持ちを表し、「意外型」は話者の頭の中の情報に反することが出現した場合に見られる否定的な気持ちを表すと述べている²¹。

・ Real Academia Española *et al.* (2009)

関係節の叙法選択は「内部導入辞」と「外部導入辞」によって決まるとし、最上級の数量詞である *más* は、「内的要因」に属し、直説法もとれるが接続法を導入することもあると述べている。また、話し言葉においては直説法が多く用いられるが、もし関係節の内容の正しさを強調したい場合や、関係節で説明されている要素の中で特に際立っている事を強

¹⁸ Butt & Benjamin (2011: 273)を参照。

¹⁹ 会田、長南 (1997: 121)を参照。

²⁰ 西川 (2010: 211)では「先行詞が最上級の場合、通常は従属節に直説法が使われるが、内容が仮定的な場合や話し手や聞き手にとって未知や不知であるときには、接続法が使われる」と説明され、主観や強調の要素については触れていない。

²¹ 三好(2005)を参照。

調する場合であれば、接続法が用いられると説明している。さらに、*solo*、*apenas*、*único* を最上級に準ずる要素として扱っている。

(102) *la novela más apasionante que yo haya leído.*

(私が読んだ中で一番情熱的な小説) (Real Academia Española *et al.* 2009: 1919)

・ Ahern (2008)

Ahern は、関係節をしたがえる最上級付きの先行詞における叙法選択は、「比較範囲 (*campo de comparación*)」に影響されるとしている²²。直説法を用いる場合は、先行詞の指示対象がはっきりしていることを示し、一方で接続法を用いる場合は、「比較範囲」が広げられ、先行詞とその先行詞と同じ特徴を持つ他の全ての名詞とが比較される働きがあるとしている。

(103) *Era el árbol más alto que haya visto jamás.*

(あれは私が今まで見た中で最も高い木だった。) (Ahern 2008: 47)

4. 1. 2. 最上級の語を持つ先行詞に続く関係節における叙法選択と、否定極性辞(*nunca*、*jamás* など)の関連性についての先行研究

・ Pérez Saldanya (1999)

最上級の叙法選択に影響を与えるものは関係節で表わされる「比較範囲」(*campo de comparación*)という概念であるとしている。もしこの「比較範囲」が具体的で限定的である場合は直説法が選択され、一方、この比較範囲が広く、抽象的、包括的、また不特定になるにつれて、接続法が選ばれる可能性が高くなると述べている。

(104) *Me regaló el libro más antiguo que { tenía / *tuviera } en su biblioteca.*

(私は、彼の図書館にある最も古い本をもらった。) (Pérez Saldanya 1999: 3278)

例えば用例(104)では、「彼の図書館で」(*en su biblioteca*)という比較範囲を限定する語があり、抽象的であると捉えることは不可能であるため、関係節内の叙法は直説法のみ許容されると説明している。

さらに Pérez Saldanya は、比較範囲を広め、抽象的で不特定にさせる要素を3つ挙げている。①最上級を持つ先行詞に続く関係節内の動詞が、潜在的意味を表す動詞 *poder* と関係する場合、②最上級を持つ先行詞に続く関係節内の動詞が、現在完了形、または過去完

²² Ahern は Carlsson (1969)、Gonzalo (1990)、Pérez Saldanya (1999)、Haverkate (2002)が提唱した *campo de comparación* の概念を用い、この構文を「比較」の1つとして記述している。

了形になる場合、③nunca、jamás、en el (todo) el mundo など包括的な否定極性辞が最上級構文に続く関係節内に現れる場合である。

(105) Es la ciudad más bella que *puedas* imaginar.
(それは君が想像しうる中で最も美しい街だ。) (Pérez Saldanya 1999: 3279)

(106) Es el profesor más interesante que { *haya tenido* / ?**tenga* }.
(彼は今まで担任になった先生の中で最も面白い先生だ。) (Ibid.)

(107) Es la ciudad más bonita que *exista* en el mundo entero.
(それは世界中に存在する中で最も綺麗な街だ。) (Ibid.)

この筆者は比較範囲を広げるこれらの3要素に関して、②最上級が現れる先行詞に後続する関係節内の動詞が現在完了形、または過去完了形になる場合と、③nunca、jamás、en el (todo) el mundo など包括的な否定極性辞が最上級を有する先行詞に続く関係節内に現れる場合を、区別した要素として挙げている。ただし、③の否定極性辞に関する説明の中で、この否定極性辞は現在完了形や過去完了形と相関関係にあり、比較範囲が限定されていない性質を強調していると述べている。

(108) Es el libro más interesante que *haya caído* nunca en mis manos.
(それは私が手にしたこれまでに最も面白い本である。) (Pérez Saldanya 1999: 3279)

なお、これらの用例に見られる不特定で抽象的なものを指す接続法と同じ意味を直説法で表すことも可能であるとしている。

・和佐 (2009)

関係節を従える最上級を持つ先行詞が、no を伴わない否定極性辞 (nunca、jamás、en mi vida など) と共起する用例における命題内容は、話者の知覚を中心とするもので、この文の発話意図は話者の称賛、驚き、嘆きなどの感情を誇張して表わすことであるとしている。そして否定極性辞が現れる理由を、そのようなものを「見るとは思わなかった」、「聞くとは思わなかった」などの対比想定を有しているためであるとする。さらに、この関係節内で直説法ではなくあえて接続法が用いられる理由は、話者自身が体験したことが事実であるとは信じられないほどだという心的態度を表わすためであるとしている。本来、irrealis の事態に接続法が用いられるが、この構文では realis の事態に対して用いられているのは、この本質的な意味が「命題に対する真偽判断を控えるモダリティ」であるためだと述べている。

(109) Es el ser humano más maravilloso que *haya visto nunca*.

(彼は私が今まで見た最も素晴らしい人物だ。)

(和佐 2009: 152)

・Ridruejo (2011)

関係節内において、否定極性辞の *nunca* や *jamás* は関係節の動詞に前置することも後置することも可能であり、さらに直説法または接続法とともに共起可能であるとしている。また、この否定極性辞は接続法との関連よりも、最上級がある先行詞とそれに後続する関係節との関連がより深いと述べている。そして、最上級を用いることで限定された要素、つまり先行詞について明確な言及をすることとなり、そのため先行詞と同等の特徴を持つ他のものは排除され、また否定的に捉えられることで、否定極性辞と共起しやすくなるとしている。

これらの先行研究の中、「a. 話者の主観的意味合いの表示」(三好 1992)や「比較範囲」(Pérez Saldanya 1999, Ahern 2008)や「話者の心的態度」(和佐 2009)は「話者の主観」という点で全体の関連性が見えると言えるかもしれない。意味や内容から考えても、この種の構文で接続法が用いられている場合、関係節の命題に対して話者が主張を避け、その他の相当するものの広範囲な存在を暗に示すことで先行詞が想像以上に例外的である、という意味合いを与えると考えられるだろう。

また、接続法の「否定的な気持ち」(三好 2005)や、*no* を伴わない否定極性辞と共起する場合の接続法が最上級を持つ先行詞に続く関係節の中で用いられる場合は、通常の否定文にみられる関係節と同じように、話者にとって否定的なニュアンスを出すといえるかもしれない。(例えば *No vimos árboles que nos diesen sombra.* (Ahern 2008) (影になるような木は見なかった。))この文の関係節内には影になる木がないことを表すために、接続法が用いられている。最上級が先行詞に現れ、後に続く関係節内に接続法を選択することによって、先行詞の名詞を話者が目にするまで、他には存在しなかったということを表すといえるだろう。また、形容詞の表す内容が今まで見てきたものよりもさらに程度が高く、他のものとは別次元であると話者がみなす場合、実際にその先行詞は存在するものであるのに、話者にとって「見たことがないくらい」、「経験したことがないくらい」、または「考えられないくらい」というような、先行詞の存在に対して否定的なニュアンスを出すと考えられる。

最上級がある先行詞に続く関係節の場合、先行詞は実在のものであり、決して不特定や指示対象が不明なものではないため、通常ならば直説法が用いられる。Carlsson (1969)も述べている通り、この構文では実際に接続法よりも直説法の用例の方が多くみられる。これに関して、第4. 3. 節においてコーパスを用いた調査から検証する。

4. 1. 3. 最上級および最上級に準ずる語と関係節内の叙法選択に関する仮説

話者は先行詞が指す対象は特定である、または実在すると知っているにも関わらず、直

説法ではなくあえて接続法を用いている理由は、「信じがたい」という否定的なニュアンスによるものと、また、接続法を用いることで聞き手の注意を喚起し、結果として話者の主観や、あるいは誇張した表現と受け取られると考えられるだろう。

話者は実在のものや人物、また実際に起きた出来事を先行詞の対象として言及するため、最上級を有する先行詞の後の関係節内では直説法が使用される傾向が強く、接続法が用いられる頻度は決して高くない。しかし、先行詞が話者に与えた印象が非常に強いため、話者が「信じがたい」または「自分の経験からだけでは実際にそうだと断定するには自信がない」という否定的な意味合いを与えたい場合は、関係節内に **no** を伴わない否定極性辞 (*nunca*, *jamás*, *en mi vida* など) を付加すると仮定する。関係節内の動詞の前に **no** を伴わない理由は、その動詞を否定するものではないためである。そして **no** を伴わない否定極性辞を用いることで、「その先行詞を目にするまでは存在しなかった」、または「その先行詞の内容を経験するまでは同じような出来事は起こらなかった」という意味を加えられると考えられる。話者は特定の先行詞について述べているなら直説法を選択することがほとんどであることが予想される。しかし、もし話者が上記のような「信じられないが」という意味合いや、「今までになかったほど」のような意味合いを出して強調したいが、そう言い切ってしまうほど話者に確信がない場合には、「他にもあるかもしれないが、その他のものを含めて考慮したとしても、なお先行詞の指す対象が1番である」という意味を出すため、接続法の使用が許容されると仮定する。それゆえに、否定極性辞を用いた場合には話者の否定的な意味合いをより強く表すこととなるため、その結果、関係節内で接続法が導かれることがあると言えるだろう。

またこの種の構文において接続法が用いられる特徴に、話し言葉より書き言葉での使用が比較的多くみられ、礼儀正しく教養のある印象を与えるという点があることから、この問題は語用論的な要因も関与していると考えられる。

そして統語的な観点から考えると、最上級および最上級に準ずる語を先行詞に付加することでその先行詞は話者にとって他とは異なる唯一性を帯びたものとなり、これが否定誘引要素として否定極性辞を導くと考えられる²³。

4. 2. 最上級を用いた関係節内の叙法選択と否定極性辞の関係についての再考察

全体的な関係節内の叙法選択の基準として、話者が先行詞の指示対象が実在するという事に確信がある場合は主張を表そうとするために直説法を用い、一方で、先行詞の指示対象が実在するかどうかについて確信が持てない場合には、主張を控えるために接続法を

²³ Real Academia Española の第 48 章「否定」(2009: 3674)を参照。最上級や最上級に準ずる語は否定誘引要素となり得ると述べている。例えば *Quizás el más largo viaje que haya realizado nadie jamás en este mundo.* (Vázquez-Figueroa, *Tuareg*)や *el único texto que vio publicado en toda su vida estaba lleno de faltas de ortografía* (Memba, *Homenaje*)という用例では、*más* や *único* が否定誘引要素となり、後に否定極性辞 *nadie jamás* や *en toda su vida* をもたらすと説明している。

用いるとした。

また、最上級に続く関係節内で接続法が選択される場合と関係するものが、否定の **no** が付かない否定極性辞 (**nunca**、**jamás** など)である。この **no** が付かない否定極性辞は関係節の動詞を否定するものではなく、その先行詞が現れるまでは他に同じようなものは全く存在しなかったが、話者がようやく初めて目にしたという先行詞を強調させる働きがあると考えられる。

これらの点をふまえ、最上級構文に続く関係節の叙法選択について、本稿では以下のよう
に3点の仮説をたてる。

- ① 最上級の語が現れる先行詞に後続する関係節の構文であっても、叙法選択の基本的な基準は他の関係節のそれと同じであるとする。
- ② 話者が先行詞の対象を实在のものと同様に認め、特定のものに言及している場合、先行詞は特定され、直説法が選ばれる傾向にあるとする。
- ③ 一方で、形容詞の指す内容の度合いが非常に高く、それまでにないことを表わすには、**no** が付かない否定極性辞が用いられるとする。そして話者がそれまで知らなかった未知のものも含めて言及する場合は、接続法を用いて先行詞に付いてはっきりとした主張を避ける。また通常用いられる直説法ではなく接続法を用いることによってさらに誇張した表現になるとする。

4. 2. 1. 最上級の語を持つ先行詞に後続する関係節内の叙法選択に関するインフォーマント調査

前述の関係節内の叙法選択と否定極性辞に関する仮説を検証するため、スペイン語話者4名²⁴によるインフォーマント調査を行った。以下の例文で、直説法か接続法のどちらか、もしくは両方が選択可能かどうか尋ね、それぞれの文や叙法が持つ意味合いまたは読んだ印象についても尋ねた。以下の各解答において、下線がある場合は選択可能、下線がない場合は選択不可能であることを示す。また疑問符と共に下線が引かれている叙法は、「選択可能な場合もあるかもしれないが、やや疑問が残る」ということを表す。

本調査では、Pérez Saldanya (1999)の3つの指摘の中で、完了形と否定極性辞がある場合は関係節内に接続法を導く傾向があるとしているため、関係節の動詞として単純形の **existir** を用いた例文を使用する。しかし否定極性辞を用いる意図として「これまでになかった」という意味をもたらすことが考えられるため、後の調査で、関係節内の動詞が完了形で書かれている例文を用いて調査する。

最初に、関係節内の動詞が **existir** であり、否定極性辞 **nunca** のない例文と、否定極性辞

²⁴ インフォーマント1はスペイン・マドリード出身、インフォーマント2はチリ・サンティアゴ出身、インフォーマント3はスペイン・マドリード出身、インフォーマント4はスペイン・タラゴナ出身であり、全員大学院生である。

のある例文を用いて調査した。調査に用いた例文は次の通りである。

(110) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* }.

(彼は現存する最も興味深い本を私に贈った。)

(111) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* } **nunca**.

(彼は私にこれまでに存在する最も興味深い本を贈った。)

インフォーマント 1

(110) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* }.

(111) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* } **nunca**. (どちらも不可)

<コメント> 問題(110)に関して、もし SF の中で *Dijo que me buscaría el libro más interesante que existiera en aquel planeta.* のような文であれば接続法の使用も可能である。また問題(111)の否定極性辞 *nunca* は「今まで」を意味するため、関係節内の動詞は完了形でなければならない。従って、直説法 *existía* も接続法 *existiera* も、この文では不適切である。Me regaló el libro más interesante que *ha existido nunca.* や Me regaló el libro más interesante que *había existido nunca.* のような完了形を用いた文であれば直説法も接続法も使用可能である。または、関係節内の動詞に *haber* を用いた Me regaló el libro más interesante que *había en la tienda.* という文なら問題がない。さらに先行詞を補語にとる動詞が過去未来形の Me dijo que me traería el libro más interesante que *hubiera en esa tienda.* のような文なら、関係節内で接続法を用いることも可能である。

インフォーマント 1 は、否定極性辞 *nunca* のない場合は関係節内では直説法を、もし主動詞が過去未来形であれば否定極性辞がなくても関係節内では接続法の選択が可能であると述べている。このインフォーマントは後時制が見えなければ、関係節内での接続法の使用は難しいと考えていることがわかる。

インフォーマント 2

(110) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* }.

(111) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* } **nunca**.

<コメント> 否定極性辞 *nunca* がなければ直説法が好ましいが、ある場合は接続法使用の可能性も上がる。

インフォーマント 2 のコメントから、否定極性辞 *nunca* を加えることで関係節内において接続法を使用する可能性が高まるということが推察できる。

インフォーマント 3

(110) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* }.

(111) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* } **nunca**.

<コメント> 否定極性辞 *nunca* がなければ、関係節内では直説法も接続法も使用可能であるが、否定極性辞があるなら接続法を用いることが望ましい。

インフォーマント3のコメントからも、否定極性辞 *nunca* を用いると関係節内では接続法を選択する可能性が高くなることがわかる。

インフォーマント4

(110) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* }.

(111) Me regaló el libro más interesante que { *existía* / *existiera* } **nunca**.

<コメント> 問題(110)では、どちらの叙法も選択可能である。一方で問題(111)では接続法が望ましい。否定極性辞 *nunca* のない(110)の文で接続法を用いた場合と、否定極性辞 *nunca* がある(111)の文で接続法を用いた場合の意味は同じであると考えられる。

インフォーマント4の回答からも、否定極性辞 *nunca* がある場合は接続法が望ましいことがわかる。

後時制が見られる場合と、否定極性辞 *nunca* がある場合には関係節内で接続法を選択する許容度が上がると考えられる。

インフォーマント1の指摘を基に、関係節内の動詞が完了形である文でも調査を行った。関係節内の動詞が完了形であり、否定極性辞がある例文とない例文および各インフォーマントの回答は次の通りである。

(112) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* }.

(それは私が見た最も興味深い本である。)

(113) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* } **nunca**.

(それは私が今まで見た中で最も興味深い本である。)

インフォーマント1

(112) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* }.

(113) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* } **nunca**.

<コメント> 問題(112)、(113)ともに関係節内の主語が1人称であるなら接続法 *haya visto* は難しい。ただし、主語を3人称と考えると、問題(112)、(113)ともに接続法を選択することも可能である。

インフォーマント1は、否定極性辞の有無にかかわらず、どちらの場合も直説法を選んだ。この例文の関係節内の主語は1人称であり、自分自身が明らかに特定のものを指して発話しているため、この例文では不特定のものを表わす接続法を選ぶことは不可能であるということがわかる。よって、否定極性辞 *nunca* をしたがえる問題(113)の場合であっても、特定の先行詞を指しているこの例では、接続法の使用は不可能であると答えた。また、このインフォーマントのコメントの中で、もしこの関係節内の主語が3人称であると考えれば、否定極性辞 *nunca* がある問題(113)においても接続法の選択が可能であると述べている。この理由は、話者自身についてではなく、第3者について発話する場合、話者にとって関係節が表わす内容が事実であるか否かは不確かであるため、接続法が選択可能であると考えられる。したがって、このインフォーマントの選択結果より、最上級であっても関係節内の叙法選択は、通常の関係節内の叙法選択と同様になされると言えるだろう。

インフォーマント2

(112) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* }.

(113) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* } **nunca**.

<コメント> 問題(113)の否定極性辞 *nunca* は強調と驚きの意味があると思われる。また *nunca* がある場合、直説法も接続法も違和感はないが、自分が使うなら直説法を選ぶかもしれない。

インフォーマント2は、否定極性辞のない問題(112)では直説法のみを、否定極性辞のある(113)の文では直説法と接続法の両方を選択した。否定極性辞がない場合は直説法を選んでいることから、やはり話者にとって特定の先行詞について言及しているため接続法選択は難しいと考えられる。しかし一方で、否定極性辞がある場合にはやはり直説法を選びながらも、接続法の使用も可能であると述べている。このことから、否定極性辞はこれまでに存在しなかったことを表わし、そして接続法で話者の知らなかったものについても暗に言及することによって、より強調した意味合いを持たせると言えるだろう。

インフォーマント3

(112) Es el libro más interesante que { *he visto* / *?haya visto* }.

(113) Es el libro más interesante que { *he visto* / *haya visto* } **nunca**.

<コメント> 問題(112)は特定の本について話している。問題(113)の直説法は、他にもさらに興味深い本があるかもしれないが、それについて言及しているわけではない。その一方で、問題(113)の接続法は、他のさらに興味深い本についても言及している。

インフォーマント3も、否定極性辞 *nunca* がない問題(112)では直説法を選んだ。接続法は、特殊な場合には選択可能かもしれないが、このインフォーマントにとって不自然であ

ることがわかる。否定極性辞 *nunca* がある問題(113)では直説法と接続法の両方を選んだ。直説法は特定のその本について、接続法はその他のさらに興味深い本についても言及しているとコメントしていることから、否定極性辞 *nunca* がない場合に比べて、存在するかどうか不明の本も含めていることがわかる。

インフォーマント 4

(112) Es el libro más interesante que { *he visto* / ?*haya visto* }.

(113) Es el libro más interesante que { *he visto* / ?*haya visto* } *nunca*.

<コメント> 問題(112)、(113)ともに、その内容が事実であると考えられるため直説法を用いる。未確認のものとして接続法が使用されるのを聞いたことはあるが、ほとんど用いない。否定極性辞 *nunca* がある場合、強調している印象を受ける。

インフォーマント 4 は否定極性辞 *nunca* の有無にかかわらず、どちらの場合も直説法を選んでいる。コメント内容に見られるように、未確認のものとして表わすなら接続法が用いられることがまれにあるかもしれないと予想しているのみで、このインフォーマントにとっては特定の本についての言及であるため、直説法を選んでいる。つまり、他の関係節と同様に実在するものであれば直説法を、実在しないものについて述べるなら接続法を選ぶことがわかる。

4. 2. 2. 最上級を有する先行詞に後続する関係節内の叙法選択に関するインフォーマント調査の検証

前節で得られた 4 名のインフォーマントの回答より判明したことについて考察すると、否定極性辞 *nunca* がない問題(112)の関係節内における叙法選択は直説法が望ましく、またその叙法が表わす意味は特定の存在する本についてのみ言及しているということである。つまり、実際に出版された本の中で、先行詞に当たる本が話者にとって最も興味深いということを表す文であることがわかる。

否定極性辞 *nunca* がある問題(113)の文では、直説法と接続法のどちらも選択可能であると答えたインフォーマントもいる。否定極性辞は、それまで存在しなかったという意味を表わすことになるが、それぞれの叙法が表わす意味を考えると、この関係節において直説法が用いられる場合、実在する特定の本について明確に言及していることが想定される。その一方で接続法が用いられる場合は、「話者が知らなかった他の興味深い本を含めたとしても、それが最も興味深いだらう」という意味合いを示そうとしていることがわかる。また、話者は否定極性辞とともに「それまでになかったであらう」という予測のもとで発話することで、他のものも含めるため、話者は主張することを避け、接続法の許容度もやや上がると考えられる。

4. 3. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語 (**primero**、**último**、**único**)と、 関係節内の叙法選択についての再考察

この節では、**primero** や **último** や **único** のような最上級と同様に先行詞の内容を唯一的に限定する語が関係節を従える先行詞の前に現れる文について取り上げ、またその関係節内の叙法選択の関係について考察していく。

Pérez Saldanya (1999)や Ahern (2008)などは、順序を示す **primero** や **último**、または **único** のような形容詞について、関係節によって築かれた体系の中で、先行詞と同等の性質を持つその他とを比べた結果、先行詞とその他の間に極端な差が見られるという点で、これらの形容詞を最上級に準ずる語であるとしている。しかし、最上級の意味を表す相対的な形容詞とは違って、**primero** や **último** という語は順序を表す形容詞であり、また **único** という語は唯一性を表す形容詞であるため、絶対的な特徴を持っていると考えられる。つまり、相対的な形容詞は話者の考えや経験の中で先行詞とその他のものを比較し、その結果「最も」と決めていると考えられる。しかし、**primero** や **último** や **único** のような絶対的な性質を持つと考えられる形容詞は、話者にとって「最初である」、「最後である」、「唯一である」と明言しにくいと考えられる。

これらの絶対的な要素を持っている形容詞は、Pérez Saldanya(1999) や Ahern(2008)たちによって「最上級に準ずる」とされてきたが、これらの関係節内における叙法選択が果たして実際に最上級の場合と同じ働きをするのかどうかを検証するため、次の3点に焦点を当てて、考察していく。

① コーパス調査による叙法選択の傾向について

スペイン王立アカデミーの電子コーパス **Corpus de Referencia del Español Actual (CREA)**と Mark Davies コーパスを用いて、**primero** や **último**、また **único** のような最上級と同様に、先行詞を唯一的に限定する語が現れる先行詞と、それに続く関係節の用例の頻度調査を行う。またそこから得られた用例の意味から、最上級を有する先行詞に続く関係節内と同じ働きが見られるかについて考察する。さらに、この種の関係節の中で否定極性辞 (**nunca** や **jamás** など)が続く用例があるかどうかについて検証し、否定極性辞がある場合の関係節内の叙法選択についても考察していく。

② Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008)の最上級が現れる先行詞の後の関係節内における叙法選択と「比較範囲」(**campo de comparación**)について

最上級を持つ先行詞に關係節が続く場合の叙法選択において Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008)たちが唱えた「比較範囲」(**campo de comparación**)の概念について検討する。関係節が続く先行詞と、その関係節が表す特徴を持ったものを比較し、比較される対象、すなわち「比較範囲」が限定的である場合は関係節内に直説法が選択される傾向にあり、一方で先行詞とその他のものを比較した結果、この「比較範囲」が広がる場合は接続法が選択されやすいとされている。この働きが、**primero** や

último のような語を持つ先行詞の後に関係節を従える場合の叙法選択にも当てはまるかどうかについて、インフォーマント調査を行い考察する。

- ③ 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語と否定極性辞が叙法選択に与える影響について

電子コーパスから得られた用例の分析とインフォーマント調査を通して、**primero** や **último** などの語を持つ先行詞の後に関係節が続く場合の叙法選択について考察する。最上級がある先行詞に関係節が続く構文の中で否定極性辞 (**nunca**、**jamás**、**en el mundo entero** など)が現れる際は、接続法選択の許容度が上がる。果たして、この点が **primero** や **último** などの語が先行詞に現れ、関係節が後続する場合の叙法選択においても見られるかどうかについて考察する。

4. 3. 1. Mark Davies コーパスとスペイン王立アカデミーの電子コーパス *Corpus de Referencia del Español Actual* を用いた調査

Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008)などは、**primero** や **último**、または **único** のような形容詞は、関係節によって築かれた体系の中で、先行詞の持つ性質が同じ性質を持つその他とは極端に異なっているという点で最上級に準ずる語であるとしている。しかしながら、最上級が持つ用法と同じであるとするならば、これらの形容詞が「これまでに存在しなかったほど最初の」「これまでに存在しなかったほど最後の」「これまでに存在しなかったほど唯一の」という意味を表すかどうかは不明である。そこで、果たして実際に最上級と同様に、これらの形容詞を有する先行詞に接続法が選択される関係節が続く用例が見られるかどうかを確認するため、Mark Davies コーパスとスペイン王立アカデミーの電子コーパス *CREA* を用いて検証する。

またこのコーパス調査で得られた用例を基に、関係節をとり、最上級と同様に先行詞を唯一的に限定する語が用いられている文が表す意味内容について考察していく。

また、最上級を持つ先行詞に関係節が続く場合において、否定極性辞が用いられると接続法の許容度がやや上がることを第4. 2. 1. 節で明らかになった。そこで、本コーパス調査では、**primero** や **último**、または **único** を持つ先行詞の後に続く関係節内に、否定極性辞(**nunca**、**jamás**、**en mi vida** など)が現れ、それにより接続法の使用頻度が上がるかどうかについても検証していくことにする。

4. 3. 1. 1. Mark Davies コーパスを用いた調査

この節では、Mark Davies コーパスを用いて、定冠詞と、**primero/a**、**último/a**、**único/a** のような語を持つ先行詞に関係節が続く用例を検索し、関係節内の直説法と接続法の頻度調査を行う。なお、ここではできるだけ多くの用例を見ていくため、先行詞の名詞は特定せずに検索し、さらに不特定で総称を表す用例は接続法が選ばれやすいため、単数形のみで調べた。また、これらの関係節に接続法が選択されることは稀であるが、接続法が選択

されるのはほとんどが書き言葉の中であると言われている。その点についても再確認するために、ここでは書き言葉と話し言葉の両方で調べた。その結果、次のような傾向が見られた²⁵。

書き言葉において、男性単数形の定冠詞と **primero** の後に関係節が続く用例の総数は 69 例であり、その内、直説法は 69 例、接続法は 0 例であった。女性単数形の定冠詞と **primera** の後に関係節が続く用例の総数は 37 例であり、その内、直説法は 34 例で、接続法は 3 例であった。一方、話し言葉においては、男性単数形の定冠詞と **primero** の後に関係節が続く用例の総数は 39 例であり、その内、直説法は 34 例、接続法は 5 例であった。女性単数形の定冠詞と **primera** の後に関係節が続く用例の総数は 22 例であり、その内、直説法は 20 例で、接続法は 2 例であった。

書き言葉において、男性単数形の定冠詞と **último** の後に関係節が続く用例の総数は 15 例であり、その内、直説法は 15 例、接続法は 0 例であった。女性単数形の定冠詞と **última** の後に関係節が続く用例の総数は 11 例であり、その内、直説法は 11 例で、接続法は 0 例であった。一方、話し言葉においては、男性単数形の定冠詞と **último** の後に関係節が続く用例の総数は 13 例であり、その内、直説法は 13 例、接続法は 0 例であった。女性単数形の定冠詞と **última** の後に関係節が続く用例の総数は 7 例であり、その内、直説法は 7 例で、接続法は 0 例であった。

書き言葉において、男性単数形の定冠詞と **único** の後に関係節が続く用例の総数は 169 例であり、その内、直説法は 162 例、接続法は 7 例であった。女性単数形の定冠詞と **única** の後に関係節が続く用例の総数は 97 例であり、その内、直説法は 95 例で、接続法は 2 例であった。一方、話し言葉においては、男性単数形の定冠詞と **único** の後に関係節が続く用例の総数は 66 例であり、その内、直説法は 66 例、接続法は 0 例であった。女性単数形の定冠詞と **única** の後に関係節が続く用例の総数は 48 例であり、その内、直説法は 48 例で、接続法は 0 例であった。

ここで得られたすべての用例の総数は 593 例、その内直説法の用例は 574 例で、接続法の用例は 19 例であった。

これらの結果を表にすると、以下のようになる。

表 2

	書き言葉		話し言葉	
	el primero que	la primera que	el primero que	la primera que
総数	69 例	37 例	39 例	22 例
直説法	69 例(100%)	34 例(91.8%)	34 例(87.1%)	20 例(90.9%)
接続法	0 例(0%)	3 例(8.1%)	5 例(12.8%)	2 例(9%)

²⁵ 書き言葉を *ficción*(フィクション)、*periódico*(新聞)、*academia*(学術文献)、話し言葉を *oral*(口語)の項で調べた。最終閲覧は 2011 年 7 月 18 日である。

	書き言葉		話し言葉	
	el último que	la última que	el último que	la última que
総数	15 例	11 例	13 例	7 例
直説法	15 例(100%)	11 例(100%)	13 例(100%)	7 例(100%)
接続法	0 例(0%)	0 例(0%)	0 例(0%)	0 例(0%)
	書き言葉		話し言葉	
	el único que	la única que	el único que	la única que
総数	169 例	97 例	66 例	48 例
直説法	162 例(95.8%)	95 例(97.9%)	66 例(100%)	48 例(100%)
接続法	7 例(4.1%)	2 例(2%)	0 例(0%)	0 例(0%)

本コーパス調査から見えたことは、先行研究で挙げた Carlsson (1969)でも指摘されたように、書き言葉における接続法使用の割合はごくわずかであり、話し言葉においても低いことがわかる。全体としては、書き言葉での使用頻度の方が、わずかに数パーセント高いだけにとどまっていることもこの結果からうかがえる。

primero がある用例の中で接続法が用いられている頻度は、話し言葉の方がわずかではあるが高いことがわかる。今回の調査結果のみから言い切ることはできないが、この書き言葉における接続法の使用頻度よりも、話し言葉における接続法の使用頻度の方が高いということは、これまで言われてきたこととは異なる点である。

último がある用例の中では、書き言葉でも話し言葉でも、接続法のものは1例も見つけれず、すべてが直説法の用例であった。

único を用いた用例からは、接続法が初めてわずかに書き言葉で上回っていることが確認できる。このことより、やはり最上級に準ずる語の先行詞に接続法を従える関係節の使用頻度は極めて低いことがわかる。

また、**primero** および **único** を持つ先行詞に関係節を従える用例の総数に比べて、**último** を持つ用例の総数が非常に少ないこともわかる。さらに、ここで接続法をとる用例が一つも見られなかった理由は、「最後の」という意味を表すこの形容詞を使用することから考えて、話者が発話時から見て先行詞を不特定のものとして表すことが困難であるためだと考えられる。

この調査で得られた関係節を従え、最上級に準ずる語を持つ先行詞の用例の意味を分析した結果、接続法が選ばれている用例のすべては、通常の関係節における接続法と同様に不特定のものであった。

なお、この Mark Davies コーパスを用いた本調査からは、否定極性辞を持つ関係節の用例は見つからなかった。この2点については、次の第4. 3. 1. 2. 節において、用例を用いて詳しく分析する。

4. 3. 1. 2. Mark Davies コーパスから得られた用例の検証

第4. 3. 1. 1. 節で得られた、関係節を従え、最上級と同様に先行詞の内容を唯一的に限定する語を有する先行詞の中で、接続法が選択されている用例の意味を分析した。その結果、書き言葉と話し言葉の中で見られた接続法の実例のほとんどが、通常の関係節で用いられる接続法と同様に「不特定」や「後時性」の概念として用いられている。たとえば以下の2例である。

(114) Y entonces el primogénito significa que es el primero que *haya sido*, El primero - el primero, sea varón - no tiene por eso ningún derecho más.

(したがって、長男とは最初の子供を指すのである。つまり、男の場合は最初の男児を意味するのであって、だからと言ってそれ以上の特権を持っていないのである。)

(Oral, España, 年代不明)

この文では、一般的な説明をしているだけである。つまり、この関係節は特定で実在の人物について述べているわけではなく、長男に相当する人物の条件について説明しているのみである。それゆえに特定を表す直説法ではなく、不特定を表す接続法が用いられていると言えるだろう。

(115) También se está hablando de una salida al espacio o actividad extravehicular (Eva), que sería la primera que *realizara* un astronauta de la Esa.

(宇宙船の外に出て活動することもあるとのことだ。それはおそらく E.S.A.の宇宙飛行士が実行する初めての船外活動となるのだろう。)

(ABC, España, 年代不詳)

この用例では、実際に起きた事柄について述べているのではなく、話者が予想している事柄について述べており、この関係節が意味する内容は不確実な事柄であるため、非主張を表す接続法が選択されていると考えられる。また、この関係節を従える先行詞が、推量を表す直説法過去未来形である *sería* の補語となっていることから、関係節の内容が後時の事柄であると考えられることができる。そのため、この関係節内は不確実な内容であり、非主張の接続法が用いられている。

この Mark Davies コーパスを用いた調査で得られた接続法の用例のほぼすべてを調べたところ、これらすべては不特定のことを指す接続法として用いられており、話者が誇張して表現している内容や、話者の主観を込めていると考えられる用例は見つからなかった。さらに、この調査からは、*nunca* や *jamás* のような否定極性辞を持つ関係節の用例も見られなかった。

今回の検索結果のみでは不十分であるかもしれないが、これら *primero* や *último* などの語がある先行詞は、最上級がある先行詞と比べると大げさに表現するために用いられる接

続法の用例は少ないと考えられるだろう。そして、先行詞が現れるまで、他には存在しなかったことを表すための *nunca* や *jamás* などの否定極性辞の使用も見られなかった。したがって、最上級が先行詞に現れる場合の関係節内に見られる接続法が持つ誇張という意味合いは、*primero* や *último* のような語を持つ先行詞に後続する関係節内において使用される頻度は格段に少ないということが言えるだろう。

4. 3. 1. 3. スペイン王立アカデミーの電子コーパス *Corpus de Referencia del Español Actual* を用いた調査

前節では、Mark Davies コーパスで調べた接続法の用例のうち、ほぼすべてにおいて不特定のものについて言及していたため、話者の主観を表すために関係節内で接続法を使用するという用例は見つけられなかった。また否定極性辞を持った用例も見られなかった。したがって、この節では別の電子コーパスであるスペイン王立アカデミーによる *Corpus de Referencia del Español Actual* (以下 CREA) を利用し、さらに他の用例についての検証もしていく。

この電子コーパス CREA を用いた調査方法は次の通りである。ここでは、順序を表す形容詞である *primero/a* と *último/a* を用い、そしてより限定した事柄について言及している用例を探すため、特定の名詞を先行詞に選んで調べた。なお、これらの検索ワードで得られた用例の中から後に関係節を従えるすべての用例を取り出し、ここでも書き言葉と話し言葉の両方で検索した²⁶。

検索する際に用いた言葉は、男性単数形の定冠詞と *primero* に、先行詞の名詞として *libro* を設定し、[*el primer libro*] という語群で検索し、その中から後に関係節が続く用例を取り出したものを調査した。そこから得られたこの語群の用例の総数は 32 例、そのうち直説法を従える用例は 30 例 (93.7%)、接続法は 2 例 (6.2%) であった。また、女性単数形の定冠詞と *primera* の後に *novela* という先行詞を設定し、[*la primera novela*] という語群を用いて検索した。その結果、その語群の後に関係節を従える用例の総数は 18 例であり、そのうち関係節内に直説法を有する用例は 17 例 (94.4%)、接続法は 1 例 (5.5%) であった。

また、男性単数形の定冠詞と *último* という形容詞の後に *libro* を加えた [*el último libro*] という語群で調査した結果、全体の総数は 11 例であり、そのうち関係節内に直説法を導く用例は 10 例 (90.9%)、接続法は 1 例 (0.9%) であった。また、女性単数形の定冠詞と *última* の後に *novela* を先行詞にした [*la última novela*] という語群を用いて調査したところ、全体の総数は 2 例で、その内の関係節内に直説法を従える用例が 2 例 (100%)、接続法は 0 例 (0%) であった。

ここで検出されたすべての用例の総数が 63 例、直説法をとるものが 59 例 (93.6%)、接

²⁶ 検索環境を書籍、新聞、雑誌、口語で、検索地域をスペイン、ラテンアメリカ各国で検索した。最終閲覧は 2012 年 9 月 20 日である。

続法をとるものが 4 例 (6.3%)であることから、最上級と同様に先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に来る場合、後の関係節の中で接続法が用いられることは極めて低いことがわかる。またこの調査からも、前節の Mark Davies コーパスで得られた結果と同様、関係節内に接続法を従える用例の中で見られたこれら 4 例のうち、関係節に否定極性辞を従えるものは 1 つも見られなかった。そしてこれらはすべて通常の関係節で用いられる不特定や予測のものを表す接続法の用法であった。従って、この電子コーパス CREA を用いた調査からは、primero や último などの語が先行詞にある場合に関係節内で接続法が用いられていても、話者の主観を込める用法や、誇張して表現するという働きは確認できなかった。

これらの検索結果を表にすると、以下のようになる。

表 3

	書き言葉		話し言葉	
	el primer libro	la primera novela	el primer libro	la primera novela
総数	31 例	15 例	1 例	3 例
直説法	29 例(93.5%)	14 例(93.3%)	1 例(100%)	3 例(100%)
接続法	2 例(6.4%)	1 例(6.6%)	0 例(0%)	0 例(0%)
	書き言葉		話し言葉	
	el último libro	la última novela	el último libro	la última novela
総数	10 例	2 例	1 例	0 例
直説法	9 例(90%)	2 例(100%)	1 例(100%)	0 例(0%)
接続法	1 例(10%)	0 例(0%)	0 例(0%)	0 例(0%)

この種の構文における関係節内で数少ない接続法の用例は、話し言葉では 1 例も見られないことがこの表からもわかる。

また[la última persona]という語群で検索した結果、次のような用例が見つかった。

(116) El deterioro de la edad era ya más que patente, pero Rosa resistía y seguía sacando fuerzas de flaqueza para decir una frase de tono. Con Rosa Chacel se va un talento y una fuerza, y la última persona que yo *haya conocido* nacida aún en el siglo XIX.

(年をとりすぎていることはもはや明らかであったが、ロサは風格のある文を言うために抵抗し、また力を振り絞り続けていた。ロサ・チャセルは才能と力のある人物であり、彼女は私が今までで知り合った中で 19 世紀生まれの最後の人物である。)

(*El Mundo*, España, 1994)

この用例(116)では、先行詞であるロサという女性は実在の人物であり、話者自身もこの人物と知り合いであることがわかるが、関係節内において接続法の *haya conocido* を用いている。これは不特定の人物でも、後時制の事柄にも当てはまらないため、この接続法は「これまで私が知り合った人物の中でまさに最後の人物であり、他にはもはや一人もいない」という意味がこめられていると考えられる。

4. 3. 1. 4. 電子コーパス CREA から得られた用例の検証

第4. 3. 1. 3. 節で得られたコーパス調査より、関係節を従え、*primero* や *último* などの語を有する先行詞の中で、接続法である用例の意味を分析した。その結果、Mark Davies コーパスを用いた調査の結果と同様に、書き言葉と話し言葉の中で見られた接続法の実例のすべてが、「不特定」や「発話時から見た未来」という通常の関係節で用いられる接続法の概念として用いられている。たとえば以下の4例である。

(117) He pensado que el primer libro que *vuelva* a publicar en Cataluña debe ser sobre Cataluña, sobre mis lazos afectivos con ella y sobre mi idea, en todos los órdenes, de lo catalán en el contexto ibérico.

(私は、カタルニア州で再出版する最初の本はカタルニア州についての本でなければならぬと考えた。つまり、カタルニアと私のきずなや、イベリア社会におけるカタルニアに関して私自身が持つすべての考えについての本である。)

(*Anales de Literatura Española*, España, 2001)

この用例では、話者がカタルニア州で再出版する最初の本について述べている。この最初の本はカタルニア州でまだ再出版されていないため、事実ではなく、話者の予測であると言える。また関係節内の接続法が表す内容は未来の事柄である。そのため、この本は不特定であり、関係節の中では接続法が選択されていると考えられる。

(118) A ese chofer le voy a dedicar el primer libro que *escriba* -decía yo, mientras nos vestíamos.

(私は、「私が執筆する最初の本をその運転手に献上しよう。」などと、私たちが着替えている間に言っていた。) (Mario Vargas Llosa, *La tía Julia y el escribidor*, Perú, 1977)

この用例においても、最初に執筆される本について説明しているが、その話者が執筆した本はまだ存在していない。したがって、この関係節の接続法は後時的な事柄を表していると言えるだろう。

またこの用例は、最初であろう本について述べているが、これはまだ実在のものではないが、「私が書く最初の本を指している」という意味である。

(119) Era el paso lógico después de haber devorado los cuatro primeros libros en español sin apenas darme cuenta, pero he tenido que encontrármelo de frente, apilado en un buen montón en la FNAC, para animarme a ello. Antologías, estudios y guías de episodios aparte, ésta va a ser la primera novela que me *lea* en inglés.
(私はほとんど気づかなかったが、それはスペイン語の最初の4冊の本をむさぼるように読んだ後の当然の道りであった。しかし私はフナック書店に大量に積み上げられた本の中から、その本を探し当てなければならなくなった。詞華集や研究書やエピソード集は別として、これは私が英語で読む最初の本になるだろう。)

(Efímero, *Weblog*, España, 2003)

用例(119)では、筆者が英語で読む初めての本について言及している。しかしこの本を見つけておらず、読み終わってはいないため、まだ実際には英語で読む最初の本ではない。筆者にとって最初の本になるであろうということはわかっているが、事実そうなるかどうかは不確かであるため、ここでは接続法が用いられている。そのため、この接続法の使用も、不特定を意味するものであると考えられる。

またこの用例は、最初の本について言及しているが、まだ実際に読んだ本ではない。従って、この本は「私が英語で読むだろう」という意味である。

(120) El objetivo es que los niños, agrupados por colegios vayan pintando algo relacionado con los libros, o algo que hayan leído o sobre el último libro que *hayan leído* o sobre el mundo de los libros en general.
(その目的とは、学校毎に分けられた子どもたちに本に関係する何か、または彼らがかつて読んだ本、もしくは彼らが最後に読んだ本か、一般的な本の世界について描かせていくということであった。)
(*El Pueblo de Ceuta*, España, 2003)

この用例では、子供たちが最後に読んだ本について言及している。最後に読んだ本がそれぞれにあることは想定できるが、実際に最後に読んだ本があるかどうかは話者にとって不確かであり、またあるとしてもどれであるかは不明である。それゆえにこの関係節では接続法を用いて表されていると言えるだろう。

またこの先行詞に続く関係節において接続法が選択されている要因の1つとして、関係節を従える先行詞より前に、*algo que hayan leído* という語群があり、この関係節内が接続法であることも影響を与えていることも考えられる。これは先行詞が不定語 *algo* であり、それにより不特定を表す接続法が選ばれている。

本調査から得られた接続法の4例のいずれも、話者の主観を表すものや、誇張した表現であると考えられる用例は見つからなかった。この調査のみから判断することは難しいが、本調査で見られたこの種の構文の傾向として、関係節を従え、*primero* や *último* などの語

が先行詞に付く場合の叙法選択は、通常の関係節内に観察される叙法選択の基準とほぼ同じであることが挙げられる。最上級が先行詞に現れる場合の関係節内と同様に、話者の主観を込める表現や誇張した意味合いを与えるという用法はほとんど見られないか、非常に稀であると言えるだろう。

また本調査で得られた結果の中で、**primero** や **último** などの語が先行詞に付き、その後 **no** が付かない否定極性辞(**jamás** と **en mi vida**)をもつ関係節を従えるという用例が2例見つかったが、そのどちらも関係節内の叙法は直説法であり、接続法の用例は見つけられなかった。2例のうち1例は関係副詞であるが、**no** が付かない否定極性辞の用例として次に挙げる。

(121) Ella fue la última mujer con la que se *acostaría* **jamás** Nureyev, y siguió enamorado de ella hasta la muerte.

(彼女はヌレイェブが絶対に共に寝ないであろう女性であったが、彼は死ぬまで彼女に恋をしていた。)

(*La Vanguardia*, España, 1995)

(122) No deja de ser curioso que por aquellos días me tropezase con Amor de perdición, la primera novela que había leído **en mi vida**, la que probablemente había configurado mis esperanzas amorosas de adolescente.

(あの頃、私が人生で初めて読んだ小説である「破滅の愛」に出会ってしまったことは不思議である。その小説はおそらく私の思春期の恋愛への期待感を形成した小説である。)

(Gonzalo Torrente Ballester, *Filomeno, a mi pesar. Memorias de un señorito descolocado*, España, 1988)

本調査で得られた、これら **no** が付かない否定極性辞がある関係節のが用いられている用例においてどちらの場合にも直説法が用いられているが、ここで接続法を選択することが不可能であるというわけではない。接続法が選択可能か否かについては、第4.3.3.

1. 節と第4.3.3.2. 節でインフォーマント調査を行い、最上級 **primero** や **último** などの語が先行詞に付き、後続する関係節内において、**no** が付かない否定極性辞がある場合とない場合の叙法選択について詳しく触れることにする。

4.3.2. 最上級を持つ先行詞に關係節が続く構文にかかわる Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008) たちの挙げる「比較範囲 (*campo de comparación*)」の概念と、最上級に準ずる語が現れる場合について

Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008) たちは、最上級を持つ先行詞に關係節が続く場合の叙法選択において、「比較範囲」(*campo de comparación*)という概念が関連するとしている。關係節を従える先行詞と、その關係節が表している特徴を持つものを比較し、その

結果叙法選択が決定されるということである。先行詞と比較される対象が具体的で限られているなら、この「比較範囲」は確立的なものになるため、後に続く関係節内において直説法が選択される傾向がある。また一方で、先行詞に比較される対象が、不特定で曖昧であるなら、この「比較範囲」は広がり、結果、後の関係節内において接続法が選択される傾向があるということである。Pérez Saldanya (1999) や Ahern (2008)は、最上級を有する先行詞に関係節が続く場合の叙法選択にこの「比較範囲」という概念を用いて説明しており、またそこに *primero*、*último*、*único* などの語も最上級と同様に先行詞を唯一的に限定する語を「最上級に準ずる語」として同等に扱っている。

(123) Era el primer libro que se { *había publicado* / *hubiera publicado* } sobre el tema.
(そのテーマについて発行された最初の本だった。) (Pérez Saldanya 1999: 3278)

これは Pérez Saldanya (1999)の挙げる例文であるが、この最上級に準ずる語を持つ先行詞に続く関係節内において範囲を限定する語である *sobre el tema* が現れている。それにもかかわらず、この関係節内において直説法も接続法も選択可能であると述べている。

さらに Pérez Saldanya (1999)では、以下のような例文を挙げて「比較範囲」という概念がもたらす叙法選択への影響について論じている。

(124) Es el profesor más interesante que nos { *está* / **esté* } dando clase este año.
(彼は今年授業を担当している最も面白い教師だ。) (Pérez Saldanya 1999: 3278)

この用例では、「今年」を意味する *este año* という語が「比較範囲」を限定しているため接続法 *esté* は選択不可であるとしている。そしてこの「比較範囲」を限定している *este año* という語を除いた場合、比較範囲は限定されないと考えられる。そこで第4. 2. 1. 節のインフォーマント調査に参加した4名のスペイン語話者に *este año* を除いた例文を提示し、関係節内の叙法選択について尋ねた。本調査で用いた例文と、4名のインフォーマントの回答を次に紹介する。

(125) Es el profesor más interesante que nos { *está* / *esté* } dando clase.
(彼は授業を担当している最も面白い教師だ。)

インフォーマント1

(125) Es el profesor más interesante que nos { *está* / *esté* } dando clase.

<コメント> 直説法のみ選択可能である。ただし、*El premio se lo llevará el profesor más interesante que nos esté dando clase.*のような文なら接続法の使用も可能である。

インフォーマント 2

(125) Es el profesor más interesante que nos { *está* / *esté* } dando clase.

<コメント> 直説法のみ選択可能である。

インフォーマント 3

(125) Es el profesor más interesante que nos { *está* / *esté* } dando clase.

<コメント> 直説法のみ選択可能である。

インフォーマント 4

(125) Es el profesor más interesante que nos { *está* / *esté* } dando clase.

<コメント> 直説法のみ選択可能である。

4名インフォーマント全員が直説法のみ選択可能であると回答した。先行詞に当たる授業を担当している最も面白い教師は、話者にとって特定の人物であり実在していることは明らかであるため、「比較範囲」を限定する語の有無だけでは「比較範囲」が狭まるか広がるかについては不明である。

本節では、果たして最上級に準ずる語と先行詞の後に関係節を従える場合の叙法選択にもこの「比較範囲」が影響を与えるかどうかについて考察する。

4. 3. 2. 1. 最上級と同様に先行詞を唯一的に限定する語を有する先行詞に後続する関係節内の叙法選択と「比較範囲」について

筆者が第4. 3. 1. 1. 節と第4. 3. 1. 3. 節で行った Mark Davies コーパスと電子コーパス CREA を用いた調査から得られた用例の中で、特定の先行詞でありながら関係節に接続法が選択され、なおかつ「比較範囲」を広げ、結果として話者の主観の意味合いを与える働きがあるものは見られなかった。この構文の関係節の中で接続法が選択されている用例は、すべて通常の関係節内で見られる、話者が先行詞が実在するかどうかについて不確かである場合の不特定を表す用法であった。このことから、最上級を持つ先行詞に続く関係節内の接続法について言われている特徴が、これら最上級に準ずる語に続く関係節内の場合にもあてはまるかどうかについて、これらのコーパス調査からは不明である。

そこで、次に再び電子コーパス CREA を用い、定冠詞に名詞を省略した先行詞としての *primero*、*último*、*único* とそれに続く関係節について観察するため、[*el primero que / la primera que / el último que / la última que / el único que / la única que*] という語群を用いて検索した結果、次の2例が見つかった²⁷。

²⁷ここでは、ジャンルを書籍、口語、また地域をスペインで調べた。最終閲覧は2011年6月26日である。

(126) Virginia tenía a gala saber siempre qué quería, hasta el punto de que en obvios casos de duda (a la hora de elegir un vestido, por ejemplo, entre dos casi iguales) elegía, por orden cronológico, el primero que le *hubiesen enseñado*. María, en cambio, no daba la impresión de haberse decidido cuando elegía alguna cosa.

(ビルヒニアは、例えばほぼ同じ2着の服の内1着を選ばなければならないような明らかに迷っているときでさえ、最初に見せられた服を見せられた通りの順序で選んでいたように、いつも何が欲しいかを知っていることを誇りに思っていた。その一方で、マリアは何かを選ばなければならないとき、きちんと選んでいるという印象はなかった。)

(Álvaro Pombo, *El metro de platino iridiado*, España, 1990)

この用例(126)では、「ビルヒニアに見せられた最初の服を選んでいた」という意味で関係節に接続法が用いられている。話者にとってビルヒニアに向けて紹介された服がどれであるかは不明であり、実際に紹介されたかどうかについても確信はない。ここで表されている内容は、よく似たものの中からどちらかを選択しなければいけない場合の例として、2着の服の内、最初に紹介された服を選んでいたと説明している。したがってこの関係節内に用いられている接続法は特定のものではなく、不特定のもを表していると考えられる。

(127) El era el último que Beatriz y yo *hubiésemos querido* que lo supiese. Pero, carajo, es que estaba yo muy desesperado con lo del embargo de mi cuñado, tenéis que comprenderlo...

(彼は、ベアトリスと私がその件について最も知ってほしくない人物であった。しかし、私は義理の兄の差し押えのことでとてもうんざりしていたということを君たちにわかってほしい。)

(Juan García Hortelano, *Mucho cuento*, España, 1987)

この関係節をしたがえる先行詞の用例は、「ベアトリスと私は、彼にそのことを知ってほしくなかった」という内容を表している。彼はその件について知ってほしい最後の人物であった、つまり彼に知ってほしくなかったということを指しているため、否定の意味が加わり接続法が選択されていると考えられる。

Pérez Saldanya (1999)は「関係節内の動詞が *poder* の現在形である場合を除いて、最上級に続く関係節の中の動詞が現在完了形か過去完了形である場合、包括的で一般的な特徴が与えられるため「比較範囲」が広がり、接続法が選択されることが多い」と述べている(p.3279)。上記の電子コーパス CREA を用いた調査から得られたこれらの用例(126)と(127)においても、Pérez Saldanya の指摘の通り、*primero* や *último* が先行詞に付いている場合でも、関係節が後に現れる場合の叙法選択に接続法の過去完了形が用いられていることがわかる。

しかし用例(126)と(127)で用いられている関係節内の接続法の使用は、やはり通常の関係

節で用いられる接続法の用法と同じく、先行詞が指す対象の存在について話者は不確かであり、不特定であるため、はっきりとした主張を避けるための接続法の用法と同類である。接続法が過去完了形で用いられているという点では一致しているが、「比較範囲」が広がっているかどうかは不明である。

また主語が固有名詞で、関係節内に接続法をとる **primero** 付きの先行詞である名詞句 ([**el primero que** + 接続法の関係節]) が **ser** 動詞の補語である例が見つかった。

(128) Maquiavelo será **el primero** que *utilice*²⁸, en las primeras líneas del Príncipe el término: "...Todos los Estados, todas las soberanías, que tienen o que han tenido autoridad sobre los hombres han sido y son repúblicas o principados..."

(マキャベリは「男性の権利を持っている、または持ったことがある全ての国家、つまり全ての主権というものは共和国か公国であったこと、またはそうであることを意味するのである。」という言葉を、皇太子の演説の冒頭で初めて使った人物だろう。)

(Gregorio Peces-Barba, *Introducción a la filosofía del derecho*, España, 1983)

この用例では、主節の主語がマキャベリという固有名詞であり、さらに歴史上の人物あるため実在の人を指していることは明らかである。このように特定の人物を指しているにもかかわらず、限定性の強い **primero** を先行詞に持ち、さらに後に続く関係節では接続法が選ばれている。その理由は主動詞が未来形になっており、推量を表している。したがって、話者は先行詞の指示対象について確信が持てず、関係節が修飾している内容について主張できないため、ここは接続法が用いられていると考えられる。

4. 3. 2. 2. 最上級と同様に先行詞を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、後に関係節をしたがえる叙法選択に関するインフォーマント調査

4名のスペイン人²⁹にインフォーマント調査を行い、第4. 3. 2. 1. 節の電子コーパスを用いた調査で得られた最上級同様に先行詞を唯一的に限定する語を持つ先行詞に接続法をとる関係節の用例を利用し、関係節内の動詞の叙法選択について尋ねた。

本調査にあたって、用例(126)と用例(127)をより簡潔な文に改めた。そしてこれら4名のインフォーマントに関係節内の動詞を直説法と接続法の両方で提示し、適切だと思われる

²⁸この用例について3名のインフォーマントに尋ねたところ、「この接続法現在 *utilice* は歴史的現在としての用法である」という回答があった。また1名のインフォーマントより、「この文の場合、書き言葉では接続法 *utilice*、話し言葉では直説法の *utiliza* または *utilizará* が好ましい」という回答があった。

²⁹ インフォーマント1と2はスペイン・マドリード出身、インフォーマント3はスペイン・バルセロナ出身、インフォーマント4はスペイン・ビーゴ出身で、全員大学院生である。

叙法を選択させた。どちらか1つのみ選ぶのではなく、どちらも可能であると考えられる場合は両方選択するという方式にし、コメントがある場合はそれも記してもらった。

次に示したものが本調査で利用した文である。

(129) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primero que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* }.

(ビルヒニアはいつも最初に見せられた服を見せられた通りの順序で選んでいた。)

(130) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese.

(彼は、ベアトリスと私がその件について最も知ってほしくない人物であった。)

4名のインフォーマントの回答は次の通りである。

インフォーマント 1

(129) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primero que le { ?*habían enseñado* / *hubiesen enseñado* }.

(130) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese.

<コメント> (129)の文では、接続法が望ましい。直説法は文脈によっては選択可能な場合があるかもしれないが、違和感がある。(130)の文では、接続法のみ選択可能である。

インフォーマント 2

(129) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primero que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* }.

(130) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese.

<コメント> 問題(129)の場合、どちらも選択可能である。問題(130)では、接続法のみ選択可能である。

インフォーマント 3

(129) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primero que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* }.

(130) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese.

<コメント> 問題(129)の場合、どちらも選択可能である。また問題(130)の場合は、接続

法のみ選択可能である。

インフォーマント 4

(129) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primero que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* }.

(130) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese.

<コメント> 問題(129)の場合、どの服であるかについては言及している訳ではないため接続法のみ選択可能である。問題(130)の場合は、直説法と接続法のどちらも選択可能である。

問題(129)の関係節内の叙法選択について、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは3名であり、接続法のみ選択可能と答えたインフォーマントは1名であった。話者が、ビルヒニアに見せられた服がどれであるか確かである場合は関係節内において直説法を用い、またどれであるかについては言及しない場合には接続法を用いることができると考えられる。

一方で問題(130)の文では、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは1名であり、接続法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは3名であった。ここでは「最も知ってほしくない人物」であるため、3名のインフォーマントが接続法のみ選択可能であると述べていると考えられる。この3名が接続法のみ選択可能と述べているのに対し、インフォーマント4だけが直説法と接続法の両方が選択可能であると述べている。このインフォーマントはガリシア出身であり、叙法選択に地域差が現れているということも考えられる。

4. 3. 2. 3. 最上級同様に先行詞を唯一的に限定する語が先行詞に付き、比較範囲を限定する語が現れる関係節内の叙法選択に関するインフォーマント調査

Ahern (2008)や Pérez Saldanya (1999)が述べる「比較範囲」という概念が、最上級同様に先行詞を唯一的に限定する語が先行詞に現れる場合の関係節内の叙法選択へ与える影響について調べるため、用例(129)と(130)の文に比較範囲を限定する語を付加し、第4. 3. 2. 2. 節の調査に参加したインフォーマント4名に同じ方法で関係節内の叙法選択について尋ねた。

範囲を限定する語を「この店で」を表す *en esta tienda* と「クラスの中で」を表す *de la clase* とし、調査に用いた文と4名のインフォーマントの回答を次に紹介する。

(131) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primer vestido que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* } en esta tienda.

(ビルヒニアはいつもこの店で最初に見せられた服を見せられた通りの順序で選んでい

た。)

- (132) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese de la clase.
(彼は、ベアトリスと私とその件についてクラスの中で最も知ってほしくない人物であった。)

インフォーマント 1

- (131) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primer vestido que le { *?habían enseñado* / *hubiesen enseñado* } en esta tienda.

- (132) El era el último que Beatriz y yo { *?habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese de la clase.

<コメント> 問題(131)では、直説法も選択可能な場合があるかもしれないが、普通は接続法が選択される。問題(132)においても、直説法が用いられる場合があるかもしれないが、通常であればここでは接続法を用いる。

インフォーマント 2

- (131) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primer vestido que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* } en esta tienda.

- (132) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese de la clase.

<コメント> 問題(131)と(132)のどちらの場合も、接続法を使用することが望ましい。

インフォーマント 3

- (131) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primer vestido que le { *?habían enseñado* / *hubiesen enseñado* } en esta tienda.

- (132) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que lo supiese de la clase.

<コメント> 問題(131)と(132)において、接続法が望ましい。接続法が用いられるのは、話者はビルヒニアが服を実際に見せられたかどうかはわからない場合である。もし直説法が用いられるなら、話者はどの服のことについて話しているかわかっている場合である。

インフォーマント 4

- (131) Virginia siempre elegía, por orden cronológico, el primer vestido que le { *habían enseñado* / *hubiesen enseñado* } en esta tienda.

- (132) El era el último que Beatriz y yo { *habíamos querido* / *hubiésemos querido* } que

lo supiese de la clase.

<コメント> 問題(131)の文では、どの服については述べているかは重要ではなく、常に最初に見せられた服を選んでいたという意味であるため、接続法のみ選択可能である。また問題(132)の文では、直説法も接続法も選択可能である。

範囲を限定する語を加えた問題(131)の文で、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは1名、接続法のみ可能と答えたインフォーマントは3名であった。しかし両方選択可能と答えたインフォーマント1も、この文で直説法が用いられることは非常に稀であるという見解を示した。

また問題(132)の文では、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは2名で、両方選択可能と答えたインフォーマント1は通常は接続法が用いられると答えている。同じく両方選択可能と答えたインフォーマント4はどちらも等しく選択可能であると答えた。また接続法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは2名であった。

これら範囲を限定する語が現れているにもかかわらず、接続法のみ選択可能であるという回答や直説法と接続法の両方選択可能であるという回答があった。このことから、比較範囲が限定されている場合であっても、どの服について言及しているかは重要ではない、もしくは不明であるため主張を避け、ただ過去の習慣を説明しているだけである。したがって範囲が限定されていても必ずしも直説法が選択されるというわけではなく、話者が先行詞について関係節を用いて言及する際、断定できるかできないかによって叙法が決定されると言えるだろう。

これに関連して、「比較範囲」の概念が関係節内の叙法選択に影響があるかどうかを検証するため、次に挙げる文を用いて新たに4名のインフォーマントに尋ねた³⁰。

まず、先行詞に最上級が現れ、その後の関係節内に「比較範囲」を限定する語をとる文において、範囲が限定された場合にどのように叙法が選択されるか調べた。その後、同じく関係節内に範囲を限定する語をしたがえ、最上級に準ずる語を持つ先行詞の文についても調査を行う。

ここでは主動詞が現在時制で、範囲を限定する語として Pérez Saldanya (1999)が挙げた *este año* を従える *Es el profesor más interesante que nos { *está* / *está* } dando clase este año*。(彼は今年授業を担当している、最も興味深い先生だ。(Pérez Saldanya 1999: 3278))という文を利用し質問した。この質問に対して、4名全員が直説法の方が好ましいと答えた。その内1名のインフォーマントより、「接続法は、文脈によって選択可能な場合が稀にあるかもしれないが、ここで用いることは自然ではない。また *este año* (今年)という範囲を限定する言葉があり、関係節の内容がより一層特定されるため、この文中での接続法の使

³⁰ この調査に参加したインフォーマントは4名であり、その中でスペイン・マドリード出身者が3名、チリ・サンティアゴ出身者が1名である。この3名のマドリード出身者のうち2名は第4. 3. 2. 2. 節に参加したインフォーマントと同一人物である。

用は難しい。しかし、この *este año* という表現の代わりに否定極性辞である *nunca* をとる場合は、接続法が選択されるかもしれない」という回答があった。後の第4. 3. 3. 節で、この否定極性辞 *nunca* について取り上げる。

次に主動詞が過去時制、未来の意味であり、関係節内に範囲を限定する語をとる例文を用いて調査をした。主動詞が過去時制である場合の文として、範囲を限定する語に *en su habitación* を用い、*Me regaló el libro más antiguo que { tenía / tuviera } en su habitación*。(私は彼から彼の図書館で最も古い本を贈与された。) という例文を選択した。この質問に対して、直説法である *tenía* のみ選択可能であるという回答が4名のインフォーマント全員から得られた。主動詞が過去時制であり、また関係節内に範囲を限定する *en su habitación* という語があることから、ここでは特定の本のみを指すため直説法のみ選択可能であると考えられる。

次に主動詞が未来の意味を含める例として *Le voy a regalar el libro más antiguo que { tiene / tenga } en su biblioteca* の文で尋ねたところ、直説法のみ選択可能と答えたインフォーマントは3名、また直説法も接続法もどちらも選択可能であると回答したインフォーマントは1名であった。またこのインフォーマントから、接続法を用いた場合、「話者はその図書館にとっても古い本があると考えているが、事実かどうかは不確かであるという意味が含まれる」というコメントが得られた。主動詞が未来の意味を表しているが、先行詞に定冠詞が現れ、さらに関係節内に *en su biblioteca* という範囲が限定される語をしたがえるため、直説法が選ばれる可能性が高いことがわかる。また1人のインフォーマントが「接続法が可能である場合もあるかもしれない」と答えたように、範囲が限定されているにもかかわらず接続法が用いられるのは、話者がその本の存在についてはっきりと断定できない場合であることが予想される。

4. 3. 2. 4. 「比較範囲」と関係節内における叙法選択との関係のまとめ

第4. 3. 2. 2. 節と第4. 3. 2. 3. 節で得られたインフォーマント調査の結果から、Pérez Saldanya (1999)や Ahern (2008)が述べた「比較範囲」の概念が、最上級や最上級に準ずる語が先行詞に現れ、その後続く関係節内において叙法選択を行う場合、ある程度関係することがわかった。しかしこの種の関係節内の叙法選択には、最終的には話者の先行詞に対する確信の度合いが影響すると考えられる。

また次の用例(133)と(134)の文は Pérez Saldanya が範囲が限定される場合の叙法選択への影響について論じるために用いた用例であり、関係節内の動詞が完了形ではなく単純形である。したがって話者がそれまで経験してきたものと先行詞を比較している訳ではないため、比較範囲を限定する語が現れた場合は直説法が選択されやすくなると言えるだろう。

- (133) *Es el profesor más interesante que nos está { esté / *esté } dando clase este año.*
(彼は今年授業を担当している、最も興味深い先生だ。) (Pérez Saldanya 1999: 3278)

(134) Me regaló el libro más antiguo que { *tenía* / **tuviera* } en su biblioteca.

(彼は彼の図書館で最も古い本を私に贈った。)

(Ibid.)

またインフォーマント調査から言えることは、範囲を限定する語が現れている文にもかかわらず、接続法のみ選択可能であるという回答や直説法と接続法の両方選択可能な場合があるということである。比較範囲が限定されていても、指示対象が明確ではない、もしくは指示対象がどれであるかは重要ではない場合、先行詞は不特定であるため話者は主張を避け接続法を用いると考えられる。したがって範囲が限定されていれば直説法が選択される訳ではなく、話者が先行詞について関係節を用いて言及する際、主張できるかできないかによって叙法が決定されると言えるだろう。

4. 3. 3. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、後続する関係節内の否定極性辞が叙法選択に与える影響について

本節では、最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語の後に関係節が続く場合の叙法選択と、関係節内の否定極性辞 (*nunca*, *jamás*, *en el mundo entero* など)の関係について論じる。この否定極性辞が関係節に現れる際に、関係節に接続法が選択される許容度が上がるという点が、最上級をもつ先行詞に続く関係節において見られたが、この要素が最上級に準ずる語の場合の叙法選択においても見られるかどうかについて考察する。この考察のためにインフォーマント調査を行う。

4. 3. 3. 1. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に付き、後続する関係節内の叙法選択と、否定極性辞の関係に関するインフォーマント調査 1

Pérez Saldanya (1999)が挙げる文を用いて、第4. 3. 2. 2. 節と同じ4名のインフォーマント³¹に、*primero*, *único* のような語が先行詞に現れ、後に否定極性辞 *nunca* を従える関係節内の叙法選択について尋ねた。

本調査で用いた Pérez Saldanya (1999)の文は次の問題(136)、(137)、(138)である。

(135) Era el primer libro que se { *había publicado* / *hubiera publicado* } sobre el tema.

(それはそのテーマについて出版された最初の本である。)(Pérez Saldanya 1999: 3278)

(136) Es la única ciudad que me { *ha cautivado* / *haya cautivado* } con su belleza.

(それは美しくて私の心を今までで一番とらえた唯一の町だ。)

(Ibid.)

³¹ 第4. 3. 2. 2. 節の調査に参加したインフォーマントと同一人物であり、インフォーマント1と2はスペイン・マドリード出身、インフォーマント3はスペイン・バルセロナ出身、インフォーマント4はスペイン・ガリシア出身で、全員大学院生である。

- (137) Se trata del espectáculo más interesante que { *he visto / haya visto* }.
(私が今までで見た中で最も興味深いショーを扱っている。) (Ibid.)

次の問題(138)、(139)、(140)は本インフォーマント調査で用いた文である。上記の Pérez Saldanya の用例の各関係節中に否定極性辞である *nunca* を加えている。なお、Pérez Saldanya が挙げた用例(137)の最上級を表す *más interesante* という語句を、本調査では *primero* に置き換えて調査を行う。

- (138) Era el primer libro que se { *había publicado / hubiera publicado* } nunca sobre el tema.
(それはそのテーマについて出版された最初の本である。)

- (139) Es la única ciudad que me { *ha cautivado / haya cautivado* } nunca con su belleza.
(それは美しくて私の心を今までで一番とらえた唯一の町だ。)

- (140) Se trata del primer espectáculo que { *he visto / haya visto* } nunca.
(私が今までで見た中で最初のショーについて扱っている。)

次に4名のインフォーマントの回答を紹介する。

インフォーマント 1

- (138) Era el primer libro que se { *había publicado / hubiera publicado* } nunca sobre el tema.

- (139) Es la única ciudad que me { *ha cautivado / haya cautivado* } nunca con su belleza.

- (140) Se trata del primer espectáculo que { *he visto / haya visto* } nunca.

<コメント> 問題(138)では、直説法と接続法のどちらも選択可能であるが、接続法を用いる方が望ましいと思われる。問題(139)と(140)では、直説法も接続法も選択可能である。

インフォーマント 2

- (138) Era el primer libro que se { *había publicado / hubiera publicado* } nunca sobre el tema.

- (139) Es la única ciudad que me { *ha cautivado / haya cautivado* } nunca con su belleza.

- (140) Se trata del primer espectáculo que { *he visto / haya visto* } nunca.

<コメント> 問題(138)では、接続法が望ましいが、直説法過去未来形の *habría publicado* の使用も可能である。問題(139)では、直説法が望ましいが、否定極性辞 *nunca* に違和感がある。問題(140)では、接続法が望ましい。

インフォーマント 3

(138) Era el primer libro que se { *había publicado* / *hubiera publicado* } sobre el tema.

(139) Es la única ciudad que me { *ha cautivado* / *haya cautivado* } con su belleza.

(140) Se trata del primer espectáculo que { *he visto* / *haya visto* } .

<コメント> 問題(138)では、直説法と接続法の両方が選択可能であり、直説法がより自然である。問題(139)と(140)では、直説法と接続法のどちらも選択可能であり、この接続法の使用は否定極性辞 *nunca* があることによって選択の可能性が上がっていると考えられる。

インフォーマント 4

(138) Era el primer libro que se { *había publicado* / *hubiera publicado* } sobre el tema.

(139) Es la única ciudad que me { *ha cautivado* / *haya cautivado* } con su belleza.

(140) Se trata del primer espectáculo que { *he visto* / *haya visto* } .

<コメント> 問題(138)、(139)、(140)のすべてにおいて、直説法と接続法の両方が選択可能である。またこれらの文において接続法を使用すると、文語的で凝った表現となる。

問題(138)において、直説法と接続法の両方が選択であると答えたインフォーマントは3名であり、接続法のみ可能と答えたインフォーマントは1名であった。

また問題(139)では、直説法と接続法の両方が選択であると答えたインフォーマントは3名であり、直説法のみ選択可能と答えたインフォーマントは1名であった。

最後に問題(140)では、直説法と接続法の両方が選択可能と答えたインフォーマントは3名であり、接続法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは1名であった。

Pérez Saldanya (1999)が用いた用例には否定極性辞 *nunca* のない文であり、直説法と接続法の両方選択可能であるという説明であった。否定極性辞 *nunca* を加えた文の叙法選択に関する本調査結果からも、直説法と接続法の両方が選択可能であるという回答が多く見られた。しかし、インフォーマント2の問題(138)と(140)に対する回答からわかるように、否定極性辞 *nunca* が付いているこれらの文の関係節内で、接続法のみ選択可能であるという回答も見られた。

またインフォーマント1の「問題(138)では、直説法と接続法のどちらも選択可能である

が、接続法を用いる方が望ましい」というコメントや、インフォーマント2の「問題(138)では、接続法が望ましいが、直説法の過去未来形である *habría publicado* であれば使用可能である」というコメントや、インフォーマント3の「問題(139)と(140)では、直説法と接続法の両方が選択可能であり、この接続法の使用は否定極性辞 *nunca* があることによって選択の可能性が上がっていると考えられる」というコメントから、否定極性辞 *nunca* は接続法を導きやすい要素であると言えるだろう。

4. 3. 3. 2. 最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に付き、後続する関係節内の叙法選択と、否定極性辞の関係に関するインフォーマント調査2

Pérez Saldanya (1999)は否定極性辞がない場合でも、最上級を有する先行詞に関係節が続くとき、直説法と接続法の両方が選択可能であると述べている。本節では否定極性辞の有無が関係節内の叙法選択にどのような影響を与えるか検証するため、否定極性辞 *nunca* や *en el mundo entero* がない文とある文の両方をインフォーマントに提示し、それぞれの叙法選択について質問した。

本調査では、前節と同じく最上級に準ずる語(*primero*、*único*)が先行詞に現れ、後に否定極性辞(*nunca*、*en el mundo entero*)をしたがえる関係節内の叙法選択について、第4. 2. 1. 節の調査と同じ4名のインフォーマント³²に尋ねた。

本調査では、関係節内の動詞に *haber* を従え、否定極性辞 *en el mundo entero* がない問題(141)とある問題(142)を用いて調査を行った。調査の結果は次の通りである。

(141) Es el primer libro que { *hay/ haya* } sobre el tema.

(それはそのテーマについての最初の本である。)

(142) Es el primer libro que { *hay/ haya* } sobre el tema *en el mundo entero*.

(それはそのテーマについての世の中で最初の本である。)

インフォーマント1

(141) Es el primer libro que { *hay/ haya* } sobre el tema.

(142) Es el primer libro que { *hay/ haya* } sobre el tema *en el mundo entero*.

<コメント> 否定極性辞 *en el mundo entero* の有無はあまり影響がないと思われる。また、*Compararé el primer libro que haya sobre el tema.* や *Será el primer libro de grafeno que haya en el mundo entero.* のような主動詞が未来形である場合は、関係節内で接続法を選択

³² インフォーマント1はスペイン・マドリード出身、インフォーマント2はチリ・サンティアゴ出身、インフォーマント3はスペイン・マドリード出身、インフォーマント4はスペイン・タラゴナ出身であり、全員大学院生である。

することが可能である。

インフォーマント1の回答から、否定極性辞 *en el mundo entero* に関係なく、どちらの場合も直説法を選んでおり、接続法が選択可能なのは後時制が見られる場合であることがわかる。

インフォーマント2

(141) Es el primer libro que { *hay/ haya* } sobre el tema.(選択不可)

(142) Es el primer libro que { *hay/ haya* } sobre el tema en el mundo entero.(選択不可)

<コメント> *haber* という動詞には不定冠詞を持つ名詞と共起するため、この文で定冠詞を持つ *el libro* を先行詞にとることは不可能であると考えられる。*Es el primer libro que ha existido*.や、*Es el primer libro que ha existido nunca*.という文であれば直説法を用いて表すことが可能である。

インフォーマント2は関係節の動詞 *haber* がこの文には適切でないと考えられるため、どちらの叙法も選択不可能であるとしながらも、完了形を用いた場合なら否定極性辞の有無にかかわらず、直説法を選択して表すことが可能であると述べている。

インフォーマント3

(141) Es el primer libro que { hay/ haya } sobre el tema.

(142) Es el primer libro que { hay/ haya } sobre el tema en el mundo entero.

<コメント> 否定極性辞 *en el mundo entero* の有無にかかわらず、どちらの叙法も選択可能である。

インフォーマント3の回答から、どちらの場合においても文脈によって直説法も接続法も使用可能であることが想定できる。

インフォーマント4

(141) Es el primer libro que { hay/ haya } sobre el tema.

(142) Es el primer libro que { hay/ haya } sobre el tema en el mundo entero.

<コメント> どちらの場合も直説法 *hay* が望ましい。そしてこの直説法を用いることで、先行詞が存在していることを話者も聞き手も想定していると考えられる。

インフォーマント4の回答から、否定極性辞の有無にかかわらず、これらの文では直説法を用いて先行詞の存在を示唆していると答えている。そのためこのインフォーマントはこの文では事実を表していると想定されるため、接続法の使用はできないとしている。

続いて、関係節内の動詞が完了形で否定極性辞 *nunca* がある文とない文を用いて調査し

た。結果は次の通りである。

(143) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* }.

(それは初めて出版された本である。)

(144) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* } nunca.

(それは今までで初めて出版された本である。)

次が本調査で得られた4名のインフォーマントの回答である。

インフォーマント1

(143) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* }.

(144) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* } nunca.

<コメント>この2つの文ではどちらも接続法は使えないが、もし *Te regalaré el primer libro que se haya publicado nunca*. という未来の文であれば接続法も可能である。

インフォーマント2

(143) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* }.

(144) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* } nunca.

<コメント> 問題(143)では接続法は使えない。問題(144)では接続法を使用することは可能だと思われるが、最上級の語が先行詞に現れていた問題(111)で見られた接続法の文より違和感がある。

インフォーマント3

(143) Es el primer libro que se { *ha publicado* / *haya publicado* }.

(144) Es el primer libro que se { ?*ha publicado* / *haya publicado* } nunca.

<コメント> 否定極性辞 *nunca* のない問題(143)は、歴史上初めて出版された本という意味ではなく、何らかの具体的なテーマを扱った最初の出版物について言及していると思われる。否定極性辞 *nunca* がある問題(144)の場合、歴史上初めて出版された本であることを強調しているようである。

インフォーマント4

(143) Es el primer libro que se { *ha publicado* / ?*haya publicado* }.

(144) Es el primer libro que se { *ha publicado* / ?*haya publicado* } nunca.

<コメント> 最上級の語が先行詞に現れていた問題(110)と(111)と同様に、その内容が事実であると考えられるため直説法を用いる。先行詞が未確認のものであることを示すため

に関係節内で接続法が使用されるのを聞いたことはあるが、ほとんど用いない。否定極性辞 *nunca* がある場合、強調している印象を受ける。

本調査の結果から、先行詞に *primero* があり、後に関係節を導く場合、否定極性辞 *nunca* がなければ関係節内において接続法を選択する可能性は極めて低いと言える。一方で否定極性辞 *nunca* がある場合には、通常であればこの関係節内で直説法を導くと予想できる。しかし否定極性辞が現れる場合には、直説法と接続法の両方が関係節内で選択可能であるということが、インフォーマント 2 と 3 の回答からもわかる。つまり否定極性辞 *nunca* によって、「その本が現れるまでは全く同じような本は存在しなかったが、ようやく初めてその本が出版された」という意味が与えられると考えられる。否定極性辞 *nunca* を従えることで、直説法と接続法のどちらの場合にもこのような意味が付加されるが、関係節内の叙法選択によって表される意味に関しては、直説法が用いられると話者が見てきたものと先行詞を比べていることを表す。また一方で、接続法が用いられると、話者はその先行詞について「初めてである」と断定できないが、知らない本を含めて考えたとしても、なおその本が初めて出版されたものであることを意味すると言えるだろう。結果として、通常は直説法を用いて表すこの表現で接続法をあえて用いることで、話者は誇張して述べると考えられる。

4. 3. 4. Mark Davies コーパスと電子コーパス CREA 検索からみられた留意すべき点

関係節を従える最上級および最上級最上級最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語を有する先行詞の構文における叙法選択において、特に接続法に見られた特徴として、前置詞の後に現れるという点と、*ser* 動詞の叙述補語として現れるという点が挙げられる。これらは叙法選択に直接的な影響を与えるものではないが、本論文を書くにあたって行った調査から見つかった点である。

Mark Davies コーパスの検索からは、接続法になっている用例 14 例のうち、前置詞の目的語であるものは 2 例(14%)であった。また、*ser* 動詞の叙述補語であるものは 10 例(71%)見つかった。

電子コーパス CREA の検索からは、前置詞の後に直説法がくる例は 2 例(0.69%)、*ser* の後に直説法がくる例は 21 例(7%)、前置詞の後に接続法がくる例は 15 例(38%)、*ser* の後に接続法がくる例は 9 例(23%)あったことがわかった。例えば次のような用例である。

(145) Tú eres capaz de irte a París con el primero que se te *presente*.

(君は、君が紹介してもらった最初の人とパリに行くことができるよ。)

(Ángel Vázquez, *La vida perra de Juanita Narboni*, España, 1976)

(146) Ya que el toro aludido por Pedro Romero debió ser el último que *intentara*

matar.

(ペドロ・ロメロが話していた牛は、彼が殺そうとした最後の牛に違いなかったからである。)
(Daniel Topia Bolívar, *Historia del toreo (I)*, España, 1992)

4. 4. 第4章のまとめ

本章では、最上級および *primero*、*último*、*único*、*mejor*、*peor* など最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が関係節を従える先行詞に現れる場合、話者は特定の物事や人物を指して言及することが多いため、直説法がとられることが圧倒的に多い。しかしごく稀に接続法が選ばれることがあり、先行詞が客観的事実である場合になぜ非主張を表す接続法を用いるのかに注目した。また *primero*、*último* などの語が先行詞に付き、関係節が後続する場合の叙法選択も、最上級の語句が先行詞に付く場合の関係節内の叙法選択と同様の働きが見られるかについても注目した。

話者が先行詞の内容は事実であるを知っているにも関わらず、直説法ではなくあえて接続法を用いている理由は、「信じがたい」という否定的なニュアンスによるものと、また、接続法を用いることで聞き手の注意を喚起し、結果として話者の主観や、やや誇張した表現と受け取られるからであるとした。例えば、電子コーパスで得られた用例(116)のような用例が話者の主観や誇張した表現であるととらえることができる。

(116) El deterioro de la edad era ya más que patente, pero Rosa resistía y seguía sacando fuerzas de flaqueza para decir una frase de tono. Con Rosa Chacel se va un talento y una fuerza, y la última persona que yo *haya conocido* nacida aún en el siglo XIX.

(年をとりすぎていることはもはや明らかであったが、ロサは風格のある文を言うために抵抗し、また力を振り絞り続けていた。ロサ・チャセルは才能と力のあふれる人物であり、彼女は私が今までで知り合った中で19世紀生まれの最後の人物である。)

(*El Mundo*, España, 1994)

そして先行詞が話者に与えた印象が非常に強いため、話者が「信じがたい」または「自分の経験からだけでは実際にそうだと主張するには自信がない」という否定的な意味合いを与えたい場合は、*no* を伴わずに否定極性辞 (*nunca*、*jamás*、*en mi vida*、*en el mundo entero* など)を付加すると考えられる。また *no* を伴わない否定極性辞をこの種の関係節内で用いることによって、「その先行詞を目にするまでは存在しなかった」、または「その先行詞の内容を経験するまでは同じような出来事は起こらなかった」という意味を加える。話者は特定の先行詞について述べているなら直説法を選択することがほとんどであるが、「今までになかったほどである」と強調したいが、そう断定してしまうほど確信がない場合には、「他にあるかもしれない」というニュアンスを出すために接続法の使用が許容され

る。そのため、否定極性辞を用いた場合には話者の否定的な意味合いをより強く表すこととなり、その結果、話者の主張を控えようとする接続法も導かれやすいと言えるだろう。

そして統語的な観点から考えると、最上級および最上級に準ずる語を先行詞に付加することでその先行詞は話者にとって他とは異なる唯一性を帯びたものとなり、これが否定誘引要素として否定極性辞を導くと考えられる。

本節で試みた電子コーパス調査から、最上級に準ずる語が先行詞に現れ、その後に関係節が続く場合、接続法が用いられることは稀であり、またその少ない接続法の用例の中でもほとんどのものが不特定や発話時から見た未来の意味で用いられている。特定の先行詞であるにもかかわらず、接続法を用いる用例はわずかであった。

インフォーマント調査からわかったことは、また *primero* や *último* のような語が先行詞に現れる場合にも「比較範囲」が限定されるなら直説法が選択されやすくなると言えるが、基本的には話者が先行詞を修飾する内容を主張するか控えるかによって叙法選択がなされると言えるだろう。

またこの種の関係節に否定極性辞 *nunca* や *jamás* がない場合は直説法が選ばれる傾向が非常に強く、一方でここに否定極性辞が現れると、直説法はもちろん接続法の許容度もやや上がることがわかった。この現象が起こる理由として考えられることは、最上級および最上級に準ずる語として用いられている形容詞の程度が他と比べて最も高いことから、関係節を含む名詞句に唯一性を与えることができる。そして最上級や最上級に準ずる語が否定誘引要素となって否定極性辞を関係節に導きやすくし、さらにこの否定極性辞によって否定的なニュアンスが関係節内に現れ、その結果、主張を避ける接続法の許容度がやや上がるということである。

否定極性辞を用いることによって、話者は「先行詞を目にするまで他には存在しなかった」または「起らなかった」という意味を先行詞に与え、また特定のものについて言及している場合は直説法で表わすことが普通である。しかし話者の経験や知識からだけでは断定できないが、話者の知らないものを考慮してもなおその先行詞の与える印象が一番強いのであると示したい場合に、あえて接続法を選ぶと考えられる。そして、通常は無標の直説法で表わすことが妥当であると考えられる場合に、有標の接続法を用いることによって話者の誇張した大げさな表現、または凝った表現として受け取られると言えるだろう。

そして、ラテン語の名残として接続法過去-*ra* 形が直説法過去完了の意味で現代スペイン語においても、時事文や文語的で古い文体として使用されることがある。古い文体であっても現代でも用いられている理由は、接続法は話者の主張を控える叙法であり、また接続法を用いることでその関係節の内容の情報としての重要性を与えない働きが現代スペイン語に見られるため、受け入れられていると考えられるだろう。

第5章 関係節における叙法決定と疑惑を表す副詞 *quizá(s)*、*probablemente*、*posiblemente* について

本節では、「主張」の概念で説明可能な関係節内の叙法選択の一つとして、疑惑を表す副詞 *quizá(s)*、*probablemente*、*posiblemente* との関連について考察する。

関係節内では文脈と話者の先行詞が存在するか否かに対する話者の確信の度合いによって主張するか否かが決定されて叙法選択がなされるのであれば、この関係節の中に、*quizá(s)*、*probablemente*、*posiblemente* などの疑惑を表す副詞が現れた場合は、どのような影響が叙法選択に及ぼすかについて検証していく。

一般的に、独立文で疑惑を表す副詞が動詞よりも前に現れた場合は、直説法と接続法のどちらも選択され、動詞よりも後に現れた場合は直説法のみ選択されるとされている³³。ただし同じ疑惑の副詞であっても、*a lo mejor* や疑問文で用いられる *acaso* などが用いられる場合の動詞は直説法のみ選択可能である。

次の節では、関係節の中や関係節の前に疑惑を表す副詞が存在する場合、どのような叙法選択がなされるかについて考察するため、電子コーパスを用いて用例を集め、さらに疑惑の副詞と叙法選択の関係を調べる。*quizá* 以外の疑惑の副詞が現れる用例も多く得られたため、本節の調査において疑惑の副詞の用法は全て同じとみなし、*quizá* を対象とする。

5. 1. 電子コーパス調査とその用例について

本調査では、先行詞に続く関係節の中で、動詞より前に *quizá* がある例と、動詞より後ろに *quizá* がある例 LEXESP CORCO という電子コーパス³⁴を用いて調べた³⁵。この形式をとる用例は全部で 55 例が見つかったが、独立文での *quizá* と叙法選択の規則に反するものは見つからなかった。従って、本調査からは、単独文における疑惑の副詞と叙法選択の基準は関係節内においても似た傾向が見られると言えるだろう。

関係節では話者の確信の度合いによって叙法選択がなされると述べたが、関係節内に疑惑の副詞が現れた場合、単独文と同じ叙法選択がされているなら、疑惑の副詞である *quizá* がある場合とない場合はどのような違いが見られるのかについて、次にいくつかの実例を挙げ考察していく。

最初に、関係節内に疑惑の副詞である *quizá* が動詞より先に現れる用例を挙げていく。

³³ Gómez Torrego(2003)を参照。

³⁴ 電子コーパス LEXESP CORCO は *Léxico informatizado del español*.を基にした電子コーパスである。

³⁵ 電子コーパス LEXESP CORCO より[*que...* 疑惑の副詞]で検索し、その中から関係節が現れる用例を選んだ。本稿では *quizá* と *probablemente* や *posiblemente* を扱う。なお、*a lo mejor* と *igual* については、単独文で直説法のみが選択され、関係節内においても同じ傾向が見られると想定されるため、本調査では省略する。

(147) Son, sin duda, los primeros pasos balbuceantes de unos trabajos que **quizá** nos *lleven*, con el tiempo y mucho más dinero, a éxitos más esperanzadores.

(間違いなくそれらは時間とお金をかけて、我々をより期待のできる成功へと導くことができる仕事の初めのステップである。)

(148) Otros, por el contrario, echan sobre sus hombros la tarea ingrata y a menudo no lo bastante aplaudida de situar la libertad y la creatividad humana un poco mas arriba en ese camino que **quizá** tampoco *lleve* a ninguna parte.

(その一方で、やりがいのない仕事や、おそらく何にもたどり着けないその道の少し上に人間としての自由や創造性を置くにはたびたび十分な称賛ができないような仕事を彼らの肩にのしかけるものもある。)

(149) Lo cierto es que en los Estados Unidos las grandes empresas compiten por financiar a pequeñas iniciativas privadas, como Novacor, Thermedics y otras que **quizá** *sean* capaces de inundar el mercado de corazones artificiales en la próxima década.

(確かなことは、おそらく次の10年間で人工の心臓を市場に供給することができそうなノヴァコーやサーメディックスなどのアメリカの大企業は、民間の小さな権利に出資することで競合している。)

(150) el tiempo de la política tiene mayor extensión: no sólo cuenta el deslumbramiento inaplazable del ahora sino también períodos más largos, el planeamiento de lo que va a ser el mañana, ese mañana en el que **quizá** yo ya no *esté* pero en el que aún vivirán los que yo quiero y donde aún puede durar lo que yo he amado.

(政治時代はより長い。つまり、現在の延期できない眩惑だけを含めているのではなく、明日はもう私は存在していないかもしれないが、私が愛する者たちがまだ生きているだろう、そして私が愛したことがまだ存在し続けることができる明日が、どうなるのかについて計画することのように、もっと長い期間についても含めているのだ。)

(147)から(150)の用例では、関係節内の動詞より先に疑惑の副詞 **quizá** が現れ、さらに関係節内の動詞は接続法で書かれていることがわかる。

次に、同じく関係節内の動詞より先に **quizá** が現れ、その動詞が直説法で示されている用例を挙げる。

(151) todas ofrecen ciertas ventajas a sus miembros, teniendo en cuenta un residuo

de iniquidad, cuya importancia aparece más o menos constante y que **quizá** *corresponde* a una inercia específica que se opone, en el plano de la vida social, a los esfuerzos de la organización".

(みんなは、一定の重要性が見え、またおそらく社会生活において組織の努力に相反する特定の惰性に相当する不公平な残り物を考慮に入れつつ、会員たちにいくつかの利点を与えている。)

(152) Otra lección, quizá menos obvia pero más general.

Una encuesta es un dato que **quizá** *debe* ser modificado en el futuro por el ejercicio de la voluntad.

(それほど明白ではないが、より一般的な他の教訓がある。アンケートとはおそらく将来において自発的に改められるべきデータである。)

(153) Es un lugar donde se forman, y se forman por medio de algo que ellos mismos dan vida y donde van a satisfacer unas necesidades que **quizá** en otros sitios no *pueden* ser satisfechas.

(それは、彼ら自身が創り上げる何かと、彼ら自身がおそらく他の場所では満たされないような必要性を満たす場所によって形成されている場所である。)

(154) Hay en el placer como una cierta empresa personal que procura su gozo por vías que **quizá** no *estaban* previstas, sino que son inventadas en el acto mismo de elegirlas.

(おそらく事前に準備されておらず、そのときになって考え出したような方法で、楽しみを提供する個人的な会社のようなものが喜ばれる。)

用例(151)から(154)のように、単独文で疑惑の副詞である *quizá* を用いた場合の叙法選択と同様に、関係節内において動詞よりも先に疑惑の副詞 *quizá* が現れると、後に来る動詞は直説法と接続法のどちらも選択可能であることがわかる。

次に、関係節内の動詞の後に疑惑の副詞 *quizá* が現れ、その動詞が直説法である用例を紹介する。

(155) Junto al dato de esta juventud rebelde de nuestro tiempo, coloca el novelista una crítica de la sociedad ZZT, crítica de tono menor, porque el escritor apela en ocasiones a situaciones demagógicas que *dejan* entrever **quizá** un compromiso extraliterario.

(我々の時代のこの反抗期のデータとともに、その小説家は ZZT という社会への批判を

やや弱い文体で発表した。なぜならその作家は時々、おそらく文体外への了解が垣間見えるような民衆扇動的な状況の手段に訴えているからである。)

また別の疑惑の副詞である *probablemente* や *posiblemente* が関係節の前に現れる用例も見つかった。

- (156) *Veía la escena, pero no pensaba en mamá ni en lo que pasaría luego con el piso, ni en si Santi, que estaba en un congreso en Atlanta, llegaría o no a tiempo para acudir al entierro, ni a quién pertenecerían aquellas voces y pasos cuyo eco se colaba por la ranura de la puerta, ni quién se habría tomado el café cuyos posos quedaban en el fondo de una taza sobre la mesita, **probablemente** la última persona que me estuviera haciendo compañía, sí, alguien que me había puesto una manta sobre las piernas y me acarició la cabeza.*

(私はその光景を見ていたが、何にも考えていなかった。ママのことやその後アパートで起こることや、アトランタにいたサンティが葬式に参加するために間に合うかどうかや、扉の穴から聞こえてきたあの声や足音は誰のものかや、テーブルの上のカップの底に少し残っているコーヒーを誰が飲んでいたかや、おそらく最後に私と一緒にいた人、つまり私の膝に毛布を掛けて、私の頭を撫でた人だろうけど、その人についてなど考えてもいなかった。)

(Carmen Martín Gaité, *Nubosidad variable*, España, 1992)

- (157) *En todo caso, fuera o no sincera, aquélla era, **posiblemente**, la última mujer a la que él *había querido*.*

(いずれにせよ、彼女が誠実であろうとなかろうと、おそらくあの人は彼が愛した最後の人物であっただろう。)

(Lorenzo Silva, *El alquimista impaciente*, España 2000)

用例(156)では、定冠詞を持つ先行詞に接続法を用いた関係節を従え、さらに関係節を含む名詞句の語群の前に疑惑の副詞 *probablemente* が現れている。これにより話者は先行詞である最後に付き添ってくれた人物がいることはわかっているが、果たしてそれが誰であるか具体的にわからないことが推測できる。話者には最後に一緒にいてくれた人物であろうということだけわかっていて、その人物についてはっきりとした確信がないため疑惑の副詞 *probablemente* を用い、さらに主張できないため接続法を用いていると考えられるだろう。

用例(157)においても、関係節を従える先行詞の前にコンマで挟まれた疑惑の副詞 *posiblemente* が現れ、さらに関係節内の動詞は直説法が選択されている。疑惑の副詞が用いられているが、関係節内の内容について話者はそうであったと確信があるため直説法が用いて表現していることが考えられる。そしてこの疑惑の副詞は、「その女性が彼が愛した最後の人物であった」ということについて直説法のみを用いて断言することはできない

ことを表している言えるだろう。

5. 2. 疑惑の副詞 *quizá* のある関係節とインフォーマント調査

第5. 1. 節で得られた疑惑の副詞 *quizá* が関係節に現れる用例を用い、4人のインフォーマント³⁶を対象に調査した。解答欄に何も記載されていない場合は、選択不可能であることを示す。また直説法と接続法の区別をするため、解答欄の接続法には下線を引いている。本調査で尋ねた内容は次の2点である。

①用例にある疑惑の副詞である *quizá* を除外した場合、その関係節内の叙法選択はどう影響するかについて。

②疑惑の副詞 *quizá* をそのまま用い、実例で見られる叙法と反対の叙法とを置き換えることが可能かどうかについて。

本調査で用いた用例とインフォーマントによる回答を紹介する。ここで紹介する用例は、電子コーパスから得られた用例をそのまま載せている。

用例の関係節の中で、疑惑の副詞 *quizá* が動詞の前に現れ、その動詞が接続法で書かれているものについてのインフォーマントの回答は次の通りである。

(147) Son, sin duda, los primeros pasos balbuceantes de unos trabajos que quizá nos *lleven*, con el tiempo y mucho más dinero, a éxitos más esperanzadores.

インフォーマント1	①llevarán	②llevan, llevarán
インフォーマント2	①llevan, llevarán	②llevarán
インフォーマント3	①llevan	②llevan
インフォーマント4	①llevan	②llevarán

①疑惑の副詞 *quizá* を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは4名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 *quizá* の後の動詞の叙法と反対の叙法である直説法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは4名であった。

(148) Otros, por el contrario, echan sobre sus hombros la tarea ingrata y a menudo no lo bastante aplaudida de situar la libertad y la creatividad humana un poco mas arriba en ese camino que quizá tampoco *lleve* a ninguna parte.

³⁶ インフォーマント1はスペイン・マドリード出身、インフォーマント2はチリ・サンティアゴ出身、インフォーマント3はスペイン・マドリード出身、インフォーマント4はスペイン・マドリード出身で、全員大学院生である。

インフォーマント 1	①lleva	②lleva, llevará
インフォーマント 2	①lleva, llevará	②llevará
インフォーマント 3	①lleva	②lleva
インフォーマント 4	①lleva	②lleva

①疑惑の副詞 **quizá** を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは4名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 **quizá** の後の動詞の叙法と反対の叙法である直説法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは4名であった。

(149) Lo cierto es que en los Estados Unidos las grandes empresas compiten por financiar a pequeñas iniciativas privadas, como Novacor, Thermedics y otras que **quizá** sean capaces de inundar el mercado de corazones artificiales en la próxima década.

インフォーマント 1	①son	②son, serán
インフォーマント 2	①son, serán, <u>sean</u>	②serán
インフォーマント 3	①son, <u>sean</u>	②son
インフォーマント 4	①son, <u>sean</u>	②son, serán

①疑惑の副詞 **quizá** を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは1名であり、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは3名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 **quizá** の後の動詞の叙法と反対の叙法である直説法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは4名であった。

(150) el tiempo de la política tiene mayor extensión: no sólo cuenta el deslumbramiento inaplazable del ahora sino también períodos más largos, el planeamiento de lo que va a ser el mañana, ese mañana en el que **quizá** yo ya no *esté* pero en el que aún vivirán los que yo quiero y donde aún puede durar lo que yo he amado.

インフォーマント 1	①estaré	②estaré
インフォーマント 2	①estoy, estaré, <u>esté</u>	②estaré
インフォーマント 3	①estoy	②estaré, estoy
インフォーマント 4	①estaré, <u>esté</u>	②estaré

①疑惑の副詞 **quizá** を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは2名であり、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは2名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 **quizá** の後の動詞の叙法と反対の叙法である直説法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは4名であった。

用例の関係節の中で、疑惑の副詞 **quizá** が動詞の前に現れ、その動詞が直説法で書かれているものについてのインフォーマントの回答は次の通りである。

(151) *todas ofrecen ciertas ventajas a sus miembros, teniendo en cuenta un residuo de iniquidad, cuya importancia aparece más o menos constante y que **quizá** *corresponde* a una inercia específica que se opone, en el plano de la vida social, a los esfuerzos de la organización".*

インフォーマント 1	①corresponde	② <u>corresponda</u>
インフォーマント 2	①corresponde	② <u>corresponda</u>
インフォーマント 3	①corresponde	② <u>corresponda</u>
インフォーマント 4	①corresponde	② <u>corresponda</u>

①疑惑の副詞 **quizá** を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは4名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 **quizá** の後の動詞の叙法と反対の叙法である接続法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは4名であった。

(152) *Otra lección, quizá menos obvia pero más general.*

*Una encuesta es un dato que **quizá** *debe* ser modificado en el futuro por el ejercicio de la voluntad.*

インフォーマント 1	①debe	② <u>deba</u>
インフォーマント 2	①debe	② <u>deba</u>
インフォーマント 3	① <u>deba</u>	② <u>deba</u>
インフォーマント 4	①debe	②

①疑惑の副詞 **quizá** を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは3名であり、接続法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは1名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 **quizá** の後の動詞の叙法と反対の叙法である接続法へ

の置き換えが可能と答えたインフォーマントは3名であった。

(153) Es un lugar donde se forman, y se forman por medio de algo que ellos mismos dan vida y donde van a satisfacer unas necesidades que quizá en otros sitios no *pueden* ser satisfechas.

インフォーマント1	① <i> pueden </i> 、 <u> puedan </u>	② <u> puedan </u>
インフォーマント2	① <i> pueden </i>	② <u> puedan </u>
インフォーマント3	① <i> pueden </i>	② <u> puedan </u>
インフォーマント4	① <i> pueden </i> 、 <u> puedan </u>	② <u> puedan </u>

①疑惑の副詞 *quizá* を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは2名であり、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは2名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 *quizá* の後の動詞の叙法と反対の叙法である接続法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは4名であった。

(154) Hay en el placer como una cierta empresa personal que procura su gozo por vías que quizá no *estaban* previstas, sino que son inventadas en el acto mismo de elegir las.

インフォーマント1	① <i> estaban </i>	② <u> estén </u> 、 <u> estuvieran </u>
インフォーマント2	① <i> estaban </i>	②
インフォーマント3	① <i> estaban </i>	② <u> estuvieran </u>
インフォーマント4	① <i> estaban </i> 、 <u> estuvieran </u>	② <u> estuvieran </u>

①疑惑の副詞 *quizá* を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは3名であり、直説法と接続法の両方選択可能であると答えたインフォーマントは1名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 *quizá* の後の動詞の叙法と反対の叙法である接続法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは3名であった。

(155) Junto al dato de esta juventud rebelde de nuestro tiempo, coloca el novelista una crítica de la sociedad ZZT, crítica de tono menor, porque el escritor apela en ocasiones a situaciones demagógicas que *dejan* entrever quizá un compromiso extraliterario.

インフォーマント1	①dejan	② <u>dejen</u>
インフォーマント2	①dejan	②
インフォーマント3	①dejan	② <u>dejen</u>
インフォーマント4	①dejan	②

①疑惑の副詞 **quizá** を外した場合、直説法のみ選択可能であると答えたインフォーマントは4名であった。

②実際の用例において、疑惑の副詞 **quizá** の後の動詞の叙法と反対の叙法である接続法への置き換えが可能と答えたインフォーマントは2名であった。

5. 3. インフォーマント調査の考察

第5. 2. 節のインフォーマントチェック①の結果から、接続法が現れやすい動詞である **deber** を用いている用例(152)を除いて、先行詞が定性を帯びている例文も不定性を帯びている例文も、疑惑の副詞である **quizá** を除外した場合に接続法のみ選択可能という例文はないことがわかった。さらに関係節には、疑惑の副詞 **quizá** があり、またその関係節内の動詞は接続法で表されている用例の中で、この **quizá** を除外すると直説法で表す用例が多くある。また用例(149)、(150)、(153)、(154)を用いた質問に対して、不定の先行詞や未来のものである先行詞では直説法と接続法のどちらも選択可能である例もある。このことから、疑惑の副詞を用いずに表す場合は、通常の関係節と同様、話者の先行詞に対して関係節を用いて表す内容に確信があるかないかによって主張をするか主張を控えるかが決まり、叙法選択をするということがわかる。また話者は関係節を用いて表す先行詞の内容に関してある程度の確信が持っているが、直説法を用いてはっきりとした主張をするほどの確信がない場合に補足として疑惑の副詞を用いていると想像される。そしてこの疑惑の副詞を使用することで、話者の確信の度合いは下がり、はっきりとした主張ができない場合に接続法が用いられる結果となると考えられるだろう。

また②の結果から、明らかに存在しないことについて話者が関係節を用いて言及する場合は、明らかに架空の物事や出来事であるため接続法を用いて表し、疑惑の副詞 **quizá** を用いることはないと言えるだろう。用例(155)を用いた質問に対して、関係節内における動詞が直説法であり、その後に疑惑の副詞 **quizá** がくる語順の例であるが、動詞が疑惑の副詞の後にきているにもかかわらず、この直説法の動詞を接続法へ置き換えることが可能であると述べたインフォーマントがいた。これは、文脈によっては接続法を選択することも可能であるとの回答が得られたが、独立文の規則から外れていることがわかる。そのような実例は電子コーパスの中からは見つけられなかったが、独立文と異なる点である。

5. 4. 第5章のまとめ

本節で見られた調査の結果からも、関係節において話者が先行詞を表す内容に対して十

分な確信があるかないかによって主張をするかしないかが決定され、叙法選択につながるということがわかる。

話者が関係節を用いて表す内容に確信がある場合には、その内容を事実として主張するために直説法で表し、その一方で、関係節内において表す内容に話者がはっきりと述べるには確信がない場合には、主張を避けるという点で接続法を用いて表すと考えられるだろう。さらに話者は関係節の内容に関してある程度の確信が持てているが、直説法を用いてはっきりとした主張ができない場合に補足として疑惑の副詞を用いる。そして話者の確信の度合いが十分でない場合にも、疑惑の副詞を用いてはっきりと主張することをさらに控える場合には接続法が用いられると考えられる。

さらに②の結果より、ほとんどの場合に実際の文で用いられている叙法と反対の叙法も選択することが可能であるとの結果が得られた。この結果から、関係節内の叙法選択は、関係節における話者の確信の度合いによって叙法選択がなされると言えるだろう。つまり話者が関係節を用いて表す内容に確信がある場合は、その内容をはっきりと主張しようとするため直説法を用い、一方ではっきりと主張するほど確信がない場合には接続法を用いる。またそこでさらに確信が弱まる場合には、補足として疑惑の副詞を用いると考えられるだろう。

第6章 結論

本論文では、電子コーパスとスペイン語話者を対象としたインフォーマント調査を通して、スペイン語の関係節内における叙法選択の基準に関する考察を試み、各叙法が選択される傾向と各叙法が表す意味合いに関する特徴を明らかにした。本研究で試みた考察を次のようにまとめ、本論文の結論とする。

6. 1. 本論文における関係節内の叙法選択を決定する基準について

一般に、関係節内の叙法選択の基準とされている「特定性」の概念は多くの関係節中での使用例に共通して見られる。「特定性」とは、関係節の先行詞となる語が話者にとって特定の対象であるかどうか、また何を指すかわかっているか否かという概念である。先行詞が指す対象が特定であれば直説法が選択される一方で、不特定であれば接続法が選択されるということを表している。しかしこの「特定性」という概念がすべての関係節において有効であるというわけではなく、この概念をもっては説明の困難な例も見られる。

そこで、本論文では「特定性」の概念は多くの関係節内の叙法選択に影響を与えているということを認めつつ、この「特定性」の概念には話者の「主張」という概念も関係している仮定した。先行詞が指す対象が実在する、または実際に起こると話者がみなす場合には、話者の先行詞の存在性に対する確信が高いため、関係節の内容を断定的に主張しようとし、直説法を選択する。一方で、話者にとって先行詞が指す対象が実在するかどうか不明である場合、または先行詞を説明する関係節の内容が実現するかどうか不確かである場合には、話者の先行詞の存在性または実現性に対する確信は弱まり、断定的に主張することを避けようとし、その結果接続法を選択する。この点において、関係節内の叙法選択は「特定性」の概念によって決定されると言えるだろう。

しかし関係節内の叙法は「特定性」の概念のみによって決定されると言い切れない理由は、ジャーナリズム用法に見られる接続法の使用のように、先行詞が指す対象が特定でありながら、後続する関係節内であえて接続法を選択する場合もあるためだ。ここで「特定性」の概念のみを用いて説明することは困難であるが、この接続法を「話者の主張を控えようとする叙法である」と捉えれば、話者は関係節が示す内容に情報としての重要性を持たせようとし、意図で用いられていると考えることができる。

本論文では、関係節における叙法選択の基準は、多くの場合に「特定性」という概念で説明可能であるが、その「特定性」を決定づけるものは、先行詞に後続する関係節の表す内容を話者が主張するか控えようとするか否かであると仮定する。「特定性」と「主張」の2つの概念に分けられるのではなく、「特定性」によって叙法が選択される背景に、はっきりとした主張を表そうとする直説法と、その主張を控えようとする接続法の区別があるためである。

6. 2. 第2章のまとめ

第2章では、第一に関係節における叙法選択とこれまで広く唱えられてきた「特定性」という概念の妥当性について検証するため、電子コーパス CREA を用いて関係節を従える先行詞の用例を集め、分析を試みた。本電子コーパス調査では、特定の先行詞も不特定の先行詞もどちらも補語にとることができると思われ、*buscar*、*querer*、*necesitar* という動詞を文の主動詞にとり、さらに補語である先行詞に関係節が後続する用例を集めた。その結果、本調査から得られたほぼすべての用例の関係節は「特定性」の概念によって区別できることが明らかとなった。つまり、先行詞の指す対象が存在する、または実現すると考えられる場合、話者にとってその指示対象は特定であり、確信が高くなるため、後続する関係節の表す内容をはっきりと主張しようとする直説法を用いる。その一方で、先行詞が指す対象が実在するかどうか、または実現するかどうか不明である場合、話者にとって指示対象は不特定であり、話者の確信は低くなり、また後続する関係節の内容をはっきり主張することを避けようとするため、接続法を用いるということである。

第2章の電子コーパス調査からは、関係節内の叙法選択は主に「特定性」の概念で区別されるということを確認できたが、ジャーナリズム用法と言われるような、指示対象は明らかに特定であるにもかかわらず、後続の関係節内では接続法が用いられている例もあるため、常に「特定性」の概念によってのみ叙法選択が決定されるわけではない。この用法の意図を探るため、インフォーマント調査を行い、関係節の叙法には「主張」の概念が関係しているかどうかについて検証した。結果、やはり関係節が現れる多くの場合に、「特定性」という概念で叙法選択がなされることが明らかになったが、先行詞の指す対象が話者にとっても聞き手にとっても特定であり、またその内容は周知の事実である場合、後続の関係節内において接続法が用いられる例も見られた。

このように先行詞が指す内容が話者と聞き手にとって既知情報であり、話者が先行詞に続く関係節の表す内容に情報としての価値、あるいは重要性をあえて置かないでおこうとする場合、先行詞の指示対象が特定であっても、主張を避けるために接続法を用いることがあるということが確認された。先行詞の指す対象に確信があるかないかによって、話者は関係節の内容をはっきりとした主張をするか否かが決定されるため、「特定性」と「主張」の概念は異なる2つの概念ではなく、話者の「主張」の有無は「特定性」の概念も含意していると言えるだろう。

関係節内の叙法選択は「特定性」の概念で説明することが可能であるが、すべての関係節内の叙法を決定付けているものは、直説法は話者の主張を含める叙法であり、接続法は話者の主張を控える叙法であるという「主張」の概念であると考えられる。

6. 3. 第3章のまとめ

第3章では、電子コーパスの用例を参考にし、この「主張」という概念によって表される直説法や接続法の使用例は、どのような文脈や意味合いの中で用いられるのかについて考

察し、各叙法の表す意味の下位分類を行った。

第3章で扱った用例の中で関係節内に直説法が選択されているものの特徴は、話者が実際に目に見えているものについて言及したり、話者と聞き手が了解している内容について言及していることである。どちらの場合も、先行詞の指示対象は明らかで、関係節が示す内容に対して話者は事実であると確信しているため、関係節で表す内容を主張する直説法が選択されていることが明らかとなった。

一方、関係節内において接続法が用いられている場合は、大きく分けて「願望」、「仮定」、「後時」などの意味が含まれている用例が多いことが明らかになった。

接続法を用いた用例で話者の「願望」の意味が関係節に含まれる理由には、話者が理想とする先行詞や必要としている先行詞について述べているが、そのようなものが実在するかどうかは不明であることが考えられる。そのため話者は関係節を用いる際、先行詞として機能する語が指す対象が実在するという確信がなく、はっきりと主張ができないため接続法を用いると考えられる。

また接続法が用いられる用例の中に「仮定」の意味が含まれる場合は、実在の物事や人間、または実際に起きる出来事を先行詞の指す対象として述べるのではなく、話者が仮定した内容について述べている。話者が関係節で表したことが望んだとおりに起こるか否かは不確かであり、関係節で表す内容が実現するかどうかについての確信がないため、主張を控える接続法を用いていると考えられる。

接続法が用いられている用例の中で、「後時」の意味が含まれている場合、話者にとって発話時には関係節が表す内容が実現するかどうか不明であり、話者の確信は低くなるため、はっきりと主張することを避けようとする接続法が選択されると考えられる。

このように、先行詞に後続する関係節内で用いられる叙法に共通していることは、先行詞として機能する語が指す対象が実在すると確信できるなら、話者は関係節の内容を主張するための直説法を用い、一方で先行詞が指す対象が実在するか否か、または実現するか否かについて確信が持てない場合は、関係節を用いて表す内容を主張しないでおこうとする接続法を用いることが確認された。

6. 4. 第4章のまとめ

第4章では、最上級および *primero*、*último*、*único* など最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に付き、その後に関係節が続く場合の叙法選択について考察した。最上級および *primero*、*último*、*único* などの語が先行詞に関係節が続く場合は、話者にとって先行詞が指す対象が特定の物事や人物、または出来事であることが多く、直説法が選択されることが圧倒的に多いということは容易に想像がつく。しかしながらごく稀ではあるが、このような構文の関係節内において接続法が選ばれることもある。そこで第4章では、先行詞が指す対象が特定であり、実在の人間や事物、または出来事を表しているにもかかわらず、後続する関係節で接続法が用いられている意図は何かについて、「主張」

の概念を通して考察した。

また最上級を表す語は相対的な形容詞である一方で、**primero**、**último**、**único** といった語は絶対的な要素を持った形容詞である。最上級が関係節を従える先行詞に現れる場合と、最上級に準ずる語が先行詞に現れる場合に、後続する関係節内の叙法選択に何か差異が見られるか、それともどちらも同じ働きがあるかどうかについても考察した。

さらに、最上級および **primero**、**último**、**único** などの語が先行詞に現れる場合、後続する関係節内の叙法選択に **no** が付かない否定極性辞(**nunca**、**jamás**、**en mi vida**、**en el mundo entero** など)が与える影響についても考察した。

最上級の語を持つ先行詞が何を指しているか話者が知っている場合、後続の関係節内では主に直説法が選択されるが、あえて接続法を用いる意図として、話者がはっきりと断定することを避け、「信じがたい」という否定的なニュアンスを与える働きがあると考えられる。また特定の先行詞にもかかわらず、後続の関係節内で接続法を用いることで聞き手の注意を喚起する働きがあると考えられる。関係節に接続法を用いることで話者の否定的なニュアンスを表したり、聞き手の注意を喚起され、結果的に、話者の主観が反映された表現、あるいは、誇張した表現として受け取られると言えるだろう。また話者の主観や誇張した表現として接続法がこの種の関係節に用いられる理由は、先行詞である語が他のものと比べて一番であると、話者の意見や経験からだけで言い切ってしまうことが困難と判断された結果として、主張を控える接続法が選択されるからである。そして接続法が意味するものは、先行詞と同等の話者の知らない他のものまでをも考慮に入れたとしても、先行詞が指す対象の特徴が表す印象が非常に強いということである。

また電子コーパスを用いた調査やインフォーマント調査から最上級および **primero**、**último**、**único** などの語が先行詞に現れる場合、後続する関係節内の叙法選択に見られた特徴として、通常多くの関係節内における叙法選択のように、先行詞の指す対象が話者にとって特定であるか不特定であるかという基準で叙法決定がなされている点が挙げられる。

インフォーマント調査の結果からも、この種の構文における関係節内のほとんどは、先行詞の指示対象が明らかであるため、直説法が選ばれるということが判明した。しかし、最上級および最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、関係節を従える構文においても、「特定性」の概念によってのみ説明可能であるというわけではない。先行詞にあたる語を話者が目にするまでは同じようなものは一つとして存在しなかった、または見たことがなかったという意味を表す場合に接続法を用いるということも明らかになった。

この種の関係節内において、**no** が付かない否定極性辞 (**nunca**、**jamás**、**en mi vida**、**en el mundo entero** など)を付加することが可能である。この否定極性辞の働きは先行詞が話者に与えた印象が非常に強く、話者が「信じがたい」または「自分の経験からだけでは主張するには自信がない」という否定的な意味合いを与えたい場合に用いられると考えられる。また **no** を伴わない否定極性辞をこの種の関係節内で用いることによって、話者の「そ

の先行詞を目にするまでは存在しなかった」、または「その先行詞の内容を経験するまでは同じような出来事は起こらなかった」という意味を持たせることができる。この場合であっても、話者は特定の先行詞について述べているなら直説法を選択することが予想される。しかし「今までになかったほどである」と強調したい意図はあるが、そう言い切ってしまうほど確信がない場合には、「他にも先行詞が指す対象を上回るものがあるかもしれない」ことを表すために主張を避ける接続法を選択すると言えるだろう。またその他の存在を暗示することで、「他に上回るものがあつたとしてもなお、先行詞の指す語が私にとって一番である」という意味合いも加わると考えられるため、接続法の使用が許容されると言えるだろう。それゆえに、最上級の意味を表す先行詞に続く関係節内で否定極性辞を用いた場合には、話者の否定的な意味合いをより強く表すこととなり、その結果、話者の主張を控えようとする接続法も導かれやすいと言えるだろう。

そして第4章では、最上級の語が関係節の先行詞に現れる用法と叙法選択の関係について Pérez Saldanya (1999)や Ahern (2008)などが提唱した「比較範囲」という概念が *primero*、*último*、*único* などの最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に現れる場合にも、関係するかどうかについて考察した。この概念が表すものは、先行詞の比較対象とされる「比較範囲」が具体的であれば、関係節内において直説法が選択されやすくなり、一方でこの「比較範囲」が広がると、先行詞に続く関係節内において接続法が選択されやすくなるというものである。インフォーマント調査の結果、この「比較範囲」の概念が叙法選択に影響を及ぼしていると言えるかもしれないが、基本的には話者が先行詞を修飾する内容を主張するか控えるかによって叙法選択が決定されると考えられる。

また *primero*、*último*、*único* などの語が先行詞に付き、関係節内に *no* が付かない *nunca* や *jamás* などの否定極性辞がない場合は直説法が選ばれる傾向が強いことも明らかとなった。しかしこの種の構文で *no* が付かない否定極性辞が現れると、直説法はもちろん接続法の許容度もやや上がることがわかった。この現象が起こる理由として考えられることは、最上級および最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語として用いられている形容詞の程度が他と比べて最も高いことから、関係節を従える先行詞に唯一性を与えることができる。そして最上級や最上級に準ずる語が否定誘引要素となって否定極性辞を関係節に導きやすくし、さらにこの否定極性辞によってもたらされる否定的なニュアンスのために、主張を避ける接続法の許容度がやや上がるということである。

まとめとして、*no* が付かない否定極性辞を用いることによって、話者は「先行詞を目にするまで他には存在しなかった、または起こらなかった」ということを意味すると言えるだろう。またこの種の構文に見られる先行詞が特定である場合は、通常の関係節と同様、直説法で表わすことが普通である。しかし話者の経験や知識からだけでは判断できないが、話者の知らないものを考慮してもなおその先行詞の与える印象が一番強いのであると示したい場合に、あえて接続法を選ぶと考えられる。そして、通常は無標の直説法で表わすことが妥当であると考えられるが、あえて有標の接続法を用いることによって話者の主観や、

あるいは誇張した表現、または凝った表現として受け取られると言えるだろう。

6. 5. 第5章のまとめ

第5章では、先行詞に後続する関係節内の叙法選択と *quizá(s)* など疑惑の副詞の関係について考察した。一般に、独立文で疑惑を表す副詞が動詞よりも前に現れる場合は、直説法と接続法のどちらの叙法も選択することができるのに対して、疑惑を表す副詞が動詞よりも後に現れた場合は直説法のみ選択することができるとされている。

第5章でも電子コーパスを用い、そこから得られた用例について分析した結果、疑惑の副詞である *quizá* が単独文で用いられる場合の叙法選択の上述の傾向と、関係節に見られる場合の叙法選択の傾向は同じであることが明らかとなった。これは疑惑の副詞を動詞より前に置くことで、話者がこれから発話する内容に疑義を抱いていることを表すが、その後の動詞の叙法は話者の確信の度合いによって決定されるからであると言えるだろう。つまり話者は先行詞が指す対象は何を指すかについて確信が持てる場合は主張の叙法である直説法を用い、一方でその確信が低ければ、主張を控えようとする叙法である接続法を用いるということである。また疑惑の副詞が動詞より後にとられる場合、話者は疑惑の副詞を用いて疑義を抱いているということを表す以前に、話者は先行詞の指す対象が何であるかについて確信があるため、直説法を用いるが、発話後に疑義を抱いているという意味合いを補足するために、動詞の後に疑惑の副詞を用いていると考えられる。これは単独文と関係節のどちらの場合も言えることである。

またインフォーマント調査から確認できたことは、話者は先行詞の指示対象は何であるか知っているため、関係節の内容について主張することが可能であるが、直説法を用いてはっきりとした主張してしまうには不安がある場合に、補足として疑惑の副詞を用いる傾向があるということである。また話者の関係節で表す内容に対する確信の度合いが十分でない場合にも、疑惑の副詞を用いて疑義を抱いていることを示し、さらに関係節の内容をはっきりと主張することを控える場合には接続法が用いるということも明らかとなった。ただし、先行詞の指す対象は存在しない、実際には起こらないということが話者にとって明らかな場合、現実のものを指しているわけではないため関係節内には接続法を用い、あえて疑惑の副詞 *quizá* を用いることはないと言えるだろう。

6. 6. 本論文の結論

本研究では、スペイン語の関係節内における叙法選択はどのようにして決定されるか、また関係節内で各叙法が選択された場合、どのような意味を表すかについて、電子コーパスやインフォーマント調査を通して考察し、その結果、先行研究で関係節内における叙法選択の基準であるとされてきた「特定性」の概念の有効性を改めて確認することができた。

しかしながら、この概念はすべての関係節において有効であるわけではなく、一部の関係節に見られる接続法の用法で、この「特定性」の概念では説明できないものもあること

も確認することができた。つまり、「特定性」の概念とは先行詞の指す対象が特定であれば、関係節内では直説法が選択され、一方で先行詞の指す対象が不特定であれば、関係節内では接続法が選択されるということだが、実際には、先行詞の指す対象が特定である、または実在するにもかかわらず、後続する関係節内では接続法が用いられることがある。例えば、第2章で扱ったジャーナリズム用法と呼ばれるような、指示対象が特定である先行詞に後続する関係節内において稀に接続法が選択される場合や、第4章で扱った最上級および最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に付き、先行詞の指す対象が特定であるにもかかわらず、後続する関係節内では接続法が選択される場合などが挙げられる。

従って、本論文ではこの接続法の使用と「特定性」の概念の矛盾点を解決できる概念として、関係節の叙法選択には話者が「主張」の概念が全体的に関係しているとした。つまり、話者は先行詞が何の対象を指すか知っている場合、関係節が表す内容に対して確信があるため、主張を表す叙法である直説法を選択するということを意味する。またその一方で、話者にとって先行詞は何の対象を指すか不明である場合、話者は後続する関係節が表す内容に対して確信がないため、主張を控えようとする叙法である接続法を選択するということも考えられる。さらに、「主張」の概念がより包括的な叙法選択の基準となっている理由に、話者にとって先行詞の指す対象は明らかであるにもかかわらず、後続の関係節に接続法を用いる用例が挙げられる。この場合の接続法が選ばれる要因として、話者が特定の指示対象に後続する関係節に情報としての価値をあまり与えようとしないうちに、主張を避ける接続法が選択することが考えられる。

以上のように、「特定性」と「主張」の概念の関係を考慮すると、話者が先行詞の指す対象を知っている、現実には起こるとみならず場合、先行詞の対象が特定であるゆえに、関係節の内容を直説法を用いて主張し、そうでない場合は関係節の内容を接続法を用いて主張を控えることにつながると考えられる。また主張をするか否かによって叙法が決定されるのだが、この決定までの過程で、先行詞の指す対象が特定か不特定かによるところが重要となるため、「特定性」の概念が多くの関係節における叙法選択の基準であると考えられてきた理由であると考えられる。

また本論文では、関係節内の叙法選択の基準となる「主張」の概念について検証した他に、関係節内で直説法が選択される場合と接続法が選択される場合の各叙法が表す意味についても考察した。直説法が選択される用例の中で、関係節が示す内容に対して話者は、実際に目にしている、または関係節で表す内容は事実であると確信しているため、関係節でははっきりと主張するということが共通して見られた。一方、関係節内において接続法が用いられている場合には、大きく分けて「願望」、「仮定」、「後時」などの意味が含まれていることが多いことが明らかとなった。関係節に接続法が用いられ、かつ「願望」、「仮定」、「後時」を表す場合に共通して見られることは、話者は関係節を用いて示す内容が実現するかどうか、または先行詞が指す対象が実在するかどうか不明であるため、関係節の

表す内容を主張することを控えようとする働きがあると考えられる。

また、関係節内の叙法選択を決定付ける「主張」の概念と、関係節における各叙法が表す意味についての考察以外に、関係節の叙法選択にかかわると考えられるその他の要因として、疑惑を表す副詞との関係についても取り上げた。

話者は先行詞の指す対象が存在するかどうかに関して、ある程度の確信が持てているため直説法を選択するが、直説法のみを用いてはつきりと主張してしまうほど確信が持てない場合に、補足として疑惑の副詞を用いるということが判明した。また先行詞の指す対象が不明である場合には、話者は関係節の内容を主張することはできないため接続法を選択し、また疑惑の副詞を用いて疑義を抱いていることを示すと言えるだろう。

以上のことから、関係節内の叙法の働きを次のようにまとめて本考察の結論とする。

本論文では、関係節における叙法選択の包括的な基準として「主張」の概念が関係しているとした。話者が先行詞は何の対象を指すか知っている場合や、話者は関係節が表す内容に対して確信がある場合に、主張を表す叙法である直説法を選択し、その一方で、話者にとって先行詞は何の対象を指すか不明であるがゆえに、後続する関係節が表す内容を主張することは控えようとする場合に、接続法を選択するということである。

このように、話者の主張を表すか控えるかについて決定される要因として、話者が先行詞の指す対象を知っている、先行詞の指す対象は実在する、現実にとみならず場合などのような、先行詞の指す対象が特定であることが関係しているため、「特定性」という概念だけを用いても、多数の関係節の叙法選択に概ね有効であると考えられる。

しかし、話者にとって先行詞の指す対象は明らかであるにもかかわらず、後続する関係節の中で接続法を用いる例のように、「特定性」という概念のみでは説明ができない関係節の叙法選択も見られる。話者は特定の先行詞に言及しているが、関係節が表す内容に対する確信の度合いが関係しているわけではなく、この場合は関係節の表す内容に情報としての価値をあまり与えないということが関係していると言えるだろう。なぜこの意味合いを接続法を用いて表すことができるのかという理由は、接続法が話者の主張を控える叙法であるからである。

以上のように、指示対象が特定できない場合の接続法と、指示対象が特定であるにもかかわらず接続法を用い、関係節の内容に情報としての価値を与えないとする用法に共通して見られる要因として、接続法が話者の主張を控える叙法であるということが言えるだろう。また、関係節内の叙法選択の基準は「主張」の概念と関連していることから、いくつかの面で差異は見られるが、他の従属節である名詞節や副詞節との一定性を認めることができると言えるだろう。

最後に本研究に際して、様々なご指導を頂いた福嶋教隆先生に深く御礼申し上げます。また本博士論文の審査をお引き受けくださった宮本正美先生、**Montserrat Sanz** 先生、大阪大学の長谷川信弥先生に心から感謝の意を表したい。福嶋ゼミの皆様、本論文のインフォーマント調査の際に快く協力してくださった留学生の皆様、特に貴重な意見や指摘をくださった **Enrique Alberó** さん、**Danya Ramírez** さん、**Juan Romero** さん、**Laura Rodrigo** さん、**Paz Prieto** さん、**Roger Civit** さん、**Santiago Rodríguez** さんに感謝する。そして貴重な研究発表の機会を与えてくださり、様々なご意見やご指摘をくださった関西スペイン語学研究会の皆様へ心からの感謝の気持ちを申し上げます。

参考文献

- Ahern, Aoife (2008) *El subjuntivo: contextos y efectos*. Arco/Libros, Madrid.
- Akmajian, Adrian, Richard A. Demers y Roberto M. Harnish (1984) *Lingüística: una introducción al lenguaje y la comunicación*, Alianza Universidad, Madrid.
- Alarcos Llorach, Emilio (1999) *Gramática de la lengua española*. Espasa Calpe, Madrid.
- Bello, Andres (1970) *Gramática de la lengua castellana (octava edición)*, Editorial Sopena Argentina, Buenos Aires.
- Borrego Nieto, Julio y Emilio Prieto de los Mozos (1985) *El subjuntivo: valores y usos*, Sociedad General Española de Librería, Madrid.
- Bosque, Ignacio (ed.) (1990) *Indicativo y subjuntivo*. Taurus Universitaria, Madrid.
- Butt, John & Carmen Benjamin (2011) *A New Reference Grammar of Modern Spanish (5th edition)*. Hodder Education, London.
- Carlsson, Lennart (1969) “Le type: *C’est le meilleur livre qu’il ait jamais écrit, en espagnol, en italien et en français*”, Uppsala, Almqvist & Wiksells.
- Díaz, Pilar y María Luisa Rodríguez (2002), *El subjuntivo 1*, Editorial Edinumen, Madrid.
- Fernandez Ramírez, Salvador (1986) *Gramática española (segunda edición)*, Arcos/Libros, Madrid.
- Fukushima, Noritaka (1979) “Modalidad de las clauslas sustantivas en español”, *Lingüística Hispánica* vol. 2, pp.63-84, Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai.
- _____ (1990) “Sobre la cláusula regida por *el hecho de que*”, *Hispánica* vol.34, pp.97-112, Asociación Japonesa de Hispanistas, Tokio.
- Gómez Torrego, Leonardo (2003) *Nuevo manual de español correcto*, Tomo 2, Arcos/Libros, Madrid.
- Gonzalo, Carmen R (1990) “La alternancia modal en las relativas y los tipos de mención del SN complejo”, *Indicativo y subjuntivo*, I. Bosque (ed.), pp. 280-300, Taurus Universitaria, Madrid.
- Haverkate, Henk (2002) *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Spanish Mood*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/ Philadelphia.
- Hummel, Martin (2004), *El valor básico del subjuntivo español y románico*, Universidad de Extremadura, Cáceres.
- Hurtado, Alfredo (1989), “Expresiones referenciales y no referenciales”, *Revista Argentina de Lingüística* vol.5, números 1, pp.147-159.
- Lunn, Patricia V (1989) “The Spanish subjunctive and ‘relevance’”, *LSRL* vol. 17, C. Kirschner y J. Decesaris, dirs, John Benjamins Publishing, Amsterdam.

- Miyake, Haruko (2007) “El estudio sobre la alternancia modal en las oraciones relativas”, *Tesis del curso máster*, Universidad Municipal de Estudios Extranjeros de Kobe, Kobe.
- _____ (2009) “Sobre “especificidad” y “aserción” de la alternancia modal en las oraciones relativas (1)”, *Kenkyuuka Ronshuu* vol.12, pp.25-40, Universidad Municipal de Estudios Extranjeros de Kobe, Kobe.
- Molina, Inmaculada (2006) *Practica tu español, El subjuntivo*, SGEL, Madrid.
- Moliner, María (2007) *Diccionario de uso del español (tercera edición)*, GREDOS, Madrid.
- Moore, Patrick James (2010) “Syntax and semantics of mood in Spanish relative clauses: A class/member analysis”, UMI Dissertation Publishing.
- Murillo, Jorge (2000), “Oraciones de relativo y variación modal en el habla culta costarricense”, *Revista de Filología Española* vol. 80-1.2. CSIC, Madrid.
- Pérez Saldanya, Manuel (1999) “El modo en las subordinadas relativas y adverbiales”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, I. Bosque y V. Demonte, dirs, Capítulo 50, Espasa Calpe, Madrid.
- Porto Dapena, J. Álvaro (1991) *Del indicativo al subjuntivo: valores y usos de los modos*, Arco/Libros, Madrid.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009) *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa Calpe, Madrid. [要約：福寫教隆 (2011)「叙法」『スペイン語新文法 章別和文要約5』、 pp.299-314 関西スペイン語研究会] [要約：仲井邦佳 (2011)「比較級・最上級・結果」『スペイン語新文法 章別和文要約5』、 pp.468-482 関西スペイン語研究会] [要約：片岡喜代子 (2011)「否定」『スペイン語新文法 章別和文要約5』、 pp.506-526 関西スペイン語研究会]
- _____ (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Espasa Calpe, Madrid.
- Ridruejo, Emilio (1999) “Modo y modalidad. El modo en las subordinadas sustantivas”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, I. Bosque y V. Demonte, dirs, Capítulo 30, Espasa Calpe, Madrid.
- _____ (2011) “El superlativo como inductor modal”, *60 preguntas de gramática dedicados a Ignacio Bosque*, M. Victoria Escandell Vidal, M. Leonetti, C. Sánchez López, dirs, pp. 207-212, Akal, Madrid.
- Rivero, María Luisa (1977) “Capítulo 6. Referencia y especificidad”, *Estudios de gramática generativa del español*, Cátedra, Madrid.
- _____ (1991) *Las construcciones de relativo*, Taurus Universitaria, Madrid.

- Rojas, Nelson (1997) "Referentiality in Spanish noun phrases", *Language* vol. 53-1, pp.61-69, Language Society of America.
- Sastre Ruano, María Ángeles (1997) *El subjuntivo en español*, Colegio de España, Salamanca.
- Terrell, Tracy & Joan Hooper (1974) "A semantically based analysis of mood in Spanish", *Hispania* vol. 57, pp.484-494.
- Wasa, Atsuko (1999) "El subjuntivo y la modalidad", *Hispania* vol. 82, pp. 121-127.
- Yasaka, Kyoko (2000) "La selección modal en la cláusula relativa", *Sophia Linguistica*, vol. 46/47, pp.55-71, Sophia University, Tokio.
- 会田由、長南実 (1962) 『テーブル式スペイン語便覧』、評論社。
- 上田博人 (2011) 『スペイン語文法ハンドブック』、研究社。
- 江藤一郎 (2003) 『基本スペイン語文法』、芸林書房。
- _____ (1994) 「時事スペイン語における”接続法過去形”について」、『外国語教育』20、天理大学、pp.1-12。
- 出口厚実 (1997) 『スペイン語学入門』、大学書林。
- 寺崎英樹 (1998) 『スペイン語文法の構造』、大学書林。
- 西川喬 (2010) 『わかるスペイン語』、同学社。
- 久松健一 (2012) 『仏検対応[5~2 級レベル] 久松健一のフランス語 Q&A350』、国際語学社。
- 福寫教隆 (2004) 「aunque 節中の叙法について(2)」、『神戸外大論叢』55:6、神戸市外国語大学、pp. 111-131。
- _____ (2007) 「イスパニア語の感情を表す語句に導かれる接続法について」、『神戸外大論叢』58:3、神戸市外国語大学、pp. 53-72。
- 町田健 (2002) 『言語学的に言えば』、研究社。
- 三宅陽子 (2010) 「スペイン語の関係節中における接続法の用法に関する一考察」、『研究科論集』13、神戸市外国語大学、pp.1-14。
- 宮本正美 (1981) 『スペイン語接続法入門』、厚進社。
- 三好準之助 (1992) 「相対最上級の接続法：『キホテ』の場合」、『ロマンス語研究』、25, pp. 41-48、日本ロマンス語学会。
- _____ (2005) 『スペイン文法中級コース』、白水社。
- 山田善郎 他 (1995) 『中級スペイン文法』、白水社。
- 吉川美恵子 (2007) 『接続法を使って話そうスペイン語』、NHK 出版。
- 和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ 叙法とモダリティの接点』、くろしお出版。
- _____ (2009) 「スペイン語最上級構文における接続法」、『言語研究』137、pp. 103-104、日本言語学会。

_____ (2009) 「スペイン語最上級構文における接続法」、『日本語学会 第 139 回大会
予稿集』、 pp. 152-155、 日本語学会。

電子コーパス

CORPUS DE ESPAÑOL (Mark Davies) <http://www.corpusdelespanol.org/x.asp>

Corpus de Referencia del Español Actual (CREA) <http://corpus.rae.es/creanet.html>

Esgueva, Manuel y Margarita Cantarero (1981) *El habla de la ciudad de Madrid: Materiales para su estudio*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Instituto 'Miguel de Cervantes', Madrid.

LEXESP CORCO (1998) *Léxico informatizado del español*. - Edición CD-ROM. Caso Veloso, Vicente (ed. Rodríguez Hontoria, Horacio), Univers. Barcelona, Barcelona.